

ふくい2030年の姿・Ⅱ

—私たちの暮らし つながる希望と幸福—

2009（平成21）年3月

「ふくい2030年の姿」検討会

はじめに

2005年3月に「ふくい2030年の姿 -25年後のふくい 夢と希望の未来像-」（前報告書）を作成してから4年が経過しましたが、この間、中国のめざましい経済発展や石油をはじめとするエネルギーの高騰など、これからの世界のあり方に大きな影響を及ぼす出来事が続きました。

また、規制を廃し市場に全てを任せるという新自由主義・市場原理主義の行き過ぎが、アメリカ発の金融危機とそれを発端とした世界不況や、都市と地方、正社員と派遣社員など格差の拡大、世界的な環境破壊をもたらしたとの批判が強まっています。これを受け保護主義的な揺り戻しなどが起きていますが、新しい世界の形はまだ見えてきません。

2007年6月に、検討会のメンバーを大幅に入れ替えて、この報告書の作成に着手しましたが、作業を進める過程でも社会経済情勢は大きく変動しました。前報告書では、福井の25年間の変化を多くのデータから読み取り将来を予測しましたが、現在の大きな動きがどのように将来に影響を及ぼすのか、まだ現在のデータだけでは計りきれません。

このため、今回は、福井を取り巻く環境の変化を大学や研究機関などの先進的な知見や研究成果などから学び、理解し報告書に反映しました。また、2007年11月に実施した「福井の暮らしをよりよくするためのアンケート」の結果などを踏まえ、福井の特長を活かした「暮らしの姿」について検討し、2030年の世代ごとの物語を、私たちの夢も織り込みながら描こうと考えました。

前報告書が2030年の「社会全体の姿」を描いたのに対し、この報告書は2030年の社会における福井人の「暮らしの姿」を描いており、前報告書の続編と位置付けられます。また、この報告書では、描いた2030年の姿を実現するための「行動」についても考え、「希望の輪」と「地域の幸福度（QOC）」の活用を提案します。

この報告書を作成する過程では、東京大学社会科学研究所希望学プロジェクトや東京大学総括プロジェクト機構ジェロントロジー寄付研究部門の先生方をはじめ様々な大学、研究機関、企業の方々から多くのアドバイスやご意見をいただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

前報告書とこの報告書を併せた2030年の姿は、まだまだ十分なものではありませんが、報告書を読んでもらった方々が、2030年の自分の姿を思い描き、そのための行動を起こす一助となれば幸いです。

2009（平成21）年3月

「ふくい2030年の姿」検討会

目 次

第1部 ふくい2030年の暮らし	1
第1章 「ふくい2030年の姿」見直しの視点	
1-1 前報告書の概要と見直しの視点	1
1-2 つながる希望と幸福	5
第2章 ふくいを取り巻く環境の変化	16
2-1 グローバル化	18
2-2 環境とエネルギー	28
2-3 科学技術（イノベーション）	33
2-4 人口の大都市問題	39
第3章 ふくいの暮らしの特長	44
3-1 家族の希望が広がる	45
3-2 健康長寿を楽しむ	52
3-3 食のメイドイン福井	62
3-4 働き方で一人ひとりが輝く	70
3-5 教育が夢をはぐくむ	77
3-6 交通は楽しく優しく	83
3-7 自然・環境を活かす	92
3-8 地域でつながる	100
第2部 2030年のふくい物語	108
第1章 2030年の世代の姿	109
第2章 2030年のふくい物語	124
(蟹田家の物語)	
2-1 子どもの生活・・・【子ども世代】	125
2-2 父親・母親の生活・・・【壮年世代】	132
2-3 祖父母の生活・・・【達年世代】	137
(仙水家の物語)	
2-4 若者の生活・・・【青年世代】	144
2-5 父親・母親の生活・・・【熟年世代】	150
2-6 祖父母の生活・・・【老年世代】	154
【参考資料】	
「ふくい2030年の姿」検討会 検討経過等	157
「ふくい2030年の姿」検討会 名簿	159
参考文献一覧	160

第1部

ふくい2030年の暮らし

第1部 ふくい2030年の暮らし

第1章 「ふくい2030年の姿」見直しの視点

1-1 前報告書の概要と見直しの視点

<前報告書の概要>

2005年3月に策定した「ふくい2030年の姿 -25年後のふくい 夢と希望の未来像-」（以下「前報告書」とする。）では、25年前の様々な基礎的データ等との比較分析や時代の変化を示すキーワードを手がかりとして、福井県を取り巻く社会経済情勢の変化、その歴史的背景、メカニズムの実態等を整理・分析し、メンバーの夢や希望を折り込みながら25年後の福井の未来像を描きました。

そして、人口が減少し、価値観の多様化が進む2030年の目指すべき社会像として、従来の「金（カネ）」や「物（モノ）」中心の価値観とは異なる、個人が自立した自分の生活をつくり、官民の役割を見直しより広い分野で民が官に頼ることなく自立し、地方も国から自立した、新しい価値観と生活感、豊かさを伴った「生活優先・自立社会」という基準を掲げました。

さらに、こうした社会を成り立たせるため、福井人の気質や考え方、生活スタイルを進化させた新しい価値観、生活感として、次の4つの新しい基準を打ち出しました。

○「みんなの価値観」から「一人ひとりの価値観」へ

価値観・ライフスタイルや仕事・雇用の「多様化」が進む中、社会的な人間関係において、人々の価値観は地域、職場など「集団」の中での均一、横並びといった「みんなの価値観」から、自分らしさや「個」の自由という「一人ひとりの価値観」に心のよりどころをおくという基準に転換していく。

しかし、自分らしさや個の自由を確立するためには、子どもから大人へ成長する過程で、「親」や「集団」から「自立」し、さらに自らルールを持ち「自律」することが必要で、できない場合は「孤（孤立・孤独）」に陥ってしまいかねない。

○「自己的な満足」から「ともに分かち合う満足」へ

これまでは、所得の上昇やマイホーム、車の取得など生活する上での「自己的な満足」を豊かさであると考えてきたが、物があふれる中、「自己的な満足」ではこれまでのように豊かさを感じられなくなる。

今後は、豊かさの基準が、「自己的な満足」を超えて、伝統、文化の継承・発展や生活のよりどころとしてのまちづくり、他人への奉仕などから得られる誇りやゆとり、思いやりなど「ともに分かち合う満足」へと転換していく。

○「内」から「外」へ

これまで福井人は、積極的に人の前に出るよりも1歩下がる、県外、海外に打って出るよりも、県内の内輪の競争で満足するといった「内」向きの気質が強かった。

2030年に向けて、グローバル社会が到来し、北陸新幹線や高規格道路などの交通基盤の整備が進むと、地域社会をオープンにし、「外」から積極的に人がやってくる環境づくりが必要となる。さらに、自ら積極的に外に向かい人と関わる中で常に外にいるような考えを持つことや、福井に住むということの豊かさを実感するため、外へ出て、他県や他国の実情を自分の目で見て、肌で感じ、自ら発信しなければならない。

2030年に向けては、これまでの福井人氣質の殻を破り、積極的に「外へ出る気風」を醸成していくことが必要となる。

○「消費」から「活用」へ

人口の減少や環境上の制約、自然保護の観点などから、これまでのように資源や食材をふんだんに使って新しいものや料理を大量に「つくり」、古いものや食べ残しを大量に捨てるような「消費」社会から脱却しなければならない。これからは、自らの判断で、既存のものを「いかし」、有効に無駄なく「活用」する社会に移行していくことが必要となる。

さらに、リサイクルの推進など消費・浪費を抑制し環境への負荷を低減する「循環型社会」、さらには植物由来原料や自然エネルギーなどを積極的に活用する「自然素材型社会」への移行が必要となる。

前報告書は、こうした社会像や福井人の新しい価値観、生活感を軸として、主に2030年の目指すべき「社会全体の姿」を、「産業・働き方」、「社会基盤」、「地域社会」、「人」の4つの未来像として描きました。

それから4年が経過しましたが、この間に「ともに分かち合う満足」を具体化させた『ふるさと納税制度』や『ママ・ファースト運動』など、「内から外へ」の考え方を反映した『考福学』や『ふくい帰住の推進』、「消費から活用へ」を目指した『おいしい福井食べきり運動』など4つの新しい基準に基づいた制度・政策を展開し実現してきました。こうした成果は、先進的な施策として県外からも高い評価を得ています。

<時代の転換>

現在、世界の社会経済の流れが大きく変わろうとしています。新自由主義・市場原理主義が世界中に広まり、十数年来アメリカ系金融資本を中心に虚構の繁栄を謳歌してきましたが、金融商品の信用崩壊等から金融危機を引き起こし、多くの企業が破綻し、世界経済を大混乱に陥れています。

アメリカ社会は、個人の利益を中心に構成される「自己責任の社会」であり、生活の様々な場所で個人に強いストレスがかかるとともに、個人間に激しい競争を生む「競争社会」です。アメリカ型の自由主義的資本主義社会は、圧倒的多数の敗者を生み、アメリカには、十分な医療や教育を受けられない何千万人も国民が存在します。しかし、アメリカも、新自由主義・市場原理主義から転換するのではないかとわれています。

一方、ヨーロッパ社会、特に北欧は、個人がお互いに協力し、支え合うことを重要な原理とする「連帯社会」であり、ヨーロッパ型資本主義とも呼ばれています。オランダのワークシェアリングやフィンランドの教育などが、成功事例として取り上げられるなど、北欧型の社会システムが再評価されています。もちろん、北欧などは「高福祉・高負担」であり、高負担に対する国民の合意がなくてはこうした制度は成り立ちません。

最近では、国民総幸福（Gross National Happiness）を国の理念とするアジアの小さな王国が注目されています。そこでは、環境を劣化させ野生の動植物の生態を脅かす工業・商業活動が法律で禁止され、その一方で医療と教育は原則無料とするなど「国民が幸せを感じられる国づくり」が進められています。

アメリカ型の競争社会が行き詰まりを見せ、北欧型の連帯社会が見直されるなど、今、私たちは大きな時代の転換点にいるのかもしれない。

しかしながら、時代の転換点のただ中では、その動きをデータ等で検証することは困難です。このため、大学や研究機関などの先進的な知見や研究成果あるいはNHKの「視点論点」などを参考に、2030年の福井を考えるために必要な大きな環境の変化として、「グローバル化」、「環境とエネルギー」、「科学技術（イノベーション）」、「人口の大都市問題」の4つの課題を抽出し、その現状と今後の動向を調べました。

＜県民の価値観の転換－福井の暮らしをよりよくするためのアンケート＞

県では、2007年11月、「福井の暮らしをよりよくするためのアンケート（以下「県民アンケート」という。）」を実施しました。

その結果、福井県に住むことに満足している人の割合が8割を超え、雇用環境や子育て・福祉の充実、治安の向上など、身近な日常生活の基盤となる事柄に「暮らしの質」を見出す傾向のあることが明らかになりました。

また、各分野の重要度を見ると、生活の満足度が全体として高い中で、個々人がそれぞれ、様々な分野により高いレベルの欲求を持つなど「一人ひとりの価値観」への転換が進んでいることも読み取れます。

そこで、今回の報告書では、2030年の福井人の「暮らし」に視点を置き、2030年の「暮らしの姿」を描きたいと考えます。そのため、暮らしの基盤であり、福井に生きる人々の暮らしの豊かさの源泉ともいえる「地域」を中心に分析し、「地域の質」について検討します。

具体的には、アンケートの結果を踏まえ、福井の特長的な身近な日常の暮らしの8分野（「家族」、「健康」、「食」、「働き方」、「教育」、「交通」、「自然・環境」、「地域」）を抽出しました。

また、福井人の2030年の暮らしをよりわかりやすく分析するために、「世代」という概念に着目しました。世代が背負っている歴史を知りその特性を把握することにより、2030年における各世代それぞれの地域の助け合いや男女の役割などに対する意識の違い、それが地域社会や働き方、家族のあり方などに与える影響を重層的に検討し、世代ごとに暮らしの姿を描いていきます。

1-2 つながる希望と幸福

2030年の姿は予測するものではなく作り上げていくものです。

2030年の姿を実現するためには、一人ひとりが自分の価値観に基づく「一人ひとりの希望」を持ち、その実現を目指して「行動」することが必要です。さらに、「一人ひとりの希望」が「みんなの希望」につながり、ともに分かち合う満足として広がっていかねばなりません。そうすることによって、暮らしの基盤である地域について一人ひとりが関心を持ち、さらに暮らしの質をより良くするための行動に結びつくものと考えます。こうした行動が地域に住む一人ひとりの幸福につながると思います。

このため、本報告書では、県民の「希望」の実現を目指すための「行動」をチェックするシステムとして「希望の輪」を、また、「地域の質」の指標として『地域の幸福度「QOC (Quality of Community)」』を活用することを提案します。

この二つを組み合わせることによって、今後大きく時代が変化したとしても、福井に住む一人ひとりの2030年に「つながる希望と幸福」を描いていけるのではないかと考えます。

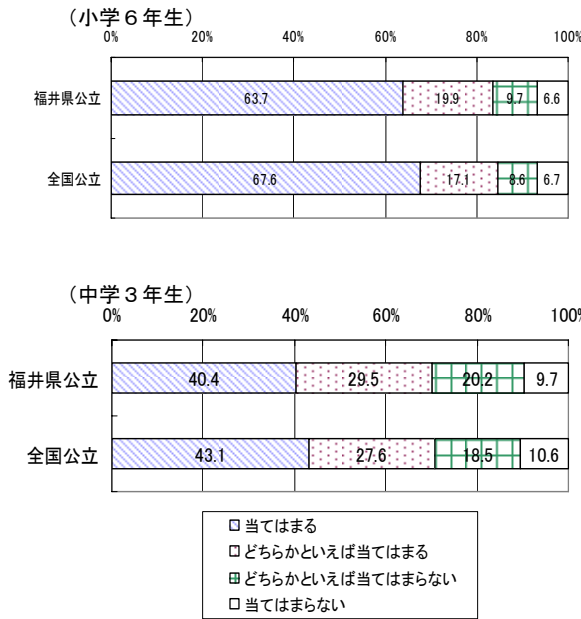
<希望の輪>

前報告書では、副題を「25年後のふくい 夢と希望の未来像」としました。未来に夢や希望を持つことが大切であることは誰も分かっています。しかし、現代社会においては、価値観が多様化し、暮らしが豊かであるがゆえに、共通する希望や新たな希望を見出せないという状況が見られます。

また、全国の小学6年生、中学3年生を対象に行われている学力・学習状況調査の結果をみると、福井県の子どもたちの学力は全国トップクラスの成績を収めていますが、同時に行われたアンケート調査の結果によると、「将来の夢や目標を持っている」と答えた子どもの割合は全国に比べても低い状況にあります。

ただ、こうした傾向は石川県、富山県でも同様に見られることから、北陸地方に共通する住民気質なのかもしれませんが、意欲を持っていろいろな分野に積極的にチャレンジする子どもたちを増やしていくためには、将来への夢や希望、目標をしっかりとほぐくむ教育が必要です。

「将来の夢や目標を持っている」子どもの割合
(平成20年度全国学力・学習状況調査)



将来の夢や目標を持つ子どもの割合
(都道府県別の位置)

順位	都道府県名	割合
1	宮崎県	74.0%
2	鹿児島県	73.7%
3	山口県	72.3%
	(全国平均)	67.6%
36	富山県	65.2%
44	福井県	63.7%
45	石川県	62.9%
46	島根県	62.6%
47	鳥取県	62.4%

順位	都道府県名	割合
1	宮崎県	48.7%
2	鹿児島県	46.5%
3	徳島県	46.2%
	(全国平均)	43.1%
39	福井県	40.4%
42	富山県	39.8%
45	石川県	39.4%
45	滋賀県	39.4%
47	新潟県	39.3%

同調査では、学校に対するアンケート調査も実施されていますが、「生徒に将来就きたい仕事や夢について考えさせる指導をしている」中学校の割合は、福井県が61.6%（全国平均：38.8%）で全国1位となっています。

今後も引き続き、学校においては子どもたちの夢や希望をはぐくむ指導に磨きをかけるとともに、各家庭においても、わが子の夢や希望を実現していくための助言、応援をしていくことが強く求められます。

このような状況の中で、2030年の福井で夢や希望を持ち続けるためにはどうしたらよいか、また、そのために、我々は何をするべきなのかを検討するため、東京大学社会科学研究所の希望に関する研究成果（希望学）を取り入れ、福井の一人ひとりの希望と地域の希望について考えました。

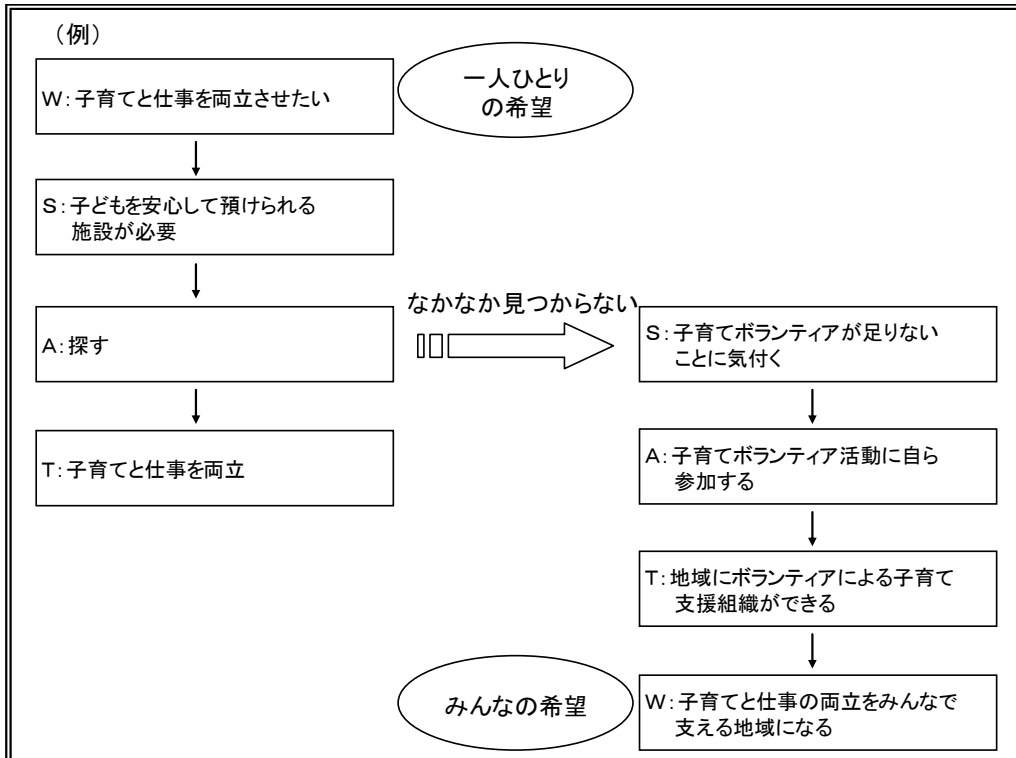
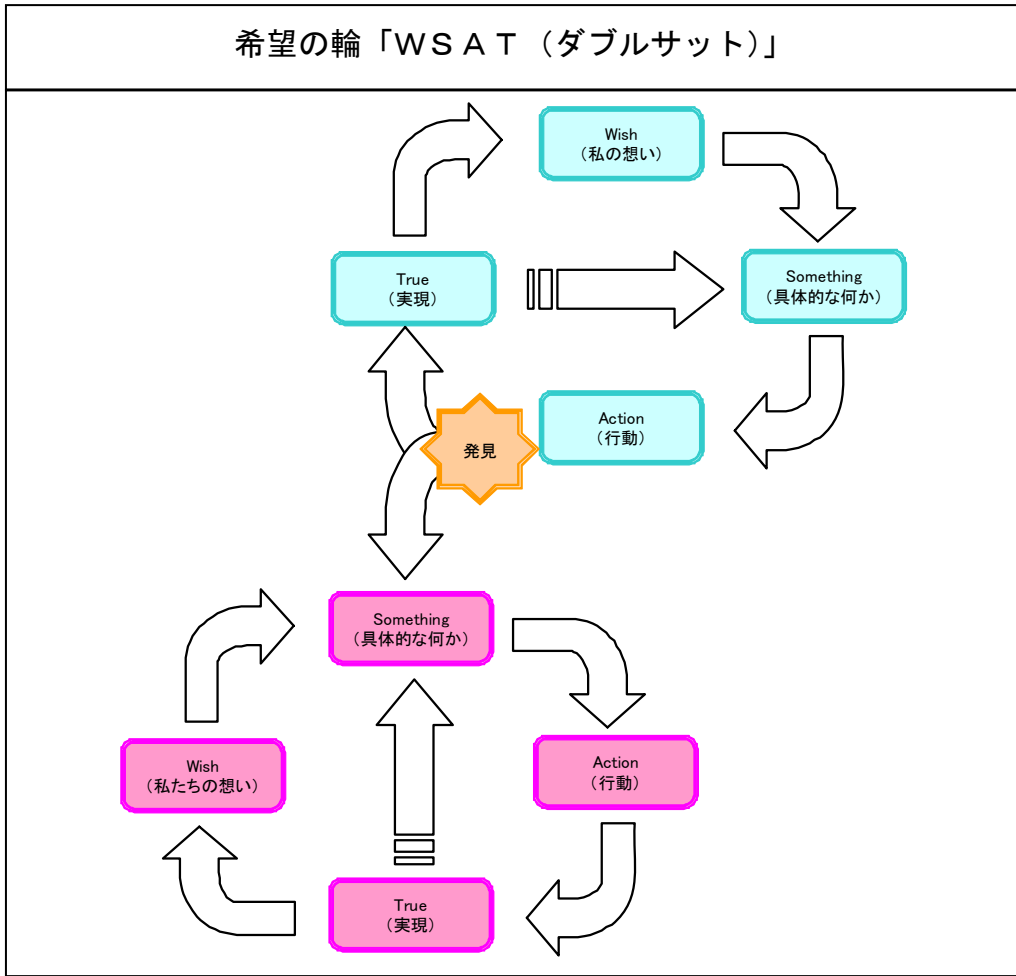
希望学では、「希望」は「現状を変えるために必要なもの」、「変革の力」と位置づけ、「幸福」は「続いてほしいもの」、「維持したいもの」としています。また、希望は過去から未来へ時間という軸で語るものであり、幸福は現在の表象と位置付けています。

「希望 (A wish for something to come true by action)」は、分解すると「想い (Wish)」、「具体的な何か (Something)」、「行動 (Action)」、そして「実現 (True)」の4つになります。この4つのポイントをチェックしていくシステムが、「WSAT (ダブルサット)」＝「希望の輪」です。

希望の輪 (WSAT) では、一人ひとりの希望が起点となりますが、希望の実現に向けて行動していく過程で、希望の実現にはウィークタイズ (ゆるやかなつながり) と呼ばれる人とのつながりや周囲のサポートが必要であるなど、様々な「発見」が起こります。そして、サポートしてくれた人も含めたみんなが幸せになるにはどうしたらよいか、自分だけでなくサポートしてくれたみんなの希望も実現するにはどうしたらよいかということを考え、対話するきっかけとなります。

このように、希望は、実現に向けて「行動」していく中で、一人ひとりの希望からみんなの希望へと広がり、さらに新たな希望へと輪がつながっていきます。そこで、希望の輪 (WSAT) を、「一人ひとりの希望」が「みんなの希望」に広がる、また、県民が「ともに分かち合う満足」を体感できるシステムとして位置付けます。

しかし、希望はいつも実現するわけではありません。時には、挫折して希望を見失うこともあります。しかし、多くの福井人が希望の輪 (WSAT) を意識し、行動することで、挫折した人でも温かく受け入れ、また次の希望に向けて応援してくれる土壌ができていくと考えます。利己的なウィッシュリストではなく、多くの人々が共有できる利他的な希望を一人ひとりが自分の中に持つことが重要となります。



さらに、希望の輪（WSAT）は、県民の想いを実現する、PDCA（Plan（計画）、Do（実行）、Check（評価）、Act（改善））に代わる新しい希望のチェックポイントとして、長期的な目標とその実現を目指した行動を考えるツールとしても活用していただけると思います。また、希望を持たせる授業に取り組みながら「将来の夢や目標を持っている」子どもの割合が低い福井で、子どもたちが夢や希望を考えるための教材としても使えると思います。

①希望の輪（中学生バージョン）

W：いつも自分を温かく見守ってくれているおじいちゃん、おばあちゃんが暮らしやすい地域にしたい。

↓

S：自分たちのまちの様子や住んでいるみんながどのような暮らしを望んでいるかを調べて、自分のできることを考える。

↓

A：自分ができることをやってみる。

↓

T：地域の暮らしの質が高まったかどうかを考えてみる。

（みんなの地域に対する意識が高まったかどうかを考えてみる。）

②希望の輪（小学生バージョン）

W：やりたいことを考えてみる。

↓

S：どうすればできるかを3つ考えてみる。

↓

A：やってみる。

↓

T：できたかどうかを考えてみる。

（できた場合は、なぜできたのか、できなかった場合は、なぜできなかったのかを考えてみる。）

<地域の幸福度「QOC (Quality of Community)」>

幸福については、これまでも、幸福に影響を与える要因が研究され、経済企画庁（現内閣府）が発表していた新国民生活指標（いわゆる豊かさ指標、現在は廃止）など家計、雇用、社会資本の整備状況等を指数化したものが、幸福度や満足度の指標とされてきました。また、現在、医療や介護の分野では個人の生活（life）の質を指数化し評価するQOL（Quality of life）が利用されています。

しかし、少子高齢化や家族の細分化、人間関係の希薄化などが進行する中、2030年には、一人ひとりの幸福に対し、「地域の質」が与える影響がより大きくなると考えられます。そのため、個人の暮らしに着目した指標だけではなく、地域の信頼関係や規範、ネットワークなどソーシャル・キャピタル（社会関係資本）の視点を取り入れて、これまで以上に地域の人々が自分の住む地域のことを考えることが必要です。

また、希望と幸福の関係においても、一人の希望がみんなの希望に広がり、その希望が幸福につながるためには、みんなで共有できる指標が必要であると考えます。

このため、本報告書では、地域に着目した暮らしを支える社会インフラやサービスに加え、ソーシャル・キャピタルの状況などを評価項目とする『地域の幸福度「QOC (Quality of Community)」』を福井人が共有する指標として位置付けたいと考えます。

本報告書のP13に、QOCの評価項目例を示しましたが、この項目を考えるに当たっては、「県民アンケート」において、県民が「現在の暮らしに重要」、「将来の暮らしに重要」と回答した項目を参考にしました。

県民アンケートでは、「安心して十分な医療が受けられること」、「自然や生活環境（空気、飲み水など）が豊かで美しいこと」など、17項目についてアンケートを行っています。そのうち、「現在の暮らしに重要」、「将来の暮らしに重要」と回答した上位の項目は、次のとおりです。

○現在の暮らしに重要

	項目	割合（複数回答）
1	治安や交通安全が保たれていること	64%
2	安心して十分な医療が受けられること	63%
3	十分な災害対策がとられていること	60%

○将来の暮らしに重要

	項目	割合（複数回答）
1	高齢者がいきいきと元気に生活し、必要な介護が受けられること	63%
2	安心して十分な医療が受けられること	59%
3	自然や、生活環境（空気、飲み水など）が豊かで美しいこと	50%

この県民アンケート結果から、県民が、**医療・介護や安全・安心な生活、自然・生活環境**などを重要に思っていることが分かります。

さらに、東京大学で高齢者や高齢社会の諸課題を総合的に研究している「東京大学総合プロジェクト機構ジェロントロジー寄付研究部門（以下「ジェロントロジー寄付研究部門）」という。」では、高齢者の生活の質（QOL）を規定する3つの主要因として「身体と精神の健康」、「収入・資産などの経済状況」、「家族・友人・近隣などの社会関係」を挙げています。

今後、本格的な人口減少、高齢社会を迎える中、高齢者を中心とした暮らしが地域の暮らしの質にも大きく影響するものと考えます。

ジェロントロジー寄付研究部門の生活の質の要因を地域の質の要因に置き換えると、「身体と精神の健康」は「**地域の医療・介護等の状況**」および「**安全な食べ物の供給状況**」、「収入・資産などの経済状況」は「**地域のインフラや経済などの状況**」、「家族・友人・近隣などの社会関係」は「**地域活動（ソーシャル・キャピタル）などの状況**」と言い換えられます。

以上のことから、暮らしやすい地域に必要な項目をまとめると、「衣食住」を進化させた、

- 「移」・・・ 地域インフラが整備され、自由に人・情報が行き交う地域
- 「医」・・・ 心身ともに健康で安心を感じられる地域
- 「食」・・・ 食が安全・安心に供給される地域
- 「楽」・・・ 地域活動（ソーシャル・キャピタル）などが活発で人々が楽しめる地域
- 「住」・・・ 安全・安心で自然・環境が豊かな地域

の5つの分野に大まかに区分できると考えます。

さらに、この「移、医、食、楽、住」の5つの分野の中で、具体的にどのような項目が暮らしの質に必要なようになってくるのかを検討しました。

ただし、地域の暮らしで必要な項目は、都市部と農村部では異なり、さらに、その地域に暮らす人の年齢構成などでも異なるものです。今回提案したQOCは地域に暮らす人々が主観的に捉えるべきものと考えます。そのため、人々が求めるQOCは常に進化し、以下に示した評価項目もこれに限定されるものではありません。また、地域により、評価項目が全く異なるものになる可能性もあります。

大切なことは、人々がQOCを意識すること。さらに、QOCの評価項目を地域の人々が自ら考えることで、その**地域と向き合い、何が地域に必要なのか**を考えることです。

例えば、地域の小中学生が、自分たちのQOC項目を考え、具体的に調査してみてもおもしろいのではないのでしょうか。調査の中で、**地域での新しい発見や人との出会いがあったり、地域の一員として自ら取り組むべきことや役割**などが見つかったりするのではないかと考えます。

そこで見つかった自ら取り組むべきことや役割を希望の輪(WSAT)で行動に移す、こうしたサイクルがつながることで、ふくい2030年の姿が実現していくものと確信します。

地域の幸福度「QOC (Quality of Community)」の例

大分類	中分類	小分類	具体的な内容と調査項目
移	移動手段の状況	コミュニティ交通	<ul style="list-style-type: none"> ・定期運行のコミュニティバスがある ・バスの巡回先に医療機関、商店街、公共交通機関への接続駅等が含まれている ・コミュニティ交通の運営に住民が参加している ・乗り合いバス・タクシーのサービスがある <p><主な調査項目></p> <ul style="list-style-type: none"> ・コミュニティバス・路線バスのバス停の状況や利用状況 ・平日の自家用車の利用頻度
	歩行者・自動車の状況	まちづくり	<ul style="list-style-type: none"> ・歩行者に優しいまちのデザインになっている ・歩行者・自転車・小型電動低速車両用に車道・歩道の空間が再配分されている ・意識して、歩行や自転車利用などを行っている人が多い <p><主な調査項目></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ユニバーサル・デザインを取り入れた施設数 ・子ども、高齢者が歩いて移動する割合
	情報の移動の状況	地域情報	<ul style="list-style-type: none"> ・高速情報ネットワークが整備されている ・回覧板や地域情報誌で地域情報が発信されている <p><主な調査項目></p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報ネットワーク(情報のインフラ) ・地域ホームページ・タウン誌等の数
医	介護・医療の状況	健診	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の人が何でも相談できるようなかかりつけ医(総合医)がいる ・かかりつけ医が健康状況を長年に渡って記録している ・かかりつけ医と専門医の連携がスムーズである ・医師会等が訪問診療のサービスを行っている ・薬の配達をしてくれる <p><主な調査項目></p> <ul style="list-style-type: none"> ・かかりつけ医の数 ・医療機関のネットワークの充実
		介護	<ul style="list-style-type: none"> ・独居老人でも自分で元気に外出することができる ・一人の高齢者に対して複数人で介護している <p><主な調査項目></p> <ul style="list-style-type: none"> ・デイサービス数 ・地域の介護士資格者数
	健康づくりの状況	寿命	<ul style="list-style-type: none"> ・地域住民の平均寿命が長い ・特定健康診査を気軽に受診する環境にある <p><主な調査項目></p> <ul style="list-style-type: none"> ・平均寿命 ・特定健康診査の受診率
	心の状況	笑い・やすらぎ	<ul style="list-style-type: none"> ・落語の開催など、人が集い、笑う機会が地域で設けられている ・地域に気軽に相談したり、あいさつする人がいる <p><主な調査項目></p> <ul style="list-style-type: none"> ・演劇、落語等の開催数 ・安らぎの場所の数

大分類	中分類	小分類	具体的な内容と調査項目
食	食の安全・安心の状況	地産地消	<ul style="list-style-type: none"> ・旬の農作物を提供してくれる農家があるか、または、農作物を都市の人へ提供をしている ・地域で共同管理している農園がある <主な調査項目> <ul style="list-style-type: none"> ・地産地消率 ・シュレパーガルテンの数
		食の継承	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の伝承料理を学ぶための料理教室が開かれている ・地域の小学校等で食育が実施されている <主な調査項目> <ul style="list-style-type: none"> ・伝承料理を作ることができる人の割合 ・食育を行っている学校数
		水	<ul style="list-style-type: none"> ・安全でおいしい水が飲める <主な調査項目> <ul style="list-style-type: none"> ・おいしい水の数 ・水道の水がおいしいと思う人の割合
		外食	<ul style="list-style-type: none"> ・定期的に外食して、多様な食を食べることができる <主な調査項目> <ul style="list-style-type: none"> ・こだわりレストランなどの飲食店数
	食の提供の状況	デリバリー	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢者等の自宅まで食が提供されるサービスがある ・食料品の移動販売や買い物代行のサービスがある <主な調査項目> <ul style="list-style-type: none"> ・高齢者向け配食サービス ・移動販売や買い物代行の充実
楽	きずなに関する状況	人の集り	<ul style="list-style-type: none"> ・住民同士の情報交換の場所がある ・同窓会や、パーティーなどの地域外の人と交流する機会が設けられている ・地元自治体や地域に寄付をしている <主な調査項目> <ul style="list-style-type: none"> ・井戸端(雑談できる場所)の数 ・同窓会・パーティーの数 ・地元自治体への寄付件数
	地域活動の状況	地域の活動	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の拠点施設の公立小中学校に人が集まるようになっている ・公共空間が地域の共有のものと意識されている ・地域の達人が小中学校で課外授業を行う環境が整っている ・地域の住民が地域の活動に関わり合う仕組みになっている <主な調査項目> <ul style="list-style-type: none"> ・地域活動、イベントに参加する人の割合 ・地域の公共空間を清掃する時間 ・地域の達人による課外授業の開催頻度 ・コミュニティビジネスに参加している人の割合
		たまり場	<ul style="list-style-type: none"> ・文化サークルがあり、住民が参加している ・多くのスポーツクラブがあり、スポーツを通して他の地域との交流が促進されている ・地域の公園に、屋外で食事ができるような施設がある <主な調査項目> <ul style="list-style-type: none"> ・地域での文化サークルの数 ・スポーツをする人の数 ・公園を利用する人の数
地域への愛着の状況	歴史	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の歴史を知る人が多くいる。また、その人を通じて地域の歴史が語り継がれている ・古い建物を保存しようとする意識が高い <主な調査項目> <ul style="list-style-type: none"> ・地域の歴史の語り部の数 ・古い建物の数 	

大分類	中分類	小分類	具体的な内容と調査項目
住	地域の共同体としての状況	つながり	<ul style="list-style-type: none"> ・地域内であいさつを交わす環境がある ・転入者に対して、地域が説明会を開催するなど、地域に溶け込みやすい仕組みがある ・地域の多くの人が子育てに関わっている ・農作物や、季節の贈り物を他の地域へ贈るような交流がある <p><主な調査項目></p> <ul style="list-style-type: none"> ・地区の小中学校へ行く頻度 ・子育て(子ども)に関わる人の数 ・贈り物(おすそ分け)の数
	地域の安全の状況	防犯	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもが公園や学校で安全に遊べる ・犯罪がなく子ども・高齢者にも安全・安心な地域である <p><主な調査項目></p> <ul style="list-style-type: none"> ・公園や学校で遊ぶ子どもの数 ・刑法犯認知件数 ・自主防犯・防災の組織の数
	地域の経済・人物の状況	資源の活用	<ul style="list-style-type: none"> ・食の安全への関心の高さや経済的、精神的豊かさとして畑付き1戸建て住宅が増加している ・空き地や空き家が管理され、その活用方法が考えられている <p><主な調査項目></p> <ul style="list-style-type: none"> ・畑付き1戸建て住宅数 ・不動産活用率
		人物	<ul style="list-style-type: none"> ・各専門分野の第一線で活躍する人が多く輩出されている ・社会のルールを守れる人が多い <p><主な調査項目></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ヒーロー率 ・タバコ・空きカンのポイ捨ての数
自然・環境の状況	自然・環境	<ul style="list-style-type: none"> ・家の周りの生き物の数 ・もったいないの気持ちで生活している人の数 ・リサイクル品を利用している <p><主な調査項目></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ホタルやメダカの生息地域の広さ ・1人当たりの食べ残しの量 ・1人当たりの不燃物ゴミの量 	

第2章 ふくいを取り巻く環境の変化

前報告書では、福井を中心としたデータを収集し、分析しましたが、ここではより広い視点からデータ等を集めて、その動向を分析し、福井の2030年に与える影響を検討します。

2030年までの長い視点でみると、世界規模の変化や新たなテクノロジーは我々の暮らしに影響を及ぼします。

このため、特に福井の暮らしに影響を与えると考えられる「グローバル化」、「環境とエネルギー」、「科学技術（イノベーション）」、「人口の大都市問題」の4項目について考察します。

2008年秋以降、行き過ぎた金融のグローバル化が破綻しましたが、現在、中国やインド、ロシアなどのBRICs、あるいはアフリカなどが世界市場で台頭してきており、また、高度情報化の進展や高速交通網の発達により、国や地域のボーダレス化が進み、どの国や地域も世界全体を考えなくては生きていけないグローバル化が、引き続き進行していくと予測されます。

こうした時代背景の中、「グローバル化の中の福井」、「アジアや世界から見た福井」といった新たな視点や新たなデータ、資料を用いて福井の特徴を再評価し、2030年の未来像を検討します。

また、現在、私たちの身近な環境とエネルギー問題として、地球温暖化や石油価格の高騰、バイオエタノールの導入など大きな社会変化が生じていますが、こうした動きが福井の2030年にどのような影響を与えるのかを検討します。

さらに、2030年までの間には、様々な新しい技術や考え方が生み出され、社会あるいは生活に大きな変化が起きると考えられます。政府が2007年に策定した「イノベーション25」や日本学術会議が取りまとめた「科学者コミュニティが描く未来の社会」などを参考に2030年の未来像を検討します。

一方、大都市が抱える問題は、地方にも大きな影響を与えます。首都圏をはじめとする大都市は、地方から若年人口を吸収し続けるにもかかわらず、今後急速に高齢化して活力を失い、大都市と地方が共倒れになるおそれがあります。2030年に向けて大都市と地方はどうあるべきかを検討します。

前報告書では、福井に関連した様々な基礎的データ等やキーワードを手がかりとしましたが、今回は東京大学社会科学研究所希望学プロジェクトや東京大学総括プロジェクトジェロントロジー寄付研究部門、(株)博報堂生活総合研究所、(株)コンポン研究所など大学や研究機関と積極的に連携し、最新の学術研究成果を参考とするとともに、研究者の方々との意見交換などを通じて、福井に関する新しい知見の習得を目指しました。

2-1 グローバル化

<概要>

人・モノ・カネ・情報のボーダーレス化・グローバル化は、世界の経済情勢の低迷により、一時的に停滞する可能性があります。今後もその動きは進展するものと考えられます。

福井が抱える課題の多くは、日本の課題・世界の課題と共通してきています。世界の大きな課題としては、発展途上国の人口増加等による地球規模の持続可能性の危機、国際競争の激化と南北格差の拡大などがあります。また、現在、経済成長著しいアジア各国では、今後、少子高齢化が進んでいくことが予想されます。

福井に生きる私たちは、福井独自の文化や技術を活かして、アジアや世界と友好関係を結びつつ、世界共通の課題解決に貢献する必要があります。福井は全世界的に見ても少子高齢化が進んでいる地域の一つであり、福井での少子高齢化社会を生きる経験は、アジアの少子高齢化対策に活かすことができます。

<2030年に向けた課題>

グローバリゼーションとは、「人々の結びつきが、次第に拡大し、全世界的規模に到達する歴史的趨勢（トレンド）」のことを意味します。近代という時代が、概ね国民規模（nation-wide）で再生産を中心とする暮らしが成立していた時代とすれば、現代は人々の生活が世界規模・地球規模（world-wide）の相互作用のもとに展開する時代です。

グローバリゼーションは、近代の終わりを意味するものではありません。「グローバリゼーションとは近代性のグローバルな拡大である。」（Tomlinson, 1999）といわれるように、近代社会の特性が全世界に広がり浸透していく過程であるという視点から捉える必要があります。

グローバリゼーションの成立過程は、3つの時期に分けられるといわれます。

- ① 18世紀までのグローバルな想像力の生成期
- ② 1850年頃から1950年頃までのグローバリゼーションの始動期
- ③ 1960年代から現在までのグローバリゼーションの本格期

そして、1960年代以降グローバリゼーションが本格的になった契機として次の4つのことが指摘されます。

- 核兵器使用の戦争に対する危機意識
- 地球環境の劣化による自然環境保護の必要性

- IT革命に伴うグローバル・エコノミーの進展
- マルチメディアの発展、特に映像メディアによるコミュニケーションの大衆化

2008年の米国発の金融危機は全世界に広がり、世界の金融市場をパニックに陥れただけでなく、実体経済にも影響を及ぼしています。一つの企業、一つの国の判断の過ちが、かつては想像できなかった速さで世界的な経済の危機を招くことを教えられました。

また、情報通信技術の発展により、国際間の情報交信・コミュニケーションは今後さらに活性化し、グローバル化の進展はますます加速することが予想されます。

グローバル化・ボーダレス化の進展により、福井が抱える課題も、世界共通・人類共通のものが多くなっています。

一方、グローバル化が進む中で、自分たち独自の生活スタイルや産業のあり方なども見直され、ローカルなもの、地域の独自性が再発見され、再生していきます。ローランド・ロバートソンは、グローバルとローカルが弁証法的に進んでいく過程を示すために「グローカリゼーション (glocalization)」という造語を提唱していますが、福井においても、福井のローカルなものや世界規模のグローバルなものが互いを刺激し磨きあいながら、新しい社会を形づくっていくと考えられます。

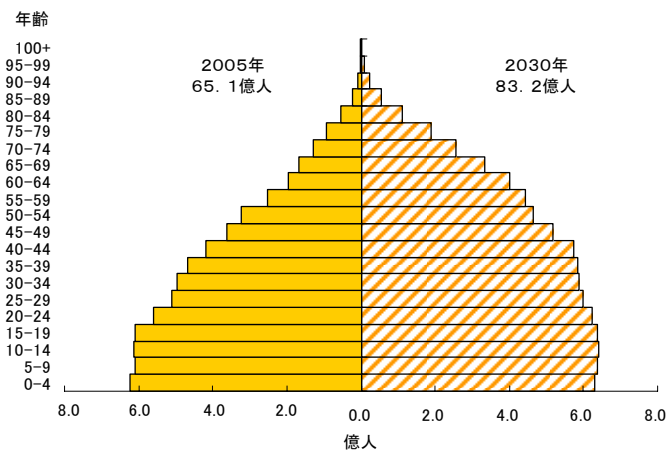
集落の助け合いが不可欠な「稲作を中心とした農業文化」、繊維や眼鏡などの製造業など、福井の「米作り・ものづくり」を基盤とした産業や文化が、グローバル化の影響を受けつつ、さらに進化を続け、「福井型ハイブリッドモダン」と呼ばれる独自の文化や産業が産み出されることが期待されます。

※「福井型ハイブリッドモダン」とは、モダン（欧米型近代）と福井の土着・伝統とがミックスした産業や文化のあり方を指します。米作りや繊維・眼鏡産業、三世同居・近居、地域の助け合いといった福井の経済・社会のあり方と近代工業・ICT・金融・個人主義などが結び付き独自の進化を遂げた産業や文化です。

1 地球規模における持続可能性の危機

- 世界の人口は、今後も爆発的に増加して、国連の予測によれば、2030年には、83億2千万人になると予測されています。2005年の65億1千万人に比べて、約18億人(27.6%)増加します。

世界の人口ピラミッドの変化(2005-2030)



出典：総務省統計局「世界の人口の推移」

- 人口増加に伴い、資源・エネルギー需要が急激に増加します。エネルギーが化石燃料系資源でまかなわれた場合、地球温暖化が進み、その影響により、全世界で水・食料問題が深刻化することが予想されます。

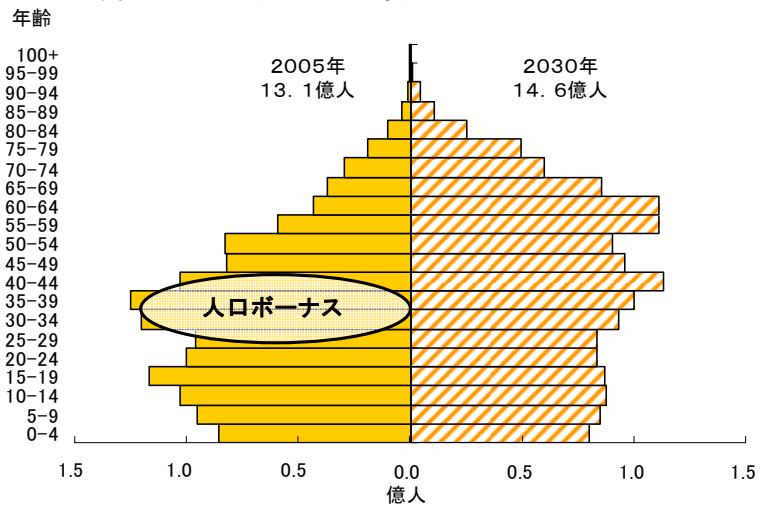
2 国際的競争の激化

- アジア、アメリカ、欧州を中心とした経済が進展する一方で、特定の地域間でのFTA(自由貿易協定)の締結とネットワーク化も進展することが予想されます。また、BRICsのような新興国が現われる一方で、最貧国から抜け出すことができない国や地域も多く、国際間格差を解消することは容易ではありません。
- ICT(情報通信技術: Information & Communications Technology)、ナノテクノロジー、バイオテクノロジー等の科学技術の進展と新産業の発展に伴い、各国が世界中の研究者等の人材獲得にしのぎを削り、国際的な競争が激化します。日本も最先端の科学技術研究に対する投資が必要となります。
- 高齢化問題は、先進国に特有の問題ではなく、アジア地域や開発途上国を含めた世界的な問題「グローバル・エイジング(Global Ageing)」となると推測され、高齢者の視点も取り入れたユニバーサル・デザインの地域づくりが必要となります。

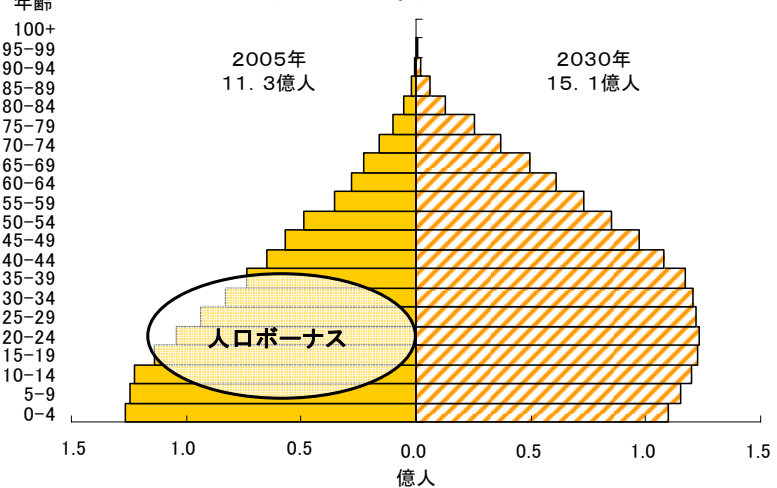
3 アジアの経済成長とその限界

- ・国連によると、アジアの人口は、2030年には37億6154万人となり、2005年の31億1885万人に比べて、6億4269万人（20.6%）増加すると予測されています。

中国の人口ピラミッドの変化（2005-2030）



インドの人口ピラミッドの変化（2005-2030）



出典：United Nations, World Population Prospects: The 2006 Revision

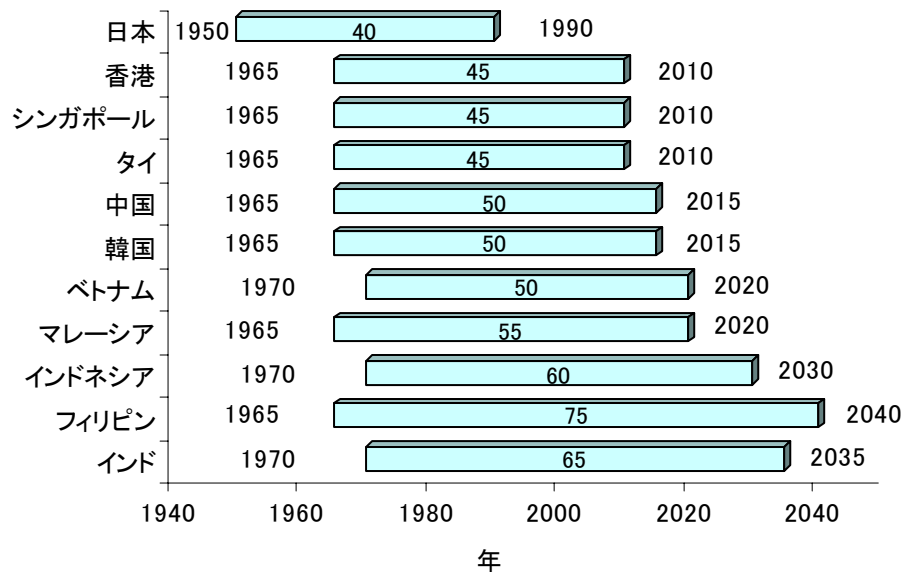
- ・「アジアの奇跡」といわれる高い経済成長が続きますが、経済成長を支えた人口ボーナス（生産年齢人口の割合の高さが経済発展を後押しする作用）の効果が2015年頃から薄れるといわれます。これに伴い、経済発展は次第に減速することが予想されます。また、アジア各国では、都市部の成長の一方で、農村の過疎化・高齢化が進み、都市と地方の問題が大きな課題となってくると考えられます。

<人口ボーナスの終点>

日本：1990～1995年（バブル崩壊の時期とほぼ一致）

韓国・台湾などのNIES、中国、タイ：2010～2015年

アジア諸国の人口ボーナスの時期



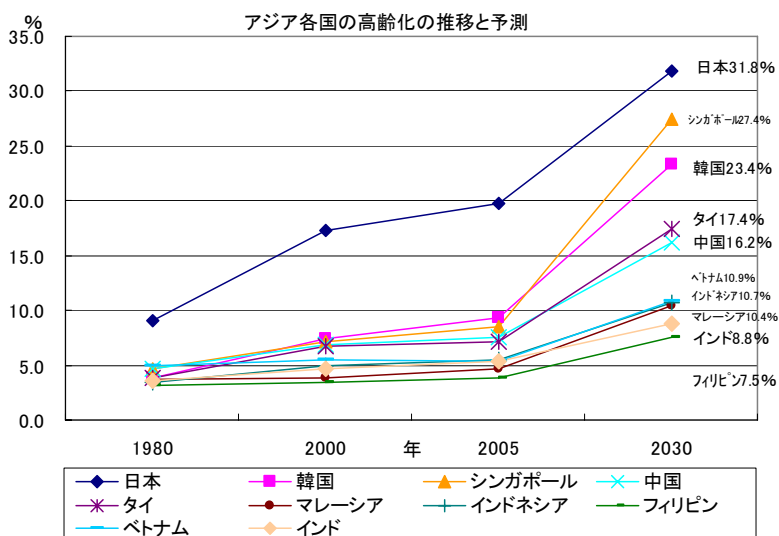
資料：United Nations, World Population Prospects: The 2004 Revision

注：1. 人口ボーナス期間は、従属人口が低下を続ける期間。5年ごとの数字で計測

2. 2006年以降は日経センターが予測

出典：小峰隆夫「超長期予測 老いるアジア」

- ・人口ボーナスの階層が高齢化することにより、アジア各国の社会全体が急速に高齢化します。2025年には、アジアの高齢者は、4億1207万人になると予想されています。これは、2005年の2億1437万人に比べて、1億9770万人（92.2%）増加することになります。
- ・アジアは「老年人口爆発の時代」に入り、世界で最も高齢者の多く住む地域となり、2030年には老年人口（65歳以上）は欧州の2.5倍となることが予想されます。
- ・アジアで製品を作っている日本の企業では、従来のような安い労働力の確保が困難となります。また、アジア向けの製品・サービスも高齢者向けに変化します。
- ・高齢者が増加することから、アジアでは、高齢者の医療・介護などの人々の健康に関する問題が課題となります。日本は、先に高齢社会を経験し、特に福井は、健康長寿な地域として、持続可能なコミュニティを目指し、また、アジア共同体として、アジアの健康に関する問題に積極的に関わっている必要があります。



高齢化率・合計特殊出生率・人口増加率

	高齢化率 (%)				合計特殊出生率 (人)		年平均人口増加率 (%)	
	1980	2000	2005	2030	1990	2005	2010-30	2030-50
日本	9.1	17.3	19.7	31.8	1.5	1.3	-0.39	-0.71
N I E S								
韓国	3.8	7.4	9.4	23.4	1.6	1.1	-0.03	-0.67
台湾			9.6		1.7	1.1		
香港			12.0		1.3	1.0		
シンガポール	4.7	7.2	8.5	27.4	1.9	1.2	0.63	-0.17
中国	4.7	6.8	7.6	16.2	2.1	1.8	0.38	-0.17
A S E A N 4								
タイ	3.8	6.7	7.1	17.4	2.2	1.9	0.31	-0.13
マレーシア	3.7	3.9	4.6	10.4	3.8	2.7	1.18	0.58
インドネシア	3.4	4.9	5.5	10.7	3.1	2.3	0.78	0.30
フィリピン	3.2	3.5	3.9	7.5	4.3	3.2	1.38	0.69
ベトナム	5.0	5.5	5.4	10.9	3.6	1.8	0.98	0.42
インド	3.6	4.6	5.3	8.8	3.8	2.8	1.06	0.48
イギリス	14.9	15.8		21.6		1.8	0.36	0.19
イタリア	13.1	18.2		27.0		1.3	-0.13	-0.26
ドイツ	15.6	16.4		27.3		1.4	-0.19	-0.34
フランス	14.0	16.3		23.2		1.9	0.32	0.12
ロシア	10.2	12.3		18.9		1.3	-0.62	-0.69
アメリカ	11.2	12.3		19.4		2.1	0.76	0.47
世界	5.9	6.9		11.7			0.93	0.50

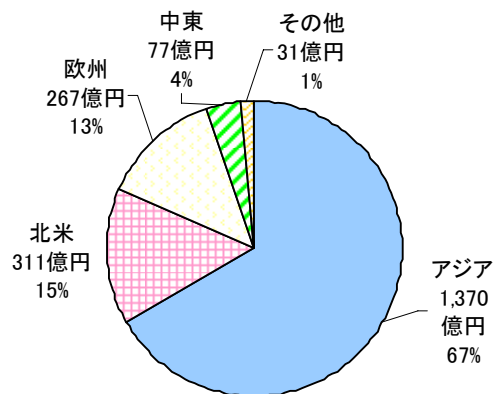
出典：United Nations, World Population Prospects: The 2006 Revision

4 グローバル化の中における日本の存在感の希薄化

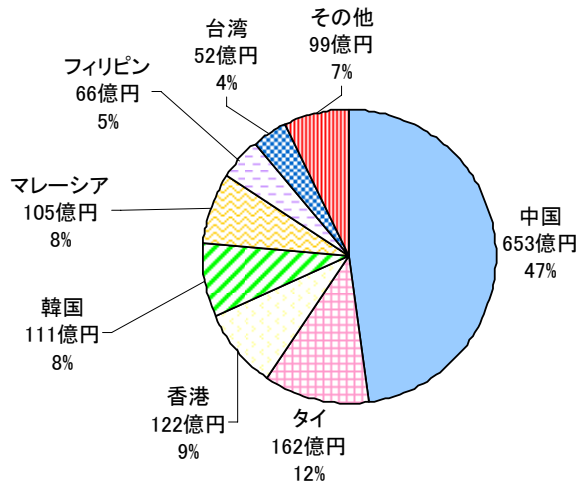
- ・日本の世界のGDPに占めるシェアは、2004年の13%から、2030年には10%未満に低下すると予測されています。一方、中国は、2004年の4%から2030年には10%以上になると予測され、経済における日本のアジア、世界での存在が希薄化すると考えられます。
- ・経済成長を続けるアジアから、日本への製品・サービスの流入が続くことから、県内企業の国際的競争力を確保する必要があります。
- ・また、日本は食料品を輸入に頼っていますが、食料を安定的に確保するには、アジアなどに過度に依存することを防止する必要があります。

福井県の輸出状況

福井県の地域（国）別輸出額
および割合（2006年）2,057億円

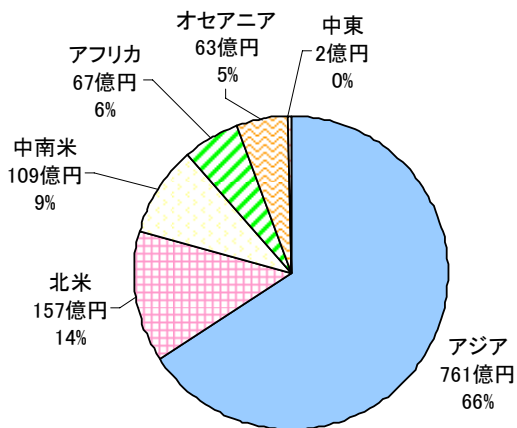


福井県のアジア地域への国別輸出額
および割合（2006年）1,370億円

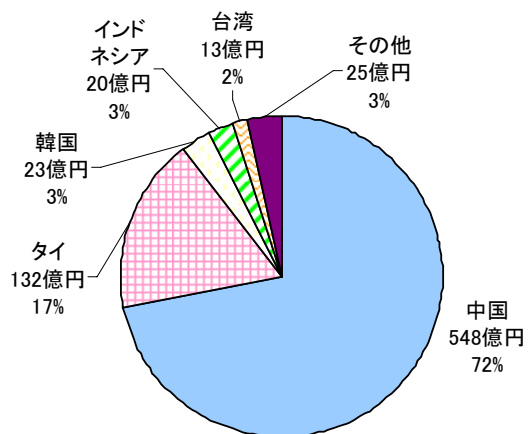


福井県の輸入状況

福井県の地域（国）別輸入額
および割合（2006年）1,373億円



福井県のアジア地域の国別輸入額
および割合（2006年）761億円



出典：福井県国際・マーケット戦略課資料

5 在福外国人の増加

- ・2007年末の福井県の登録外国人の数は14,104人で増加傾向にありましたが、2008年末には13,634人となり、前年比で470人減少しました。特に、ブラジル人が435人と大きく減少しており、景気悪化の影響を強く受けていると考えられます。
- ・全国と比較すると、「研修生」が多く、「留学生」が少ない傾向にあります。留学生や専門性の高い領域での外国人の増加を誘導していく必要があります。
- ・福井が、原子力産業関連の人材育成等で、アジアをはじめとする外国人を受け入れるために、共生の仕組みづくりが必要です。

県内の在日外国人の人員

(人)

	2003年	2007年	2008年
合計	13,318	14,104	13,634
中国	3,838 (28.8%)	5,151 (36.5%)	5,231 (38.3%)
韓国または朝鮮	3,899 (29.3%)	3,427 (24.3%)	3,318 (24.3%)
ブラジル	2,726 (20.5%)	2,975 (21.1%)	2,540 (18.6%)
フィリピン	1,480 (11.1%)	1,310 (9.3%)	1,306 (9.6%)

県内の在日外国人の資格別人員

(人)

	2003年	2007年	2008年
総数	13,318	14,104	13,634
永住者	4,283 (32.2%)	5,015 (35.6%)	5,227 (38.3%)
うち一般永住者	945 (7.1%)	2,202 (15.6%)	2,521 (18.5%)
特別永住者	3,338 (25.1%)	2,813 (20.0%)	2,706 (19.8%)
非永住者	9,035 (67.8%)	9,089 (64.4%)	8,407 (61.7%)
うち定住者	1,807 (13.6%)	1,708 (12.1%)	1,406 (10.3%)
日本人の配偶者	1,909 (14.3%)	1,742 (12.4%)	1,433 (10.5%)
留学	324 (2.4%)	354 (2.5%)	350 (2.6%)
家族滞在	196 (1.5%)	216 (1.5%)	244 (1.8%)
研修	1,355 (10.2%)	1,702 (12.1%)	1,692 (12.4%)

出典：福井県国際・マーケット戦略課資料

<ふくい2030年の姿>

- ・世界から留学生や研究者を福井に集め、世界に「知福派」を増やすとともに、福井で学び育った留学生、研修生などの「福育人」がアジアをはじめ世界で活躍
- ・恐竜、福井の食文化、大本山永平寺の禅文化、白山・平泉寺、若狭の国宝群、三世代同居・近居等、福井独自の文化・歴史遺産・自然を継承し、世界に向けその魅力を発信
- ・携帯型自動翻訳機が普及し、世界の人々と手軽にコミュニケーションができるようになるとともに、テレワークシステムが広がり、福井人が世界で活躍

【アジアをはじめとした世界との共創・共動】

- ・世界の少子高齢化社会のモデル地域として、福井独自のシステムを発信するとともに、アジアや世界の少子高齢化対策（福祉・医療・教育等）に貢献するなど、アジアや世界と共創、共動し世界的課題の解決を図ります。
- ・福井は、関西・中京・北信越圏のアジアやロシアへのゲートウェイとして、敦賀からウラジオストクまでを高速コンテナ船で結び、ウラジオストクからシベリア鉄道を経て欧州へ向かうという、大きな物流の一翼を担う地理的条件を活かした港湾づくり、交通体系の整備が進みます。
- ・若狭湾エネルギー研究開発拠点を中心として、福井（特に嶺南地域）で、アジア型標準化原子炉の開発、太陽光、バイオマス、水力、風力、海洋エネルギーなどの研究・実用化が進み、福井発の技術がアジアをはじめ世界に普及しています。
- ・アジアの原子力発電所の保守・メンテナンスを福井で研究を受けた研修生が担い、アジア地域での安全安心な原子力発電の運転を支えるなど、「福育人（福井で学び育ち、福井を身近に感じ、福井とつながりを持った人）」がアジアをはじめ世界各地で活躍します。

【福井文化の発信と交流】

- ・ 三世同居・近居、夫婦共働き、地域の助け合い等、高齢社会でも持続的発展が可能な「福井型生活スタイル」を進化させ、世界に向けて発信します。
- ・ 恐竜、福井の食文化、永平寺、白山・平泉寺、若狭の国宝群、白川文字学等、福井独自の文化、歴史的遺産、自然等を継承し、世界に向けて発信し、世界中から多くの人を呼び込みます。
- ・ 海外マーケット開拓、友好都市づくり、文化交流など、福井独自のネットワーク作りが進んでいます。また、留学生を積極的に受け入れ「知福派」を増やすとともに、積極的に世界に出る「世界を知る福井人」も増加します。
- ・ 福井のこだわりや感性を活かした商品やサービスを、高齢化が進む東アジア市場に提供しています。

【福井の技術による世界貢献】

- ・ 大学や研究機関、企業が核となり、原子力、新エネルギー、陽子線がん治療など、特色のある分野の研究者を世界から集め、アジアや世界に貢献する技術開発・教育を行います。
- ・ 世界的に水不足が深刻化する中、福井の技術と最新のナノテクノロジーが結合した水質変換技術等により、世界の水資源、水環境管理に貢献します。
- ・ 福井の稲作技術がアジア・アフリカで応用され、食料問題、環境問題の解決に寄与します。

【グローバル化を促進する技術・システムの活用】

- ・ テレワークシステムの活用により、福井人が世界の労働市場に進出するとともに、福井の企業が世界の労働力や知識を活用します。
- ・ 福井においても、携帯型自動翻訳機が普及し、世界から訪れた人々と円滑なコミュニケーションができるとともに、言語の壁なく世界を訪れることができるようになり、異文化理解が大きく進みます。また、アジア諸国に向けて福井発の文化や情報を簡単に発信できるようになり、アジア各国で福井の文化などが親しまれるようになっています。

2-2 環境とエネルギー

<概要>

原油や天然鉱物といった資源には限りがあり、いずれ枯渇するという事は、これまでも様々な場で議論されてきましたが、科学技術の進展がこれらの問題を解決するだろうという楽観的なとらえ方が先行し、福井県民を含め多くの国民も痛みを伴う対応にはあまり積極的ではありませんでした。

しかしながら、中国やインドといった新興国の爆発的ともいえる急速な経済発展により、世界的にエネルギーおよび資源の需要が高まったため、一転して将来への不安感が広がっています。

さらに、原油を起源としたエネルギー利用の増大に伴い、温室効果ガスの一つである二酸化炭素の排出量が増加しています。近年、気候変動が一因である大規模な干ばつや洪水が世界各地で発生するなど、地球規模での気候変動が大きな課題となります。

また、代替エネルギーの一つとして、バイオエネルギーが注目され、小麦等の食料生産から、トウモロコシのバイオ原料生産へシフトする動きが出ています。

こうしたことから、福井においても、再生可能なエネルギーの供給割合の増加や天然鉱物の再利用の徹底といった社会を構築する必要があります。また、福井が世界的な優位性を誇る原子力発電について、人材養成を中心に世界に貢献するとともに、その技術のメッカとしての役割を果たしていくことも期待されます。

<2030年に向けた課題>

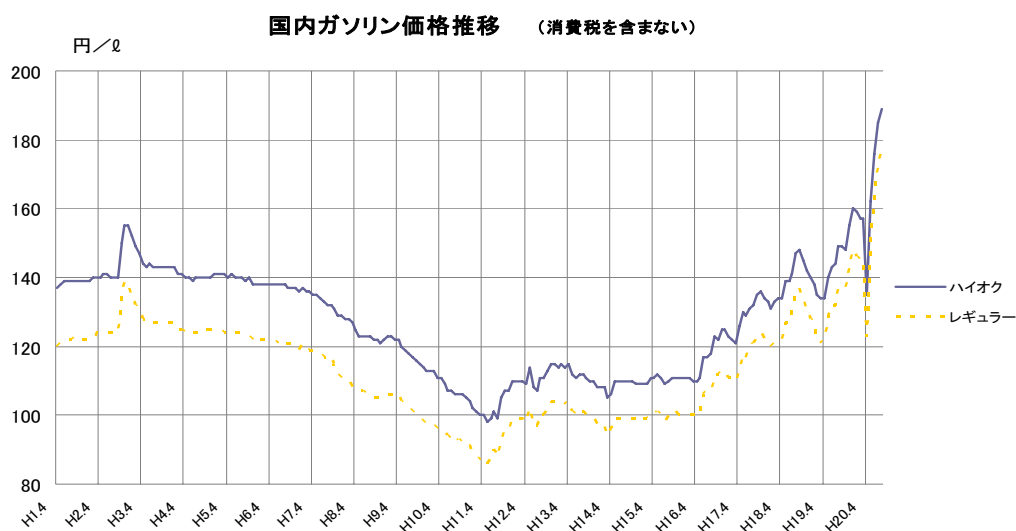
世界規模でのエネルギーおよび資源の需要の高まりは、エネルギー源を石油に依存した現在の生活を変えざるを得ない状況をもたらします。また、化石燃料の消費による温室効果ガスの排出量の増加は、地球環境の変化とともに、生活環境にも影響を及ぼします。

急激な生活環境の変化を引き起こさないためにも、身の回りでの地球温暖化防止のための活動を促進させるとともに、エネルギー不足、エネルギー転換に対応した社会全体の動きに合わせて、一人ひとりが省エネと家庭等でできるエネルギーの転換を進めていく必要があります。

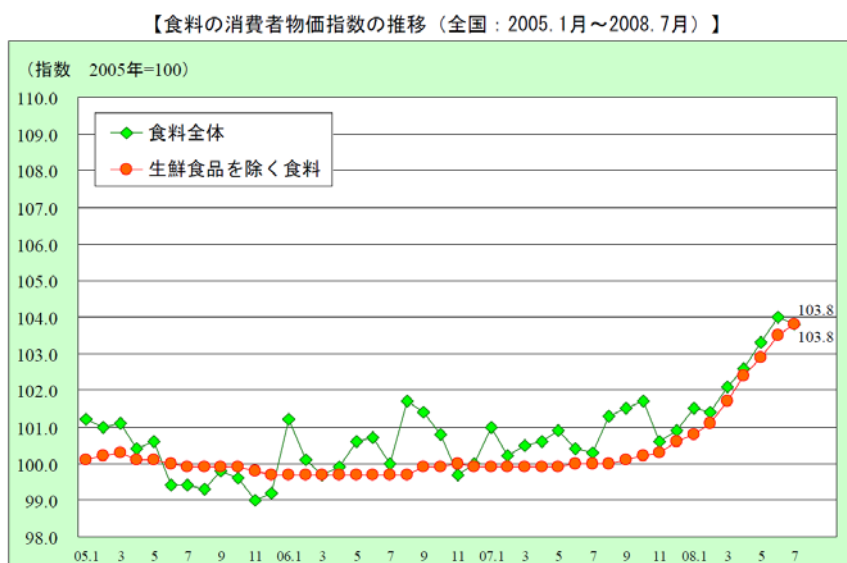
さらに、福井に集積した原子力技術を核に、新エネルギーの研究・開発を進める必要があります。

1 エネルギー・食料品の高騰、資源の枯渇

- 中国、インドなどの経済発展に伴い、今後も世界的に原油の需要は増加が見込まれることから、2008年夏のような原油価格の高騰による、ガソリン、電気といったエネルギー価格の上昇、また、これに伴う運搬コストの増加による食品・日用品などの高騰が懸念されます。
- 東アジアやインドの経済発展に伴い、プラスチック原料の高騰や稀少金属（レアメタル）資源の不足が深刻化します。



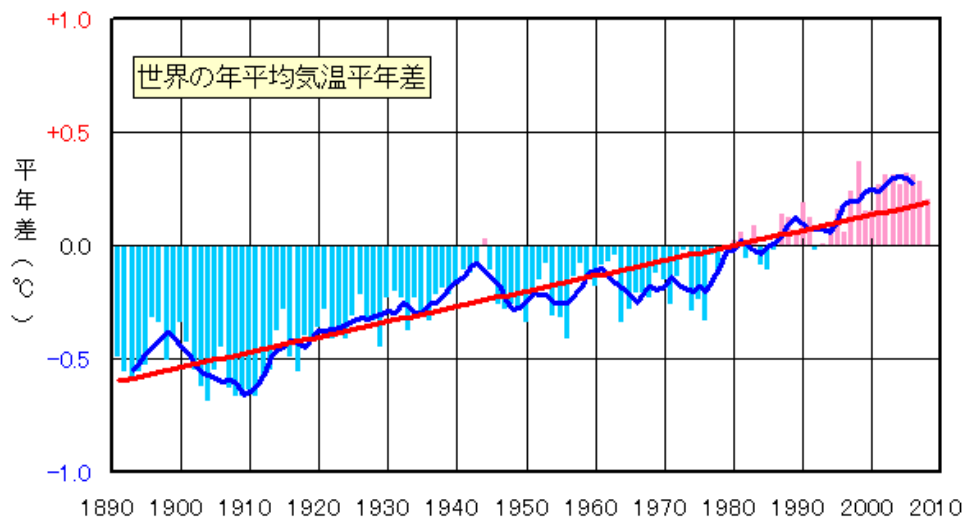
出典：福井県県民安全課資料



出典：総務省「消費者物価指数 (全国)」

2 地球温暖化問題

- 世界の年平均気温は、様々な変動を繰り返しながら長期的には100年当たり0.67℃（統計期間：1891年～2007年）の割合で上昇しています。
- さらに、IPCC第4次評価報告書では、地球温暖化の影響により21世紀末までに、世界平均気温は1.8℃～4.0℃上昇し、世界平均海面水位は最大で0.59m上昇すると予測しています。



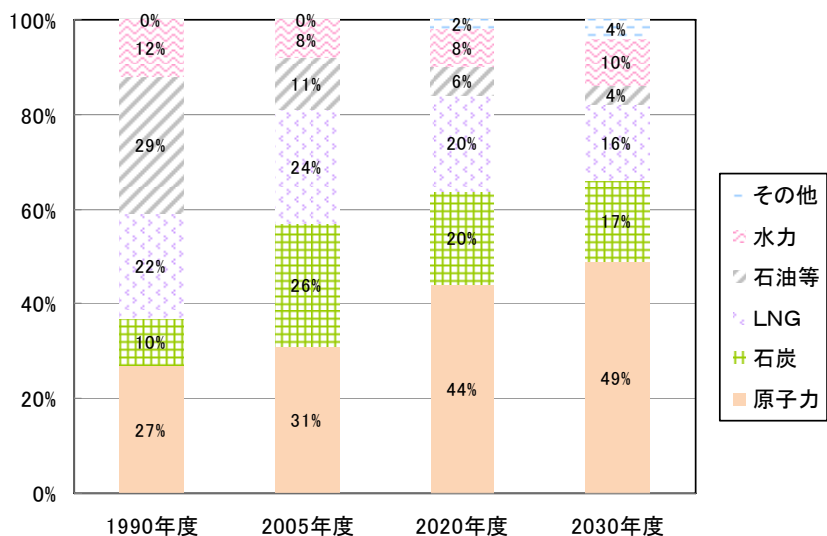
出典：気象庁「気候変動監視レポート2007」

- 地球温暖化が進行し、異常渇水による水不足や台風等の自然災害の発生増加による農業被害の発生確率が高まることが懸念されます。
- また、冬季の気温上昇により降雪量が減少し、水資源に恵まれている福井でも、地下水の水位低下や深刻な水不足が発生するおそれがあります。

3 低炭素社会に向けた動き

- 地球温暖化防止のため、省エネルギー活動などの運動が一部で始まっています。経済産業省によると、日本の2030年度の電源構成における原子力発電のシェアは49%に増加すると予測されており、原子力発電の重要性がますます高まっています。

最大導入ケースの電源構成



出典：経済産業省資源エネルギー庁「長期エネルギー需給見通し」

- ・また、太陽光発電等の新エネルギーの導入見込みは、約4%にとどまっており、さらなる普及の拡大が望まれます。
- ・化石燃料の代替燃料としてバイオ燃料の利用が拡大し、その原料は米やトウモロコシ等から、草や木といった食料以外の物への転換が進みます。

<ふくい2030年の姿>

- ・エコロジー教育等により、県民のエコロジカルな行動や省エネルギーが進むとともに、エコハウスの考え方が浸透し、太陽光発電と燃料電池を併用した家庭での電力の自給自足が普及
- ・エネルギーは化石燃料を中心とした炭素社会から水素などの新エネルギー社会への転換が進む一方で、世界中で原子力発電への依存率は高まり、福井の原子力技術が貢献
- ・バイオエタノールとガソリンの混合によるバイオマス燃料車が普及し、稲わらや間伐材など、福井で生産される農林業副産物を原料として活用

- ・環境に配慮して、化石燃料を中心とした炭素社会から、太陽光発電と燃料電池を併用した電力の自給自足が普及し、水素による発電が増加するなど、社会全体のエネルギー源の転換が進みます。
- ・福井は「安全な原子力発電のトップランナー」として、世界のモデルとなっています。世界中で原子力に関する人材不足が課題となる中、福井では、原子力発電所および大学等での人材養成の実績を活かし、世界中へ人材を輩出するとともに、中国・東南アジアをはじめ世界から多くの研究生・留学生を受け入れています。また、福井に原子力関連技術が根付き、特にメンテナンスに関する技術で、世界に貢献しています。
- ・バイオエタノールの製造に関する技術革新により、米やトウモロコシに代わって、稲わらや間伐材など農林業副産物が原料となっています。
- ・福井のナノテクノロジーを活用した容量小型電池の生産が可能となり、送電線に代わる実用的なエネルギー輸送方法の一つとして普及し、自動車や電車、船舶などでも利用されています。
- ・太陽光発電や雨水の高度処理、食品のリサイクルなどにより、家庭で消費するエネルギーのほとんどを自宅でまかなうエネルギー自立ハウスが普及します。
- ・学校施設はエコ施設として整備が進み、太陽光発電や野菜のカーテンなどにより、学びやすい環境が整備され、夏休み・冬休み期間中も学校で勉強や活動ができるようになります。
- ・省資源・省エネルギー社会が構築され、下取りされた使用済み製品は、稀少金属を含む金属類が回収された後、廃プラスチック類は完全に再資源化されています。

2-3 科学技術（イノベーション）

<概要>

人口や労働力の減少、高齢化、エネルギー・環境問題等、2030年に向けた課題の解決には、科学技術（イノベーション）の進展が欠かせません。ICTなどイノベーションの進展は、地域の地理的格差を縮小する契機にもなります。

環境・資源が重要な時代に、繊維や眼鏡など物を小さく作る福井の技術が、福井本拠の世界市場の新しい産業を産み出します。

また、健康・医療・介護、防災・防犯などの分野でもイノベーションが進み、より快適で安全・安心な生活が可能となります。

<2030年に向けた課題>

科学技術による解決が期待されている将来的な課題としては、生活の安全性や利便性の向上、人口・労働力の減少や高齢化への対応、社会の持続可能性やエネルギー問題・環境問題などが挙げられます。また、こうした課題解決に資する科学技術をはぐくむためには、研究環境の整備も欠かせません。

イノベーションの進展とICTの進歩は、地域の地理的な格差を縮小させます。福井においては科学技術と豊かな発想を組み合わせたイノベーションを起こしていくことが重要です。

1 内閣府「イノベーション25」における課題認識

- ・ 今後、日本および世界を取り巻く環境として、次の3つの潮流が考えられます。
 - ①日本の人口減少・高齢化の急速な進展
(日本の労働力の減少と、世界の経済勢力地図の変化)
 - ②知識社会・情報化社会およびグローバル化の爆発的進展
(知識・頭脳をめぐる世界大競争、世界中の消費者が外国の商品・サービスに容易にアクセス)
 - ③地球の持続可能性を脅かす課題の増大
(人口増加が、資源・エネルギー問題、環境問題、感染症問題等を深刻化)

- ・この3つの潮流の中で、日本のような人口減少国家における唯一の持続可能な経済発展の手段は生産性の向上であり、世界を視野に入れたイノベーションです。

<イノベーションの考え方>

- ・イノベーションとは、個人個人の能力を高めるとともに、情報化社会の利点も活用した「外」、「異」との融合、協働を通じ各人が能力を最大限発揮し、新たな科学技術・サービスで新たな付加価値を社会に生み出し、その結果、生活者の暮らし方等の社会に変化をもたらすもの。

出典：内閣府「イノベーション25」

2 2030年までに実現可能な科学技術例

(1) 家族

- ・家事・子育て・介護など、男女共立社会の社会生活と家族生活の両立をサポートするロボット技術や、家族や友人同士のコミュニケーションや楽しみを促進する技術などが進んでいます。

例) 生活支援ロボット、テレビ電話、3D再生テレビ、ポータブルディスプレイ、GPS端末や監視カメラのネットワーク化、自然災害の事前予測技術など

(2) 健康

- ・手軽に健康状態を把握し、診断に合わせた医療処置を可能にする技術や、個々人の特性合わせた「テーラーメイド治療」を可能とする技術、高齢者や障害者の身体機能を回復・補完する機械技術などが実現しています。また、人々の健康に対する意識の高さから、健康に関する産業はヘルスニューディールとして、新技術開発や雇用の受け皿など、産業の大きな柱になっています。

例) マイクロカプセルによる健康自己診断、医療情報システムによる早期適切治療、細胞治療・再生技術、遺伝子解析技術、感覚・機能補完用具 など

(3) 食

- ・消費者が生産から流通履歴を簡単に確認できるシステムや、伝統的な技術を最新のテクノロジーに生かす技術などが実現しています。また、農業分野では、天候の影響や品質管理や農作業などを軽減するテクノロジーが実現しています。

例) 食品タグ(超小型無線ICタグ)、発酵技術を活かしたバイオ燃料、節水型農業技術 など

(4) 働き方

- ・オフィスを持たずに事業運営を可能とするための技術や、様々な産業において労働力を補完する高度な産業ロボット製造技術が実現しています。

例) バーチャルカンパニー、ディスプレイ会議システム、自動翻訳機、テレワーク、各種産業用ロボット など

(5) 教育

- ・子どもの健全な発達を促し、学習や文化活動を促進するメディア技術や、身体的・心理的な状態を見守る技術が実現しています。

例) 思考力・創造力・コミュニケーション力の発達を促すメディア技術、非言語的な情報から意図を理解する技術、子どもを見守るための技術 など

(6) 交通

- ・交通事故原因となる人的要因を未然に防ぐ技術や、公共交通と低環境負荷の自動車や道路インフラが高度情報システムにより融合した新交通システムが実現しています。

例) 追突防止システム (ITS)、渋滞発生予測技術、交通需要把握技術 など

(7) 自然環境

- ・自然環境にやさしい製品技術や、悪化した環境を浄化する技術、限りある資源やエネルギーを有効に活用するための技術が実現しています。

例) 微生物を利用した毒物の除去技術、クリーン発電技術、水処理技術、大容量小型電池 など

(8) 地域

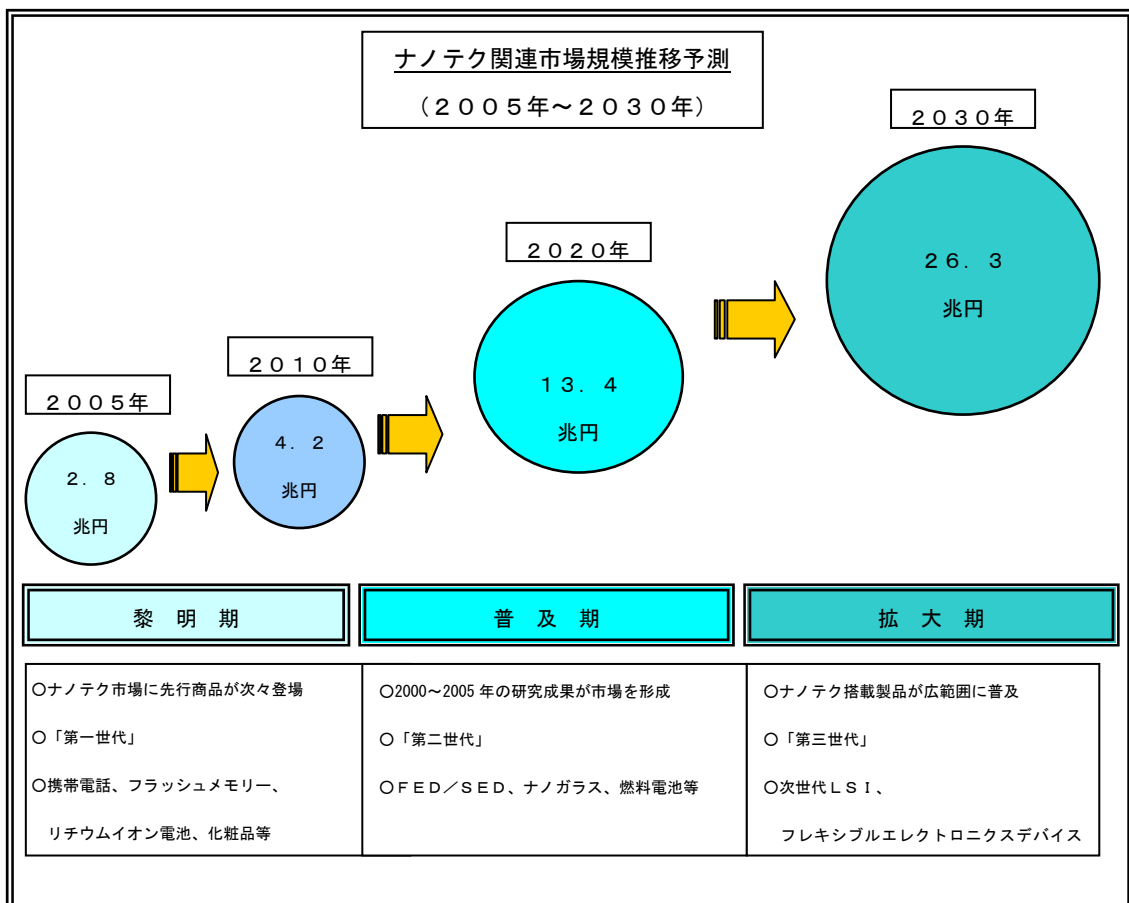
- ・不審者などから未然に危険を回避する技術などにより、子どもたちが外で安心して遊べるような安心・安全な地域づくりが可能となっています。

例) 超小型GPS端末、監視カメラのネットワーク化 など

参考：内閣府「イノベーション25」

3 ナノテクノロジーの市場規模予測

- ・ナノテクノロジーは、様々な産業分野に応用され得る基盤的な技術であり、今後ますます発展が期待される新しい技術分野です。カーボンナノチューブの分野は特に将来性が高いと考えられ、医療分野でも展開が期待できます。
- ・福井には、繊維産業や眼鏡産業、セラミック技術など、ものを小さくつくる微細加工技術（サイズリダクション）が豊富にあり、「軽薄短小」が福井の産業を貫くキーワードの一つと考えられます。普遍的に必要なが巨大すぎるものを「小型・軽量化」する技術から福井本拠の世界市場の産業が生まれる可能性があります。



出典：経済産業省「ナノテク関連市場規模動向調査」

<ふくい2030年の姿>

- ・ 福井型技術の特長として、「革新的な電気技術と世界一の軽薄短小技術」というコンセプトを共有し、世界的に貢献できる技術を創出
- ・ 科学、医療と健康的な生活習慣が融合した「生涯健康な福井」が実現し、様々な地域から多くの人が治療に訪れる。地域セキュリティシステムが導入され、災害や犯罪に強い「テクノウォッチ」社会を実現
- ・ 理数系教育の充実や産学官連携によりイノベーション先進地となり、テクノロジーを活かした新産業や多様な教育、新交通システムが広がり、快適な生活を実現

【革新的な電気技術と世界一の軽薄短小技術（世界に誇る産業創造）】

- ・ ナノテクノロジーをはじめとした「軽薄短小型テクノロジー」を中心に、福井発の世界に貢献できる技術の開発・普及が行われます。
- ・ サイズリダクションとともに、魅力ある「デザイン」がますます重視されるようになり、性能・デザインともに優れた福井発の「デザイン・テクノロジー産業」が盛んになります。
- ・ 熟練者の技能・ノウハウが若い労働者でも再利用・学習できるようなサポートシステムや技術教育プログラムの充実により、進歩しながらも継承される技術と、バーチャルカンパニーなどによる新たな企業スタイルを取り入れ、産業が活性化していきます。
- ・ 日本有数のエネルギー生産地である福井においては、他地域に比べエネルギーについての意識が高く、燃料電池や風力発電といった環境にやさしいエネルギーに関する研究開発や実用化が進むなど、クリーンテック集積地となっています。
- ・ 漬け物やみそ、へしこといった福井でもなじみの深い伝統食品のテクノロジーである「発酵技術」を活かしたバイオ燃料、新たなエネルギー源の研究・開発が進んでいます。

【科学と健康が融合する福井（生涯健康な社会の実現）】

- ・ 遺伝子情報の解析技術などにより、三大疾病やアルツハイマーなど難病の発病リスクを的確に診断し、「個」に対応したテーラーメイド医療や再生医療を行うことが可能となっていて、様々な地域から治療に訪れる人が絶えません。
- ・ 遺伝子情報の解析技術などによって様々な疾病の発病リスクなどを分析し、病気になる前から自分の体をケアできる予防医学が広まっており、福井ではより健康で、より長く生きることが可能となっています。
- ・ 要介護者の自立を促す介護ロボットの発達や、合成音声・人工網膜・視覚ゴーグルなど言語や感覚に障害がある人などに有用な補助具の開発が進み、家族や専門家が介護しやすい環境が整っています。
- ・ 高齢者の状態に応じて身体の機能をアシストする機器・システムが充実し、高齢者が自立した社会生活を長く続けることができるようになっています。

【テクノウォッチ（安全・安心な社会の実現）】

- ・ 災害監視衛星、通信衛星、GPS、無人飛行機などを利用して、災害や犯罪を監視する地域セキュリティシステムが導入されています。
- ・ 人命救助ロボットなど生命を救う分野においても科学技術が活用されることで、災害や事故、急病の際のレスキュー能力が向上し、福井ではより安全・安心に過ごすことができます。
- ・ 街中にはITS（高度交通道路システム：Intelligent Transport Systems）により制御された公共交通と自動車の融合型新交通システムが整備され、子どもや高齢者も安心して出かけることができます。
- ・ 社会のネットワーク化に伴うウイルスやハッキング行為の増加に対応するセキュリティサービス産業など、新しい技術による新産業が福井で発達しています。
- ・ 監視システムが発達する一方、個人のプライバシーがしっかり守られる制度・システムが設計されています。

2-4 人口の大都市問題

<概要>

人口の集中する大都市と人口減少の大きい地方。大都市は若者が集まり経済的に繁栄し、地方は高齢化が進み疲弊しているというイメージがあります。

しかし、これからは、大都市においても急速に高齢化が進み、また、若者がこれまでのように大都市に流入し続けることはなくなると考えられます。

「子どもを産み育てるなら地方で」という意識と行動が若者の間で広がり、また、農業や田舎暮らしのよさが見直される中で、大都市に住んでいた幅広い世代の人たちが地方を目指すようにもなります。

「平日は都会で仕事をし、週末は地方で暮らす」といった二地域居住も徐々に広がっていくことが予想されます。

大都市と地方とを対立図式で考えるのではなく、ともにそれぞれの希望を持ち、幸せに暮らせるような生活や社会づくりを進めていく必要があります。

<2030年に向けた課題>

2030年に向けて、大都市での急激な高齢化が進みます。一方、若者の流入はこれまでのように進むとは考えられず、空きビルや空き家が増えることが予想されます。

少子化は日本全体の課題ですが、特に少子化が著しいのは東京、神奈川、大阪などの大都市圏です。少子化は複雑な要因によるものと考えられますが、大都市では子育てをするのに十分なスペースのある住環境がないこと、また、親族や地域のつながりが弱く子育ての協力体制が不十分なこと、子どもの教育費用が高すぎることなどが考えられます。

大都市と地方との交流を活発化させ、大都市から地方への人口の移動を促進することにより、大都市も地方も活性化され、よい循環が生まれることが期待できます。

1 大都市で進む高齢化

- ・2015年には首都圏（東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県）の老年人口割合は約25%と、2000年時点で、全国で最も老年人口割合の高い島根県と同レベルに達します。

これに伴い福祉関連支出が大幅に増加し、財政を圧迫することが予想されます。

老年人口割合 (%)

	2000年	2015年	2030年
福井県	20.5	28.3	33.0
島根県	24.8	32.6	36.8
東京都	15.9	24.2	28.0
神奈川県	13.8	24.2	29.1
埼玉県	12.8	25.5	31.3
千葉県	14.1	26.2	31.9

出典：国立社会保障・人口問題研究所

2 生産年齢人口の減少とオフィスの過剰化

- ・大都市圏には団塊の世代をはじめとして、これまで多くの若者が地方から流入してきました。しかし、今後は少子化により、地方においても余剰労働力は少なくなるため、大都市への若者の流入は減少すると予想されます。

生産年齢人口 (万人)

	2005年	2015年	2030年
福井県	51.5	46.4	39.5
東京都	880.9	853.8	824.3
神奈川県	611.5	578.6	539.9
埼玉県	490.5	442.6	388.4
千葉県	417.0	377.9	336.4

出典：国立社会保障・人口問題研究所

- ・就業者人口の減少により、都心部でもオフィスが過剰となり、経済成長が鈍化し、オフィスの垂直スラム化や治安の悪化が懸念されます。

3 都市圏の低い出生率による人口減少

- ・首都圏の合計特殊出生率は低く、日本全体の人口減少に拍車をかけているのが現状です。大都市では子どもを持ちたくないのではなく、住環境や子育てにかかる費用を考え、子どもを産みたくても産めない家族も数多くいます。

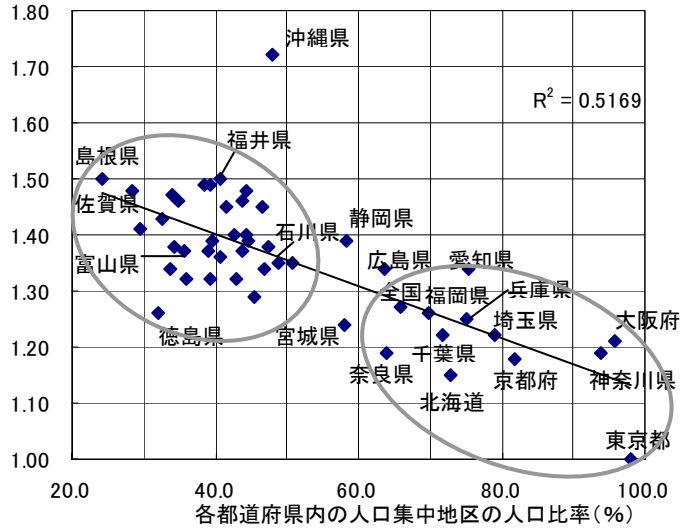
合計特殊出生率

	2005年	2030年
福井県	1.50	1.44
東京都	1.00	0.98
神奈川県	1.19	1.16
埼玉県	1.22	1.18
千葉県	1.22	1.18

出典：国立社会保障・人口問題研究所

- ・人口の集中と合計特殊出生率には、都市部への人口の集中が過度に進むと、合計特殊出生率が低下するという相関関係が認められます。
- ・人口の地方への分散を促すことは、国全体の人口減少対策としても重要であるといえます。

都道府県の人口集中と合計特殊出生率(2005年)



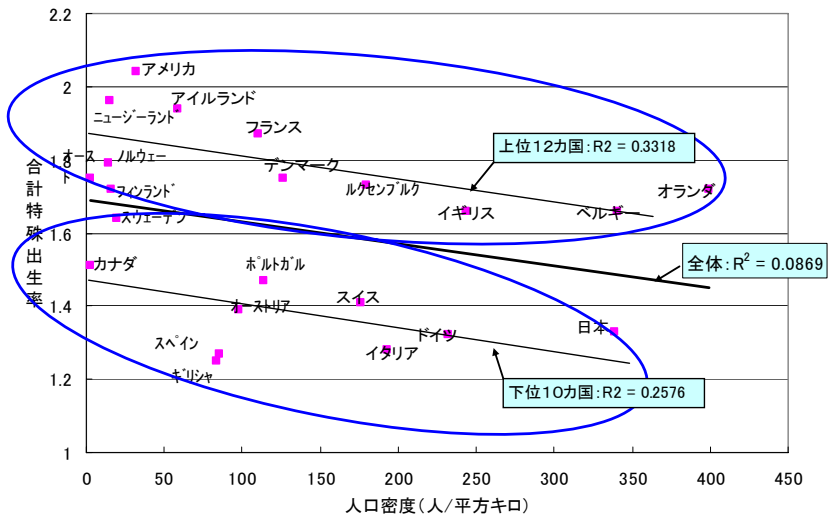
出典：「ふくい2030年の姿」検討会において作成

*人口集中地区とは、国勢調査区のうち、原則として人口密度が $k\text{ m}^2$ につき約4,000人以上のもので、市区町村のなかでそれらが互いに隣接して、その人口が合計して5,000人以上となる調査区の集まりをいう。

4 世界各国の合計特殊出生率

- ・OECD開発援助委員会加盟国の合計特殊出生率と人口密度の関係において、大きく2つのグループに分けることができます。

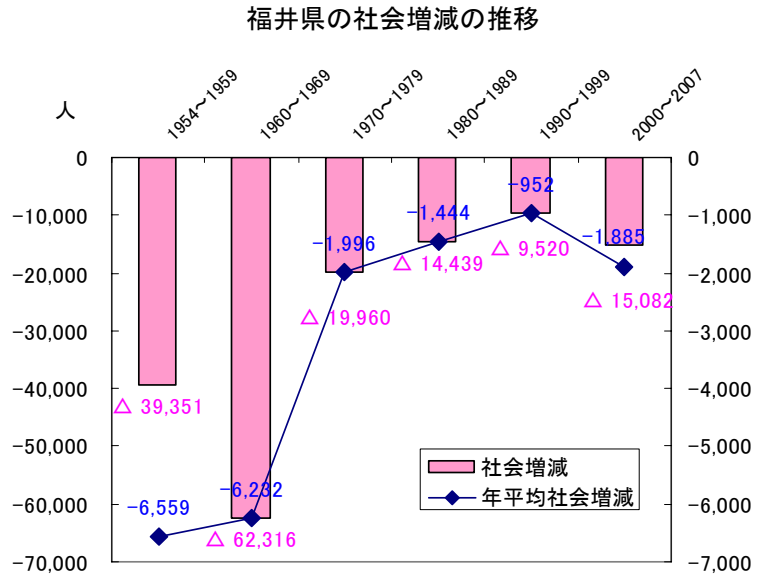
OECD開発援助委員会加盟国の合計特殊出生率



出典：国際調査報告から「ふくい2030年の姿」検討会において作成

5 福井からの人口の移動

- ・福井県の社会減は、1960年代をピークに、減少傾向にあります。
- ・1954年から2007年までに福井県から県外に転出した人は、約16万人（累計）になります。



出典：総務省「住民基本台帳人口移動報告」

6 大都市圏からの移住受入れ

- ・アメリカで今、「カレッジリンク型」と呼ばれる老人ホーム（リタイヤメントコミュニティ）が注目を集めています。これは、幾つになっても知的刺激や社会とのつながりを求め、積極的なライフスタイルを営もうとする人たち向けの大学と提携した老人ホームです。

入居者は、“リタイヤ”ではなく“リワイヤ（新たなつながりを創る）”を合言葉に、学生とともに授業を受け、時には学生の相談に乗り、専門知識がある場合は講師役を務めることもあるといいます。

福井でも、積極的なライフスタイルを営もうとする高齢者向けに「カレッジリンク型」や「アグリリンク型」など的高齢者コミュニティを作ることにより、大都市から高齢者の移住を受け入れていく必要があります。

<ふくい2030年の姿>

- ・大都市圏の青年世代が福井をはじめとする地方に分散し、地方で魅力ある企業が成長するとともに全国的に合計特殊出生率が回復。「子どもを産み育てるなら地方」という意識と行動が全国的に拡大
- ・首都圏をはじめとする大都市は高齢化が急速に進展するが、二地域居住や地方転居により達年世代（※）が地方に分散
※達年世代：60歳～75歳の人のこと
- ・“リタイヤ”から“リワイヤ”へ、カレッジリンク型やアグリリンク型など様々な高齢者コミュニティに大都市から移住者を誘致

- ・ニート、フリーターも含めた青年世代が地方に移住し、農業や地場産業等に就業するなど、地方経済活性化の原動力となります。
- ・県内の大学と連携したカレッジリンク型や農業の初心者から始められるアグリスクールと連携したアグリリンク型など、個性的な高齢者コミュニティが整備され、知的好奇心の高い高齢者がこうしたコミュニティに移住してきます。
- ・福井で生まれ育ち都会で生活している人たちとも緩やかなつながり（ウィークタイズ）を持ち続け、福井に住む人も大都市に住む人もともに、それぞれの希望を持ち、幸せに暮らせるような交流・共動を続けています。

第3章 ふくいの暮らしの特長

技術やサービスなどが日本市場で独自の進化を遂げて世界標準からかけ離れてしまうという現象は、生物界のガラパゴス諸島における進化の現象にたとえて「ガラパゴス化」といわれています。（『2015年の日本』（野村総合研究所 東洋経済新報社））

2007年11月に実施した「福井の暮らしをよりよくするためのアンケート」の結果として、県民の多くは趣味や余暇の活用より、日常生活の基盤となる事柄に暮らしの質を見出す傾向があることが分かりました。特に、福井県に住むことに満足していると回答した県民は81%に達し、さらに、自然環境・生活環境の豊かさ・美しさについても88%の県民が満足であると回答しています。

このように、福井県民は、福井の暮らしに満足して、その豊かさを実感しています。しかし、現在の福井の暮らしの満足が2030年の福井においても同様に満足するものであり続けるのでしょうか。前述の「ふくいを取り巻く環境の変化」を踏まえて、現状や2030年の福井の課題を整理し、2030年の福井の暮らしを検討する必要があります。

この章では、前報告書の「社会全体の姿」を踏まえた上で、福井の特長的な身近な日常の暮らしの8分野（「家族」、「健康」、「食」、「労働」、「教育」、「交通」、「自然・環境」、「地域」）について、福井の「強み」は引き続き強みとなり、2030年にも生活満足度を支えているのか、「強み」が「弱み」に転換して「ガラパゴス化」してしまうことがないのかなどを検討しました。

第3章では、今後、私たちが、この福井で住み続けたとき、どのような課題があり、またその対応策はどのようなものか、さらに、実際に住む私たちがどのような心構えと行動で新たな社会を作り上げていくかを描いています。

3-1 家族の希望が広がる

<概要>

福井は三世代同居および近居が多く、子育てのしやすさや世帯所得・貯蓄率の高さなどに結びついています。

国政レベルにおいても、高齢者が安心して暮らし、世代間の助け合いを支援するため、三世代同居や高齢者雇用を促進する支援措置の検討が始められました。

福井においては、家族・地域・テクノロジーを複合的に組み合わせ、一人ひとりの役割や能力を最大限に発揮できる社会を目指します。

<2030年に向けた課題>

福井県の特長である三世代同居は、少子高齢化の影響などによりその数、割合ともに減少傾向にあります。また、三世代近居においても、日常的な交流が減り、困ったことがあったときに相談するなど適度な距離を置く付き合い方が増えています。

一方、平均初婚年齢および出生年齢の上昇に伴い、第1子出生時の父親・母親の年齢が20代から30代へ上昇しています。また、祖父母の年齢も、50代から60代へ上昇します。この傾向が続くと、2030年においては、三世代同居で、父親・母親、祖父母で協力して行っていた子育て（孫育て）が祖父母の高齢化に伴い、今までのような祖父母の子育てへの参加が難しくなってきます。さらに、三世代同居における祖父母の高齢化は、会社での責任が重くなる40代後半から50代の父親・母親にとって、子育て・教育のピークと親の介護が同時に訪れる可能性が高くなることを意味します。

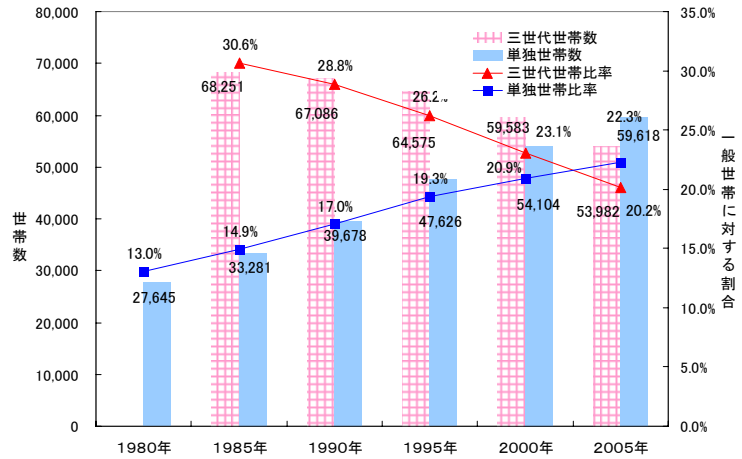
このため、三世代同居・近居で豊かな生活を送ってきたこれまでの40代・50代とは違い、2030年の40代・50代は家庭・地域・会社からの大きな期待と負担に喘ぐことになるおそれがあります。

三世代同居・近居には、家族ぐるみの子育てや地域活動への参加、家事の役割分担など優れた面が数多くあります。人々が適度な距離を保った家族の付き合い方を望む中、「家族の未来を創造する2030年の家族モデル」として三世代同居・近居の良い面を継承しつつ課題解決につながるような支援を行っていく必要があります。

1 福井県の単独世帯および三世代同居の数と割合

・福井の三世代世帯比率は、全国的に見れば高いものの、年々減少しており、また、単独世帯が急速に増加しています。

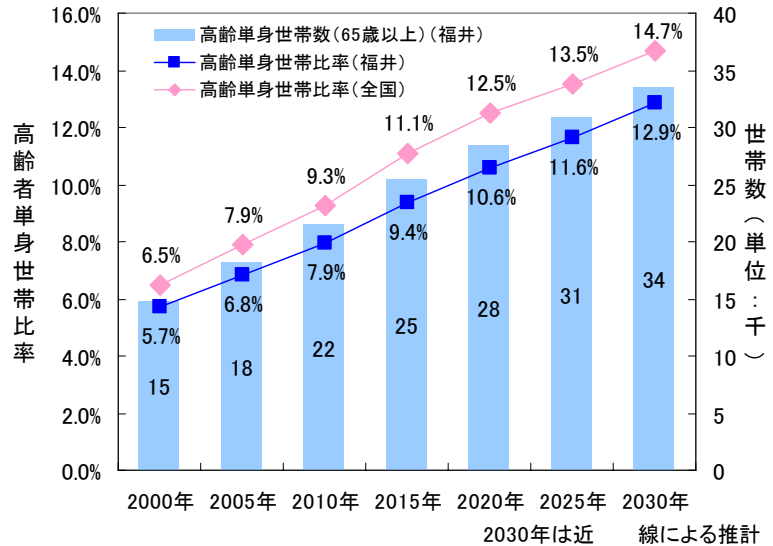
福井県の三世代世帯数と単独世帯数の推移



出典：総務省「国勢調査」

・特に、高齢単身世帯は数および比率ともに増加し、2030年には2005年に比べ、約2倍になります。

高齢単身世帯（65歳以上）の推移

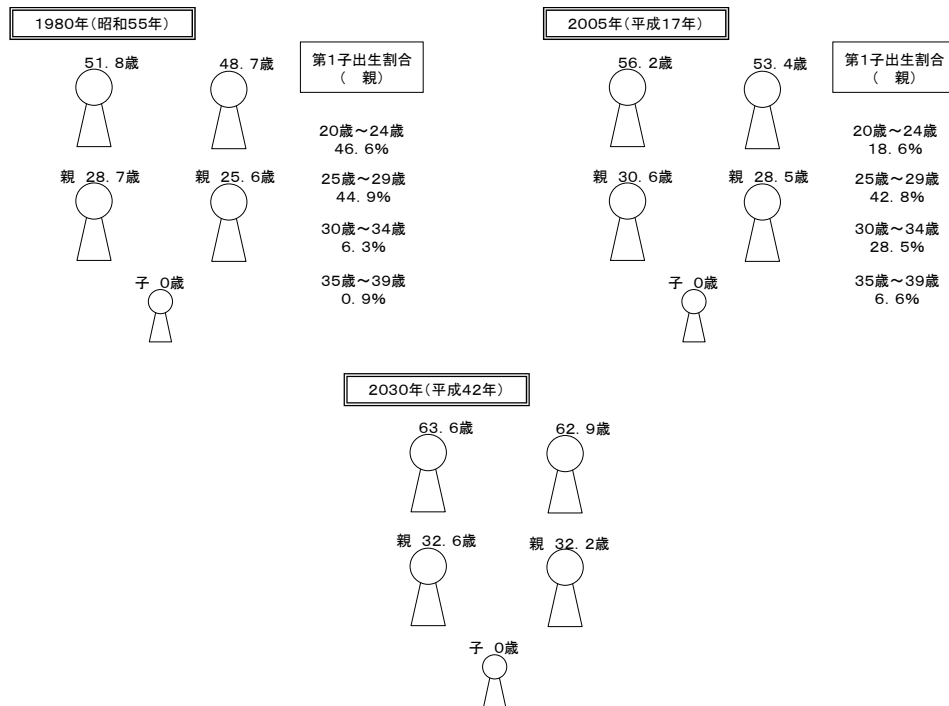


出典：国立社会保障・人口問題研究所「日本の世帯数の将来推計（都道府県別推計）」に基づき福井県政策統計課が独自集計

2 出生年齢の変化

- ・第1子出生時の年齢層が以前に比べ、一段階上昇しています。このため、1980年代には40代で初孫が生まれることが珍しくなかったのですが、現在は60代で初孫が生まれることが増えています。今後は、晩産化が進んだ世代の子ども世代が出産することから、第1子出生時の祖父母の年齢はさらに上昇することが予想されます。

第1子出生時の家族年齢の推移



出典：「人口動態統計」に基づき「ふくい2030年の姿」検討会において作成

3 家族のライフサイクル・役割分担の変化の要因

- ・2030年における定年を65歳に設定した場合、二世代にわたる晩婚化の影響により、貯蓄性向の高い直系二世代共稼ぎ期間が2.8年と大幅に減少します。同期間を10年程度確保するためには、2030年における定年を73歳に設定する必要があります。
- ・前報告書においては、平均寿命・健康寿命の伸びや労働力の数の不足、質の変化などを踏まえ、労働力として位置付ける年齢層が従来の18歳～65歳から20歳～75歳に変わるとしましたが、家族のライフスタイルからも同様の変化が必要となることがわかります。

- ・一方、定年を引き上げた場合、祖父母が担っていた子育ての機能が失われるなど、家族の役割分担も変化せざるを得なくなり、それを支える社会システムの整備も必要となります。

時代別家族のイベント期間の推移

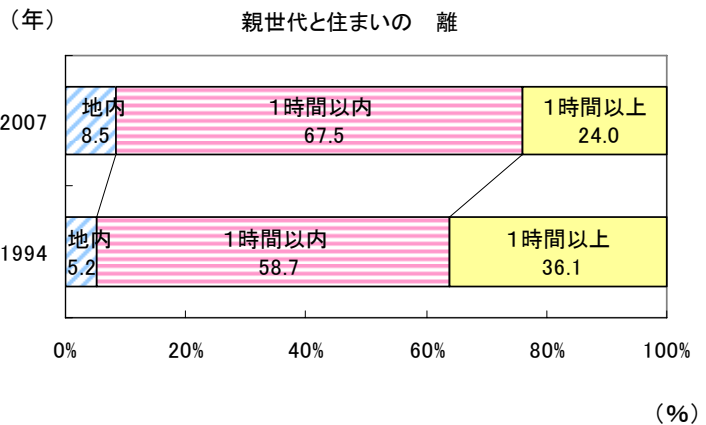
イベント期間	戸時代 (信 国 村)	1955年 (全国)	1980年 (福井県)	2005年 (福井県)	2030年 (福井県推計)
婚年齢	男 26.4	男 26.6	男 27.4	男 29.3	男 31.5
	女 20.6	女 23.8	女 24.3	女 27.4	女 31.1
出産期間	19.7	6.5	2.7	3.3	3.1
子ども 期間	31.6	24.8	22.4	24.0	26.0
二世代夫婦同居期間	8.1	20.5	31.8	34.0	27.1
三世代同居期間	5.0	18.9	30.5	32.9	26.0
老親 期間(65歳定年)		10.4	17.3	23.2	24.3
二世代共稼ぎ期間()		10.1	14.5	10.8	2.8

*子どもの数：江戸時代（5人）、1955年（3人）、1980年～（2人）
定 年：65歳（江戸時代は設定なし）

出典：「ふくい2030年の姿」検討会において作成

4 三世代近居の増加

- ・内閣府の調査では、1994年から2007年までの13年間に三世代同居、近居が12.1%増え、特に三世代近居は8.8%増えています。家族の間でも適度な距離感が求められる中、今後も三世代近居は増えていくと考えられます。

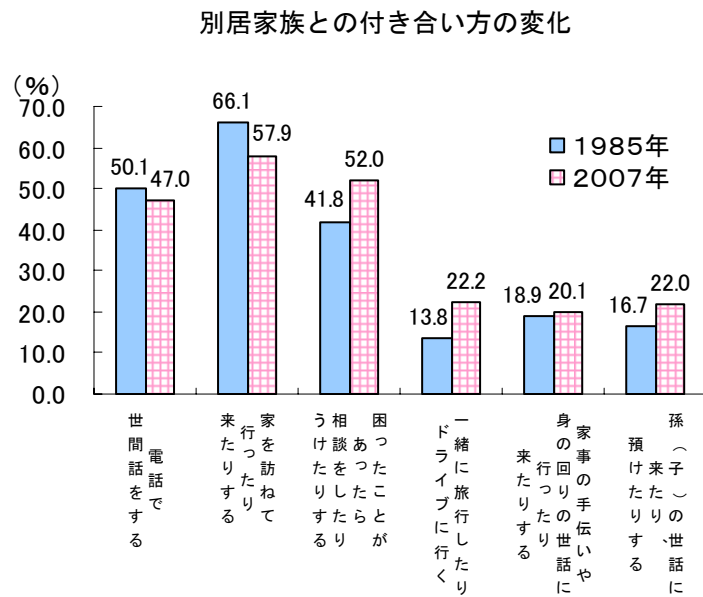


1. 内閣府「公民生活選好度調査」（1994年、2007年）により作成
2. 対象は20歳以上の既婚者で、自分または配偶者の親が別居している者

出典：内閣府「平成19年版 国民生活白書」

5 別居家族との付き合い方は変化

- ・別居家族の付き合い方を見ると、世間話や行ったり来たりなどの付き合いが減る一方で、「困ったことがあった時の相談」や「孫の世話」など、明確な目的があつての付き合いが増えるなど、距離だけでなく、付き合い方にも適度な距離を置く家庭が増えています。



出典：内閣府「平成19年版 国民生活白書」

(内閣府「国民生活選好度調査」(1985年、2007年)により作成)

6 三世帯同居は地域活動にも積極的

- ・三世帯同居世帯は、町内会、自治会への参加度合いが高くなっています。一方、単身世帯や核家族世帯は参加度合いが低いことがわかります。

- ・町内会、自治会への参加は、地域における「人々の親交の機会」の第一歩となりますが、核家族世帯や単身世帯はそうした機会から遠ざかるおそれが高くなります。

世帯別の町内会、自治会への参加度合い (%)

世帯別	参加の程度		
	月に1回以上	年に数回程度	参加してない
三世帯同居	15.1	43.0	41.9
核家族	11.3	36.6	52.1
夫婦だけ	18.6	40.8	40.5
単身	9.1	21.1	70.0
その他	8.9	29.1	61.8

出典：内閣府「平成19年版 国民生活白書」

7 家族形態の変遷

- ・ 家族は、戦前から戦後、そして現代へとその形態が変遷しています。戦前の家（イエ）を中心とした家族形態から、夫婦単位、個人単位へと変遷しています。
- ・ 理想の家族形態として、自分を中心として、自分らしい生活を送る自己実現家族は、男女共に職が不安定化する中で、その実現が難しくなっています。

日本の家族 の

時期	明治～第二次世界大戦	戦後～21世紀	21世紀～
名称	直系制家族	夫婦制家族	合意制家族
概要	長子単独相続制	家族の中心を親子関係から夫婦関係へ転換(固定的な性別役割分業)	各自の生活嗜好を重視

出典:野々山久也「現代家族のパラダイム革新」

時期	明治～1960年代	1960年代～	現代
名称	直系家族制	夫婦家族制(核家族形態)	任意性家族
概要	家父長制のイエ制度	次三男の都市への移動による核家族化	家族が個人にとっての1つのライフスタイルに変化。家族の「私化」のはじまり

出典:今村仁司他編「岩波 社会思想事典」

時期	戦前	戦後	現代
名称	直系家族	戦後家族モデル	戦後家族モデルに代わるモデルの不在
概要	長子が結婚後、親夫婦と同居	夫は仕事、妻は家事・子育てを行って、豊かな家族生活を目指す	「欧米型平等モデル」(夫婦がフルタイムの職に就き、経済的豊かさの中で、家事・育児を分担しながら育てる) 「自己実現家族モデル」(好きな相手と結婚し、好きな仕事をして、豊かに生活する) →いずれも実現可能性が薄くなっている。

出典:山田昌弘「迷走する家族」

<ふくい2030年の姿>

・自己実現家族から未来実現家族へ（「相互実現家族」）

※「自己実現」は1990年代から広まっている意識であり、現在、その実現のために家族が機能化しています。2030年には、家族の未来を創造する家族形態になっています。

※「私化」はバラバラ化につながるおそれがあります。自己実現のみを追求するのではなく、家族がともに生活し「自分たち相互の夢や希望」を実現する場へと家族は進化します。

・子育てや家事、介護など世代間の助け合いを進めるため、三世代同居、近居を政策的に支援

・家族をつなぐコミュニケーションツールや家庭での介護を支える運動補助ロボットなどの家族応援テクノロジーが普及

- ・家族は、これまでの個人の自己実現を支え、子育てや介護などを機能として求める自己実現家族となってきましたが、今後は、お互いがともにいることを喜び、安心感の中で、相互に支え合い、夢や希望を実現し、未来を創造していく未来実現家族に変化します。また、自分の希望が家族の希望に広がり、それを実現するための役割が家族内で分担できるようになります。
- ・家族の希望を実現するためには、世代間の支え合いが必要であるため、家族は、自分のライフスタイルと同様に家族のライフスタイルに応じた住居を考え、同一小学校区内の近居も含めた三世代同居が増加します。また、これに対する優遇税制等の支援制度が充実しています。
- ・達年世代が75歳まで元気に働き、その後も、テクノロジーの発達により、家族の介護にかかる負担が軽減されることから、三世代同居、近居が有効に機能を発揮します。
- ・家族のライフスタイルに合わせて、容易に家の増減築ができる家が普及します。ゆとりのある空間は庭や菜園として整備する一方で、庭木を植樹し、家庭にいながらにして里山を楽しむ人が増えています。増減築と緑化を推進する税制や支援策などにより、害虫駆除等の維持管理の手間が少なく、花をつけ、鳥や蝶が好む樹木として県が推奨する「福井に映える庭木7選」（ヤマボウシ、エゴノキ、ムラサキシキブ等）を植樹する家庭が増え、「四季の見える町並み」となっています。

3-2 健康長寿を楽しむ

<概要>

2030年には、日本は世界トップの「超高齢国」となり、福井も世界有数の「超高齢地域」となります。

超高齢地域に生きる私たちにとって、単に健康長寿であるだけでなく、できるだけ長く楽しみのある自立した生活を送ること、また、人生の最期まで個人の尊厳を最大限に維持できるようにすることが必要です。

そのため、福井の健康長寿の秘訣（食文化など）を継承しつつ、新たな価値観や総合的な予防・ケアのシステム、最新の治療技術・テクノロジーを取り入れることにより、心身ともに健やかな、世界に誇れる「健康長寿の福井」を実現します。

<2030年に向けた課題>

老年人口がますます増加していく中で、高齢者ができるだけ自立した生活を送れるようにすることが重要です。そのためには、高齢者が要介護状態になるのを予防する「介護予防」や、要介護状態となった場合の「リハビリテーション」のシステムを社会全体で充実していくことが必要です。

また、2030年に生きる後期高齢者の多くは、高度経済成長やバブル崩壊など大きな社会変動を経験し多様な価値観やライフスタイルを持った「団塊の世代」です。こうした世代の多様な価値観やライフスタイルを尊重し、要介護状態になったとしても、その人らしい生活を自分の意思で送れるような、細やかな介護・ケアを提供することが求められます。

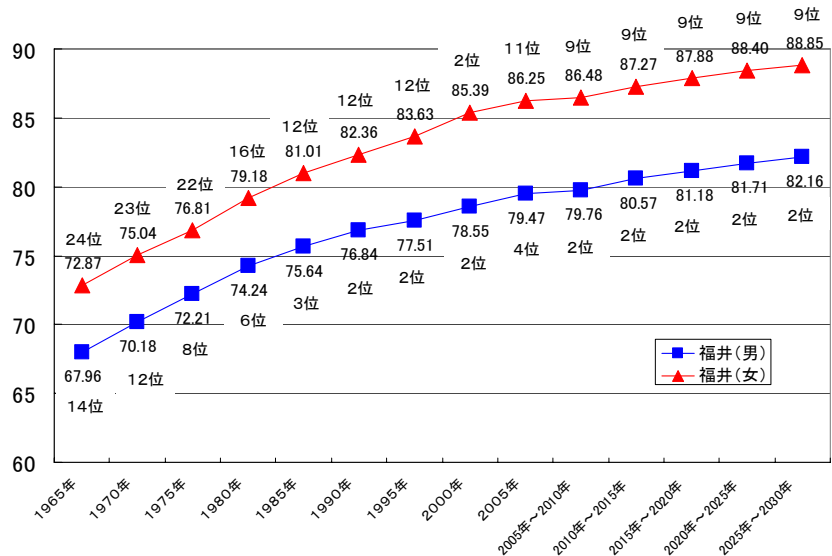
歳をとっても健康であるためには、若い頃からの健康づくりが重要です。福井の子どもは全国上位の体力レベルにありますが、これを維持向上させ生活習慣病になりにくい体質を育てていくことが必要です。一方、生活習慣の変化やストレスにより、若い世代の健康維持に懸念がもたれており、心身ともに健康で暮らせる社会的・心理的サポートが必要です。

また、真の健康長寿の推進のためには、高齢者が生きがいを持って楽しく生活していくことが必要であり、就労やボランティア、スポーツ、趣味などを、個人の選択に基づいて自由に楽しめる社会づくりも必要となります。

1 福井県の平均寿命および将来予測

・2030年に向けて、福井県の平均寿命は、全国上位を維持しながら、男女とも緩やかに伸び続けていきます。

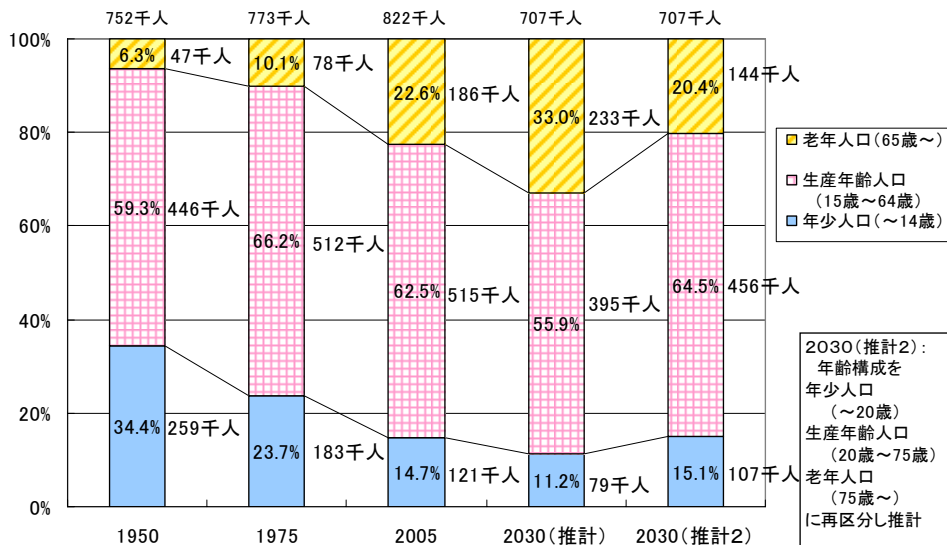
福井県の平均寿命の推移および将来予測（全国順位）



出典：総務省「国勢調査」、国立社会保障・人口問題研究所
『日本の都道府県別将来推計人口』（平成19年5月推計）

2 福井県の2030年の年齢別人口

・2007年推計による本県の2030年の老年人口の割合は、2002年の推計値31.2%からさらに上昇し、33.0%となっています。しかし、年齢構成の定義を見直し、20歳未満を年少人口、20歳から75歳までを生産人口、75歳以上を老年人口とした「推計2」では、従来の定義による2000年の年齢別人口構成とほぼ同じになります。



出典：総務省「国勢調査」、国立社会保障・人口問題研究所
『日本の都道府県別将来推計人口』（平成19年5月推計）

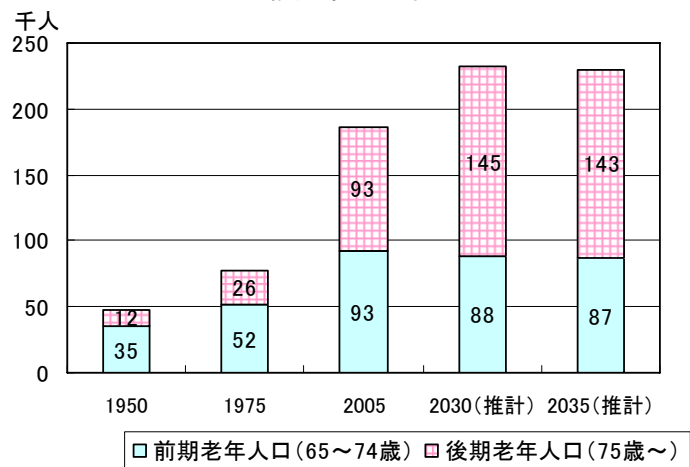
3 福井県の2030年の老年人口

- ・2007年推計による本県の老年人口は、後期老年人口と併せて、2030年頃に、ピークを迎えるため、要介護者数も最大になっていると予測されます。

なお、2030年以降は、老年人口は減少傾向になります。

- ・増加する後期高齢者、またそれを支えていく世代のため、今後、社会基盤の整備や多様な福祉サービスの充実などが必要になります。

福井県の老年人口



出典：総務省「国勢調査」、国立社会保障・人口問題研究所『日本の都道府県別将来推計人口』（平成19年5月推計）

4 三大死因の年次推移

- ・近年は年齢を問わず生活習慣病患者が増加し、三大死因（悪性新生物、心筋梗塞、脳卒中）での死亡者の増加も問題になっており、予防により発症を抑えることが重要です。

また、病気治療のための病院利用から、予防のために病院等を活用する方向へ転換していくことが重要であり、医療費抑制の鍵にもなります。

福井県と全国の三大死因による死亡者数の年次推移

	順位	死因	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年
福井県	1	悪性新生物	2,088	2,245	2,240	2,235	2,278
	2	心疾患	1,172	1,140	1,213	1,317	1,298
	3	脳血管疾患	965	905	962	910	879
	三大死因死亡者数		4,225	4,290	4,415	4,462	4,455
	全死亡数		7,243	7,449	7,772	7,725	7,886
全国	1	悪性新生物	309,543	320,358	325,941	329,314	336,468
	2	心疾患	159,545	159,625	173,125	173,024	175,539
	3	脳血管疾患	132,067	129,055	132,847	128,268	127,041
	三大死因死亡者数		601,155	609,038	631,913	630,606	639,048
	全死亡数		1,014,951	1,028,602	1,083,796	1,084,450	1,108,334

出典：厚生労働省「人口動態統計」

福井県民の健康維持に関する懸念材料

- 全体 ・運動習慣を持つ人が30代～60代で少ない(概ね全国平均より少ない)
- 男性 ・30代の運動習慣を持つ人が全国平均の約2分の1(福井9.1%、全国17.5%)
 - ・20代～30代の喫煙率が、それぞれ全国平均より約10%高い
- 女性 ・20代～60代で「やせ」の割合が全国平均より高い(「やせ」＝BMIが18.5未満の者。特に20代は全国平均より約12%高い)

出典：厚生労働省「平成18年国民健康・栄養調査」、
福井県健康増進課「平成18年度県民健康・栄養調査」

5 認知症患者の増加

- ・近年、認知症高齢者人口が年々増加傾向にあり、2025年には全国で323万人にのぼると見込まれています。また、「認知症」の特性に焦点を置いた介護方法の確立など、介護のあり方の根本的見直しが課題となります。

6 子どもの健康

- ・食事は健康を維持していく上で欠かすことのできない要素です。特に朝食は、1日の活動を始めるに当たり、身体と脳が活性化し、充実した1日を過ごすための大切なエネルギー源です。近年、朝食をとらない子どもが増加しているといわれていますが、福井県では、朝食を欠食する子どもは徐々に減少しており、今後もその傾向を維持していく必要があります。
- ・朝食をとらない理由としては、「食欲がない」「時間がない」が約8割を占めており、夜更かしや夜食、運動不足等の生活習慣の改善が必要です。また、「用意されていない」が約1割を占めており、朝食に対する保護者の意識向上が求められます。
- ・小学生の10人に1人、中学生の5人に1人が抑うつ傾向にあるといわれており、学校等で気軽に相談できるカウンセラーの配置が望まれます。

朝食をとる割合(2007年)

	小学校	中学校
ほとんど毎日食べる	89.6%	80.4%
ほとんど食べない	1.1%	2.4%

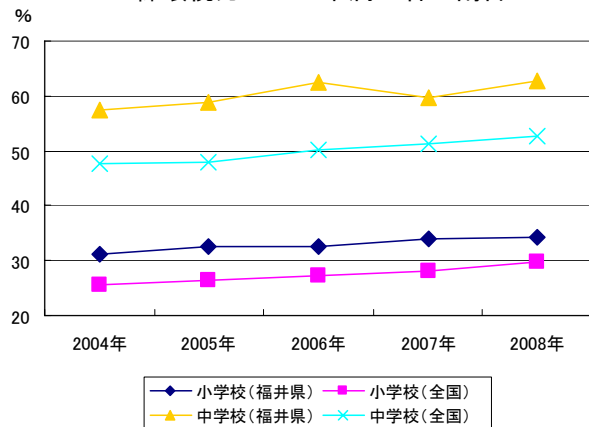
朝食をとらない理由

	小学校	中学校
食欲がない	39.7%	39.4%
時間がない	38.5%	41.4%
用意されてない	12.8%	8.4%

出典：福井県スポーツ保健課「H19食育アンケート 児童・生徒編」

- ・視力1.0未満の者の割合は、小学校、中学校とも増加傾向にあり、いずれも全国平均を上回っています。

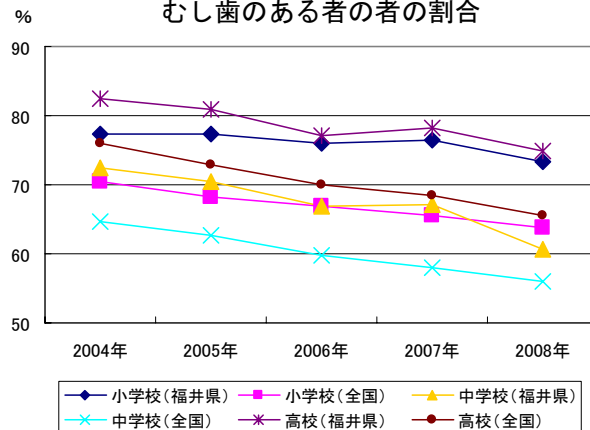
裸眼視力1.0未満の者の割合



出典：福井県政策統計課
「福井県学校保健統計調査」

- ・むし歯のある者の割合は、小学校、中学校、高校とも減少傾向にありますが、いずれも全国平均を上回っています。

むし歯のある者の者の割合



出典：福井県政策統計課
「福井県学校保健統計調査」

7 「からだの健康」から「こころとからだの健康」へ

- ・近年、女性高齢者や男性中高年、若者を中心に、うつ病などの「心の病」や自殺が社会問題となっており、早急な対策が求められています。充実した人生を送るためには、からだの健康だけではなく、こころの健康も欠かせません。

- ・社会の変化や高齢者の増加により、今後、老人性うつ病の増加が心配されます。老人性うつ病は、気力や体力の減退、家族や社会的地位の変化などにより発症するといわれていますが、若いうちから老後に何をしたいか考え、楽しみを持っていたり、社会との接点を持ち続けられるよう備えておくことも大切です。
- ・福井県民は、自殺者率やストレスを感じている割合、精神保健福祉手帳所持率から見ると、心理・精神面の健康は比較的保たれていると言えます。もちろん、現状で満足というわけではありません。少しでも多くの県民が心身ともに健やかに生活できるよう、家庭、地域、職場、学校、行政などが、これからも力を合わせていく必要があります。心身の健康を県民みんなでサポートしあう体制づくりが求められると考えます。

自殺者数と自殺率（人口10万人対）

	自殺者数	自殺率（人口10万人対）
福井県	176人（45位）	21.9人（37位）
全国	30,827人	24.4人

出典：厚生労働省「平成19年人口動態統計」

ストレスを感じている割合

将来・老後の収入でストレスを感じている者の割合		
全国		20.0%
1位	大阪府	23.8%
2位	北海道	23.4%
3位	東京都	21.9%
47位	福井県	15.9%

収入・家計・借金でストレスを感じている者の割合		
全国		22.1%
1位	沖縄県	28.1%
2位	宮城県	25.3%
3位	秋田県	25.2%
38位	福井県	20.5%

出典：厚生労働省「平成13年国民生活基礎調査」

精神保健福祉手帳所持者数（平成20年3月31日現在）

福井県	全国
0.31%：全国最小水準（2,511人）	0.44%

出典：厚生労働省「平成19年衛生行政報告例」

患者に対する心理的・社会的サポートに関するアンケート調査の結果概要

○病院における患者に対する心理的・社会的サポートの状況

	人数	%
十分に行われている	0	0.0
まずまず行われている	7	1.4
あまり十分には行われていない	196	38.1
きわめて不十分である	300	58.3
どちらともいえない	6	1.2
その他	4	0.8
無回答	2	0.4
計	515	100.0

○病院で今後特に充実が図られるべきもの(複数回答)

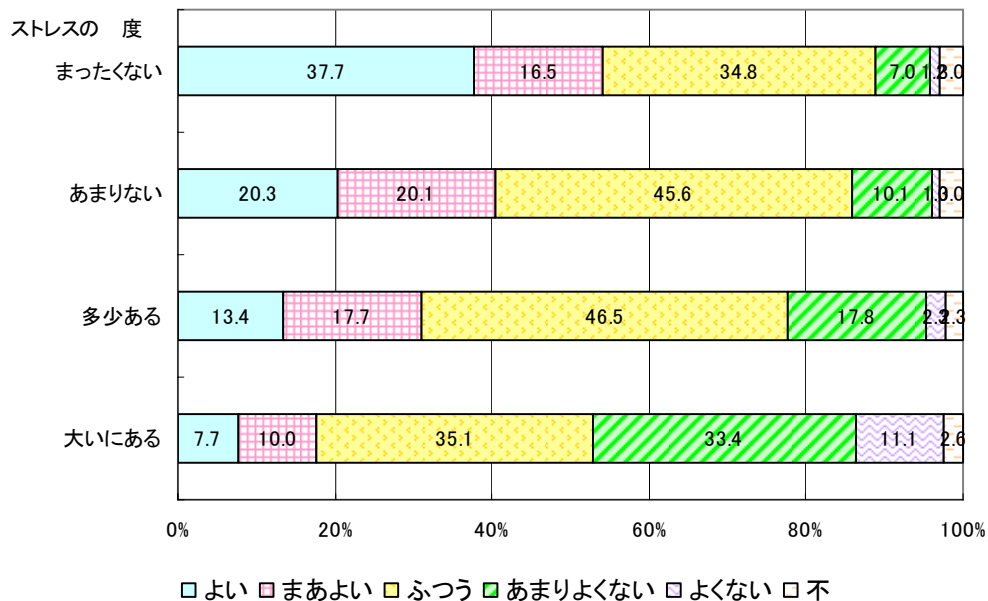
	人数	%
患者の心理的な不安などに関するサポート	409	79.4
家族に対するサポート	244	47.4
医師などへの要望や苦情を間に立って聞いてくれる者の存在	326	63.3
社会福祉サービスなどの紹介や活用に関する助言	154	29.9
退院後のことや社会復帰に関するサポート	201	39.0
医療費など経済面に関する相談や助言	118	22.9
その他	76	14.8
無回答	1	0.2

出典：広井良典「生命の政治学」

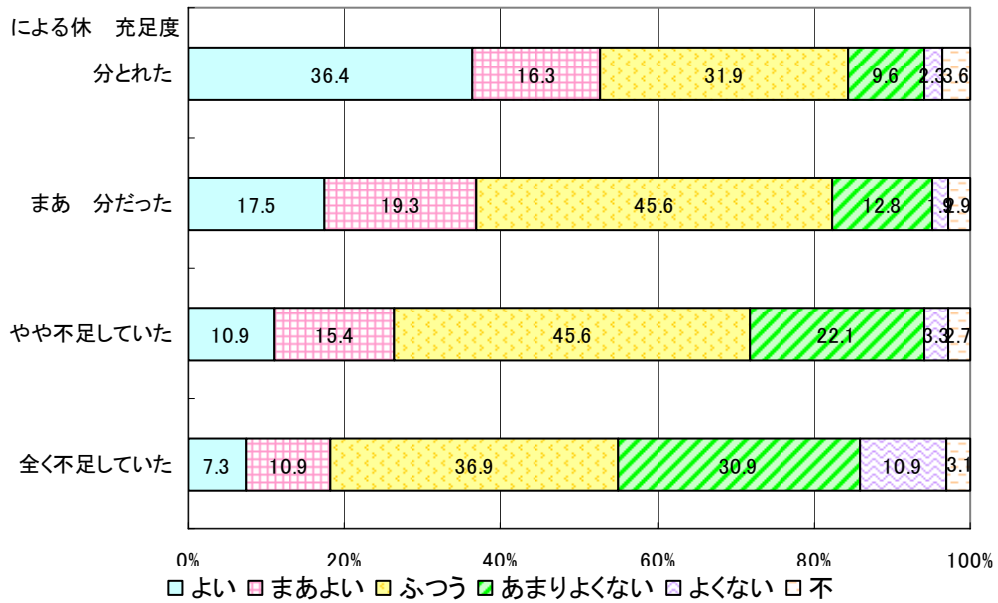
- ・このアンケート調査の結果から、医療機関でのサポートとして今後求められることは、心理的な不安への対応や家族へのサポート、医師などへの要望や苦情を仲介することなど、心理・社会的サポートが多いことがわかります。

ストレスの程度、睡眠による休養充足度別にみた健康意識

ストレス程度別にみた健康意識別構成割合



睡眠による休養充足度別にみた健康意識別構成割合



出典：厚生労働省「平成12年保健福祉動向調査」

- この調査の表から、ストレスを感じることの少ない層と睡眠時間が十分だと感じている層が、自分が健康であると感じていることがわかります。
- 過剰なストレスを感じないような環境づくり、必要な睡眠時間が確保できる社会づくりが健康の維持・増進にとって重要です。

<ふくい2030年の姿>

- ・ 福井の食生活やストレスの少ないライフスタイル、高齢者の心理・社会的ケアの充実、「家庭内健康診断」、「自宅診察」などテクノロジーの進歩により、世界に誇る「健康長寿の福井」を実現
- ・ 高齢者の移動、労働、住まい等をサポートするテクノロジーや社会システムの発達により、高齢者が多様な分野で活躍
- ・ 体力が全国トップクラスの子どもたちが、スポーツや食育を通して、大人になってからの健康も維持

【活動・交流】

- ・ 高齢者の就労を支援するゴールドハローワークが整備されるとともに、高齢者の身体的・技術的側面のサポートとして、全館バリアフリーのオフィスや音声認識機能付パソコンなど、高齢者の労働を支援する技術が発達・普及していきます。
- ・ 活躍する達年、老年世代（※）が、新たな社会的ニーズを生み出し、高齢者の積極的な外出をサポートするため、駅や基幹停留所までの交通の便が地域単位で構築されています。また、高齢者の健康管理のため、手軽に文化活動やスポーツ、トレーニングを楽しめ、健康管理ができる施設が駅や基幹停留所などに整備されるようになります。
※老年：75歳を超える人のこと
- ・ 福井の里地・里山や街中の自然が魅力的に整備されることによって、ウォーキングがますます多くの人に愛好されるようになります。また、自宅で世界中の美しいウォーキングコースの風景を体験できるウォーキングマシンが普及して、雨天時や夜間でも楽しめるようになり、働き盛り世代でも運動習慣を持つ人が増加します。
- ・ 子どもたちは、スポーツをしたり身体を動かして遊んだりする中で、全国トップクラスの体力を維持しており、食育の効果と相まって、心身ともに元気に活動しています。こうした子どもたちは大人になってからも生活習慣病にかかりにくく、健康長寿福井の原動力ともなっています。

【治療・ケア】

- ・生活習慣改善の意識が高まり、医療通信ネットワークの進化による「家庭内健康診断」、「自宅診察」等のシステム開発・普及が、我々の健康管理をサポートします。
- ・QOC（Quality of community）の向上のもと、家族のきずなや地域の人と人とのつながりが、改めて重要視されています。「地域で高齢者を見守る」という姿勢が一人暮らしの高齢者の精神的支えとなり、家事ロボット等の普及が身体的支えとなって、高齢者が自立した満足度の高い生活を送ることができるようになります。
- ・介護においても、身体的サポートだけではなく、精神的サポートも重視されるようになります。身体的サポートについては、介護ロボット等の普及により負担が減ることから、家族や介護者は、高齢者の精神的サポートにより重点を置くことになります。
- ・認知症の早期発見・早期対応が進むことにより認知症が重度化することが減り、また、地域の認知症介護サポーターによる支援、心のバリアフリーの普及などにより、認知症になっても、家庭や地域で暮らしやすくなります。
- ・介護施設は、自宅か施設かの二者択一から、双方の長所をとり入れた新しい「住まい」が普及します。自宅にいながら、施設にいるかのような「24時間・365日安心」のサービスが受けられる、あるいは施設にいながら通信技術の進歩などにより自宅にいるかのように家族とふれあえる個別のサービスが受けられるようになります。福井では、このような心理・社会的ケアも取り入れた総合的・先進的な介護、治療、リハビリテーションが行われ、「日本の心理・社会的ケアの先進地」となっています。
- ・福井は遺伝子診断・治療や陽子線がん治療などが発達し、「がん治療のレベル日本一」の地域となっています。

3-3 食のメイドイン福井

<概要>

「医・食・住」といわれるように、食は私たちの生活の基本であり、食を生産する農業は、県民に食料を供給する役目だけではなく、豊かな自然を維持し、県民にやすらぎを提供する機能を有しています。

しかし、近年、産地偽装、消費期限の改ざん、事故米の転売など食の安全への不信感が増大し、農業に向けられる消費者の目は厳しいものになっています。また、農家の大半を占めるパートタイム・ファーマー（※）による安定的な兼業経営や、米に特化した農業の構造など、本県農業は多くの問題を抱えています。

一方、2030年には世界の人口増加や、砂漠化、土壌の劣化、水資源の枯渇等の要因による国際的な食料不足等の影響により、食が重要なキーワードとなることが予測されています。

※パートタイム・ファーマー：週末にしか農業に従事しないサラリーマンや定年退職後に年金所得+農業所得しかない高齢者

<2030年に向けた課題>

食が抱える様々な問題を解決する方法の一つとして、食料の増産が考えられますが、本県の食料自給率は、主要作物である米を除くと10%しかなく、今後米作偏重から脱却し、消費者が求める多様な農産物を生産することが必要となります。

また、消費者も質の高い生活を送るため、氾濫する遺伝子組換え農産物を購入するのではなく、地産地消に取り組むなど、食への正しい理解を深め、バランスのとれた食生活を維持していくことが必要です。生産者と消費者が「食」を通してお互い支え合うような仕組みづくりが今後必要となってきます。

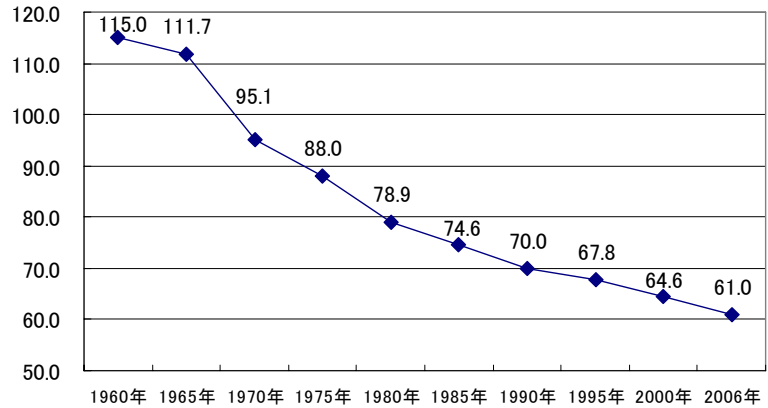
一方、地球温暖化等の影響による異常気象の発生やトウモロコシ等を利用したバイオエタノールの生産拡大、世界的な人口の急増等による食料不足が深刻化しており、食料輸出国が輸出規制を発動するなど、食料の獲得競争が激化しています。2030年には食料を輸入できず、現在のような食生活を維持することができないことも想定されます。

また、農業には、食料生産面だけでなく、環境や、文化などの多方面での活躍が求められており、今まで以上に重要な分野となる可能性を秘めています。

1 食生活の変化

- ・福井で昔から続いてきた米を中心としたバランスのよい食事は、健康長寿の秘訣の一つと考えられていますが、そうした伝統的な食生活は大きく変化してきています。

米の消費量の推移（一人1年当たり）

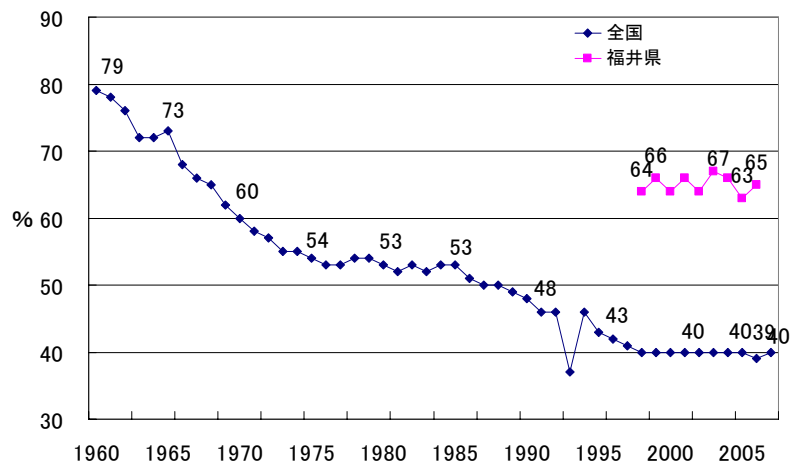


出典：農林水産省「食料需給」

2 食料自給率の推移

- ・日本の食料自給率は年々低下していますが、福井の自給率は60%台半ばで推移しています。

供給熱量総合食料自給率



出典：農林水産省資料

- ・福井の食料自給率は65%と全国の40%に比較すると高くなっていますが、米以外の自給率は10%と大変低い状況です。

福井県の食料自給率

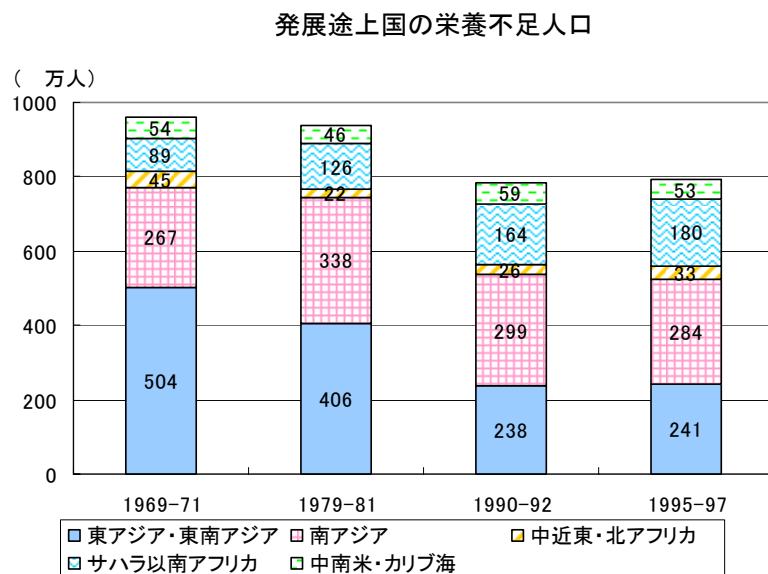
(単位：%)

品目	米	いも類	豆類	野菜	果実	肉類	鶏卵	牛乳等	魚介類	合計
自給率	24.8	3.3	2.4	3.5	7	2	6	6	3.0	6.5
将来予測	↓	↑	↑	↑	—	↑	↑	↑	—	↑

- ・餌を国外から輸入している畜産関係の自給率が低いため、自給飼料の生産拡大が必要です。
- ・野菜、いも類、豆類、果実等健康長寿な福井の食生活を支える品目の自給率が低く、需給バランスの調整が必要です。
- ・品種改良による主要穀物の栽培や、様々な食品に加工しやすい米を栽培することにより、穀物自給社会とすることが必要です。
- ・嶺南地域に電力を活用した植物工場等を誘致するなどにより、不足する野菜等の生産を増やすことが必要です。

3 世界的な食料不足

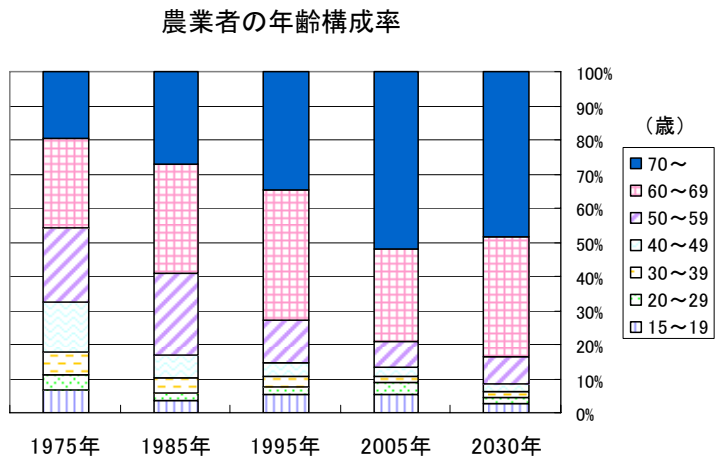
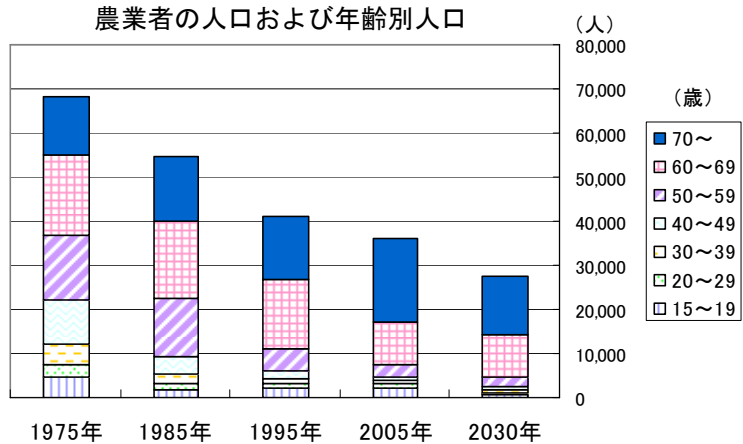
- ・世界的な人口の増加（2030年：83億2千万人）に加え、肉食化に伴う穀物需要量の増加も予測されています。
- ・異常気象による穀物生産の減少や農業増産率の低下、バイオエネルギーへの穀物の転用などの要因により、世界的な食料不足が懸念されています。



出典：農林水産省資料

4 農業者の世代別推移

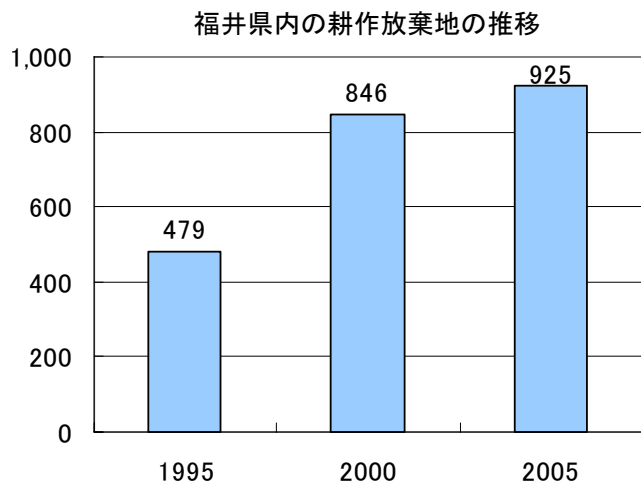
- ・農業就業者人口は、2030年には2005年と比較して20%程度減少し、農業の担い手不足が深刻化します。
- ・60歳以下の農業就業者の割合は、20%弱にまで減少し、農業者の超高齢化が進展します。



出典：「ふくい2030年の姿」検討会において作成

5 耕作放棄地の増加

- ・福井においても、耕作放棄地が年々増加しています。
- ・農地の所有と利用を分けて考え、プロ農家への農地集積が進んでいくと考えられます。
- ・二地域居住者に対し、農地を斡旋するシステムが必要となります。



出典：農林水産省「農業センサス」

6 求められるメイドイン福井の農産物

- 輸入食品の安全性などが大きな社会問題となる中、国内産の農産物を求める消費者の割合は85%に達し、うち県内産の農産物（特に野菜等）を求める消費者も多く、直売所等の販売額が増加しています。

産地に対する県民の意識

質問項目	20年度調査
できるだけ県内産農産物を購入する	33%
県内産にはこだわらないが、国内産を購入する	52%
産地にはこだわらない	11%

出典：福井県「県政マーケティング調査」

大規模直売所の売上の推移

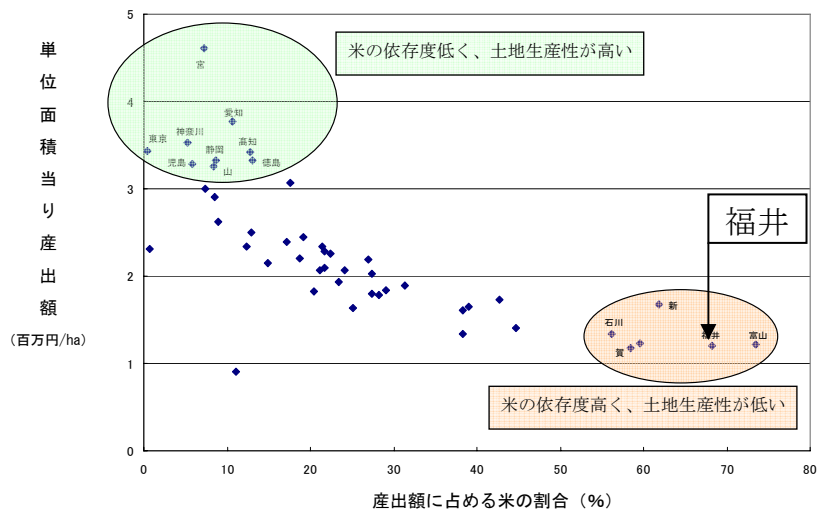
	2003年	2007年	伸び率
大規模直売所売上	6.6億円	13.7億円	約2.1倍の増加

出典：福井県販売開拓課資料

7 消費者が求める農産物生産へのシフトチェンジ

- 水稲中心の福井の農業は、全国と比較して土地生産性が低くなります。土地生産性を高めるためには、水稲から野菜や果物など手間のかかる農産物への転換が必要です。

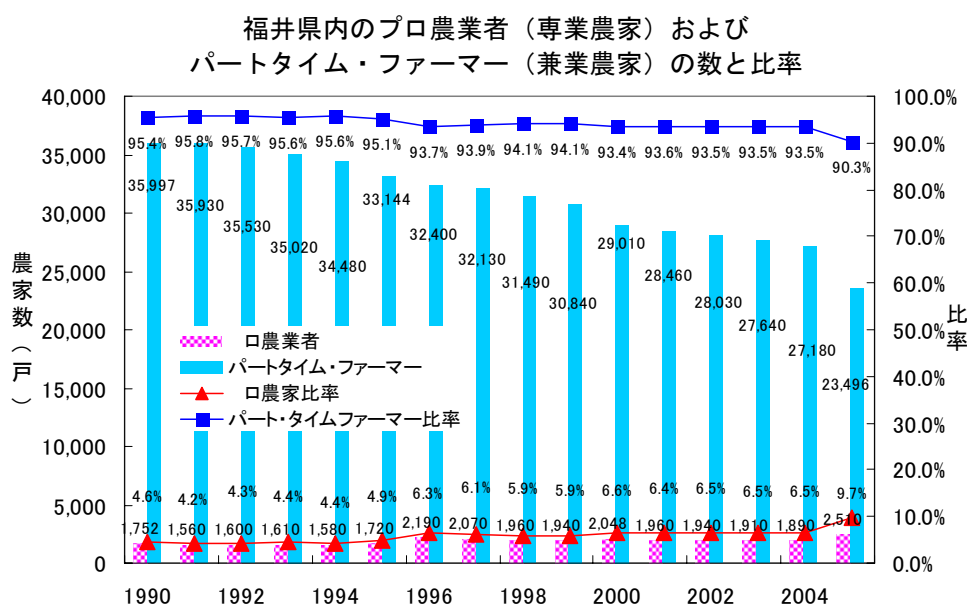
土地生産性と米産出比率



出典：福井県農林水産部資料

8 プロ農家とパートタイム・ファーマーの推移

- ・パートタイム・ファーマーの割合は90.3%と全国最上位となっています。
- ・一方、農家数は1990年と比較して31%減少しています。



出典：福井県「福井農林水産統計年報」

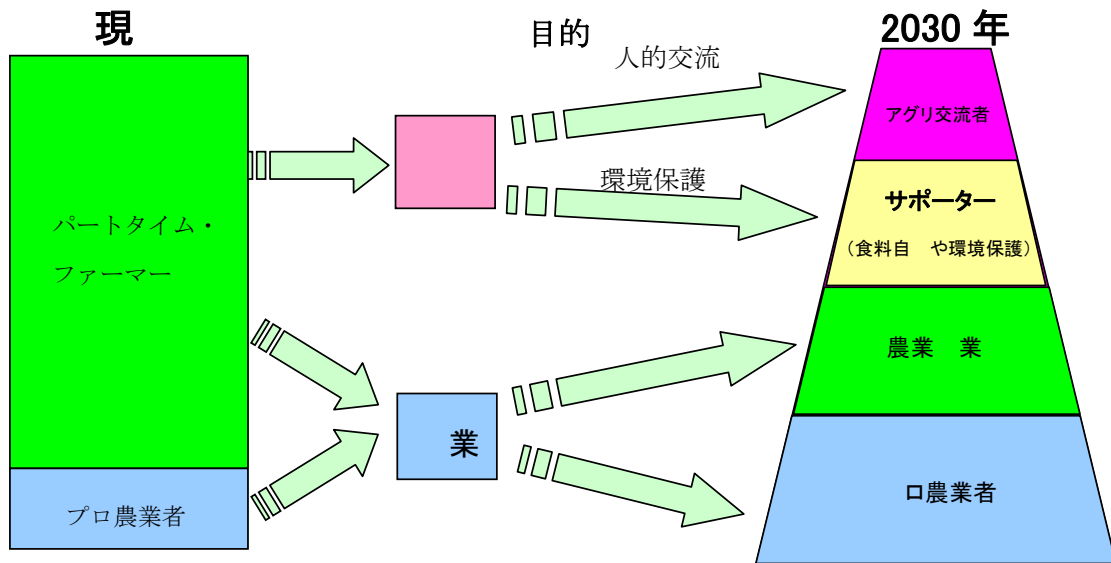
<ふくい2030年の姿>

- ・「緑の親戚」制度などにより、生産者と消費者がパートナーシップを構築し、福井の食料自給率が大きく向上
- ・地産地消システムが構築されることで、バランスの良い食生活が実現し、健康長寿の世界的ロールモデルとなる
- ・Eサポーターが誕生して、耕作放棄地の解消や農村環境の保全に活躍

- ・農地維持型の農業から農地活用型の農業に変化し、パートタイム・ファーマーが減少するとともに、農村交流を行うアグリ交流者や環境保全や食料自給を目的とするEサポーター(※)と呼ばれる農家が出現し、耕作放棄地の解消や農村環境の保全に活躍しています。

(※Eサポーター：ECO（環境にやさしい）、EAT（食）、E（イー＝良い）環境にやさしい、そして人にも良い食を提供する農業者という造語）

- ・農家の世代交代が進み、パートタイム・ファーマーの農業に対する意識が変化し、企業的な農業を志す人等にスムーズに農地が集まっていきます。
- ・農地がプロ農業者に集積されることにより、畜産や野菜などの消費者が求める農産物を生産・販売し、野菜や豆等の自給率が50%を超えています。
- ・植物工場や食品産業会社等が農業企業として、電気を安く入手できる福井に進出してきます。



出典：「ふくい2030年の姿」検討会において作成

- ・都市部生活者と農家をNPOや社会的企業が仲介して、農家からはおすそ分け感覚で農作物を提供し、都市部生活者は農作物の生産に対する感謝の心で、金銭または農作業の労働を対価とする「緑の親戚」制度が定着し、県内各地に『六本木ヒルズ畑』や『東京ミッドタウン畑』などが広がります。これは、現在の血縁を超えて、農作物を通じた新たなつながりに発展します。
- ・夏場の熱を蓄熱し、冬場の施設栽培の暖房に活用する蓄熱ハウスや用水路による小水力発電等が整備され、省エネルギー型農業が発展しています。また、コシヒカリ発祥の地の福井において、超多収穫米が開発され、飼料米などとして活用されています。
- ・現在の食育先進地・福井の食育を受けた子どもたちが親世代となり、朝食を毎日取るようになり、バランスのとれた食事を実践するなど、家庭での食育を積極的に行っています。
- ・外食や中食を含めた食事のバランス等をチェックできるシステムが普及し、生活習慣病患者が大幅に減少します。
- ・福井の平均寿命は全国上位を維持し続けており、長寿の要因である福井の伝統的な食文化がヘルシーな「長寿食」として世界に発信され、世界中の国々でへしこやおろしそばが人気を集めています。

3-4 働き方で一人ひとりが輝く

<概要>

現在、労働力率が高い福井においても、今後の人口減少に伴い労働力人口自体が減少していきます。経済発展と豊かな生活を維持するためには、一人ひとりの能力を十分に発揮することが重要です。

しかし、現在、全国的に労働時間の増加や非正規労働者が増加しており、今後、労働環境を改善していく余地があります。

2030年の福井では、就業形態に関わりなく、個々の職業能力を高めることによって勤労意欲を向上させ、労働生産性を高める必要があります。また、男女・年齢に関わりなく、互いの特性や能力を認め合い、多様な場における、柔軟な働き方が求められます。

全ての人の働く意識が高まり、さらに、個々のライフサイクルに合わせたワークライフバランスが実現することで、社会全体の労働バランスも向上することになります。

<2030年に向けた課題>

以前から、福井県民は働き者であるといわれてきました。本県の労働時間が全国平均よりも長いことや女性就業率が高いことなどもその一つの表れです。しかし、その働き方に関しては、近年の非正規雇用比率の高まりや、福井の女性の管理的就業従事者が全国に比べて低いなど、一人ひとりの能力が十分に発揮できる環境が整備されているとはいえません。

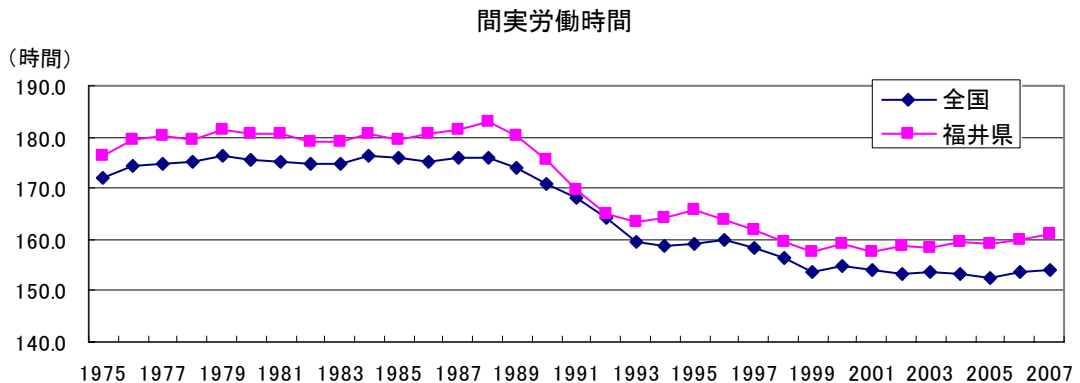
さらに、福井は女性の労働力率および就業率ともに、全国平均を上回っています。しかし、このことは、新たな労働力としての女性の絶対数が他県等に比べより少ないことを意味します。

また、不況の影響により、正規雇用者の副業が認められ始めた一方で、従来、行政が担ってきた街づくりなどの分野で、ビジネスを通して社会的課題を解決しようとする新たな働き方を促進する動きがあります。

今後、福井では他県に先駆け多様な就業形態とその受け皿を整備する一方で、就業形態にとらわれず、一人ひとりの能力を引き出す労働環境を整備する必要があります。さらに、ライフサイクルに合わせた柔軟な働き方を選択できるようにして、労働生産性を高めたワークライフバランスを実現する必要があります。

1 実労働時間の推移

- ・1990年代に週休2日制の定着などにより一旦は大きく減少した実労働時間ですが、近年は再び緩やかな増加傾向が続いています。
- ・また、福井県の月間労働時間は全国より長く、ワークライフバランスの実現には、ワークシェアリング等を進めることで労働時間を短縮することが必要です。

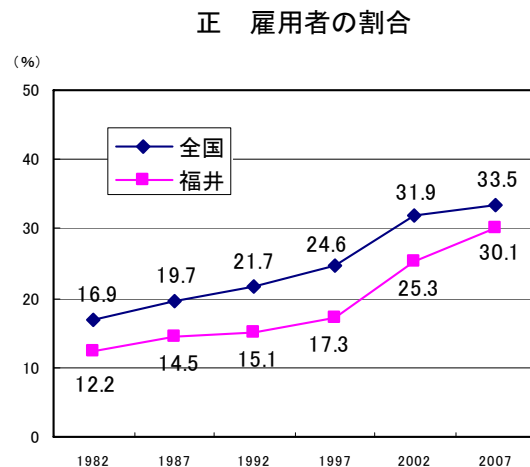


※常用労働者を常時30人以上雇用する事業所を対象に調査した月間労働時間の平均値

出典：厚生労働省「毎月勤労統計調査」

2 非正規雇用者の増加

- ・最近、非正規雇用者の増加が全国的に大きな問題となっていますが、福井県でも、雇用者全体に占める非正規雇用者の割合は増加が続いています。
- ・非正規雇用者の保護やセーフティネットの整備を進めるとともに、正規・非正規に関わらず、誰もが意欲的に能力を発揮できる環境を整えていくことが重要です。



※正規雇用者：勤め先で「一般職員」または「正社員」と呼ばれている雇用者（役員は除く）

※非正規雇用者：上記以外の雇用者で「パート・アルバイト」「派遣」「契約社員」「嘱託」などが含まれる

出典：総務省「就業構造基本調査」

3 正規雇用者のアルバイト承認

- ・不況の影響で、生産能力が余剰となった大手企業が正規雇用者の時間外アルバイトを承認する動きが出ています。

4 ソーシャル・エンタープライズ（社会的企業）

- ・まちづくりや福祉事業などの従来、行政が担ってきた分野で、社会的課題の解決を目的とした事業主体が注目されています。利潤よりも社会貢献を第一の目的とし、事業で得られた利益は、ビジネスやコミュニティに再投資されます。

ソーシャルビジネス（ソーシャル・エンタープライズ）の概要

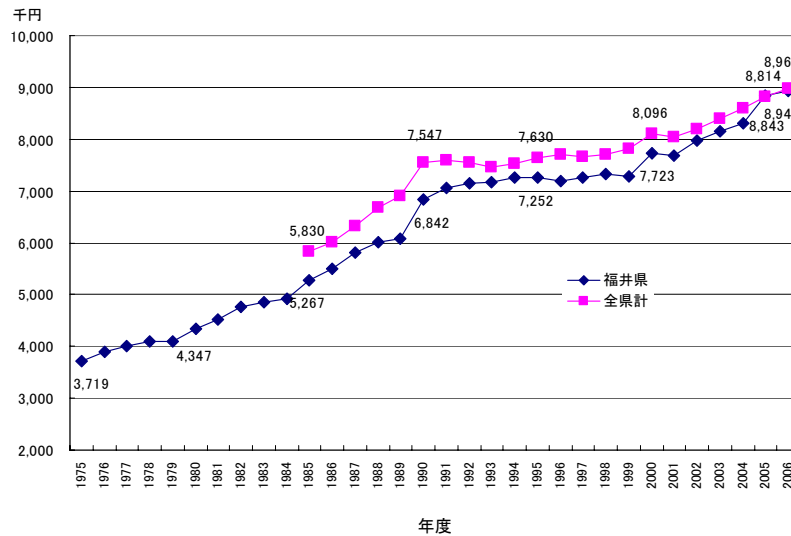
項目	内容
定義	<p>社会性：現在解決が求められる社会的課題に取り組むことを事業活動のミッションとすること</p> <p>事業性：上記のミッションをビジネスの形に表し、継続的に事業活動を進めていくこと</p> <p>革新性：新しい社会的商品・サービスや、それを提供するための仕組みを開発すること。また、その活動が社会に広がることを通して、新しい社会的価値を創出すること</p>
組織形態	NPO法人が約半数を占め、営利法人（株式会社等）は約2割
事業者数等 （推計）	<p>日本の市場規模：約 2,400億円</p> <p>事業者数：約 8,000人</p> <p>雇用規模：約32,000人</p>

出典：経済産業省「ソーシャルビジネス研究会報告書」

5 労働生産性

- ・本県の就業者一人当たりの労働生産性は、上昇傾向にあり、都道府県計と同水準となっています。今後は、就業人口が減少していく中で、さらなる労働生産性の向上が求められます。

福井県および都道府県合計の労働生産性

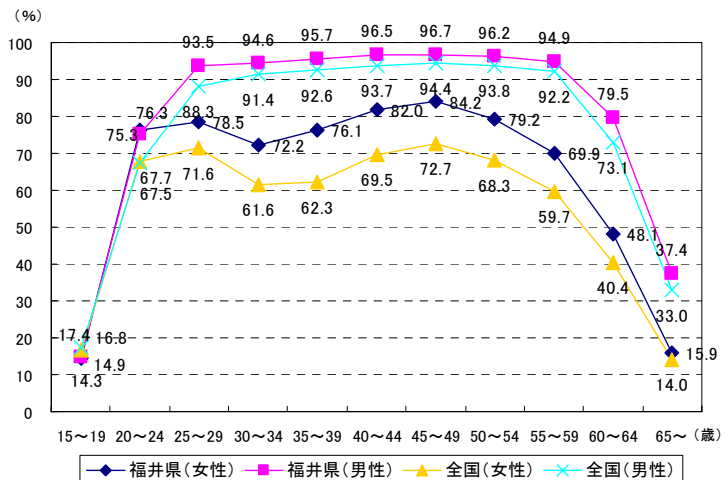


出典：福井県政策統計課が県民経済計算より算定

6 女性の労働力率

・日本の女性の労働力率は子育て期の30～34歳で一時的に減少します。この傾向は半世紀にわたり変わらない日本独特のものですが、福井県の場合、労働力率の減少は全国に比べて緩やかです。

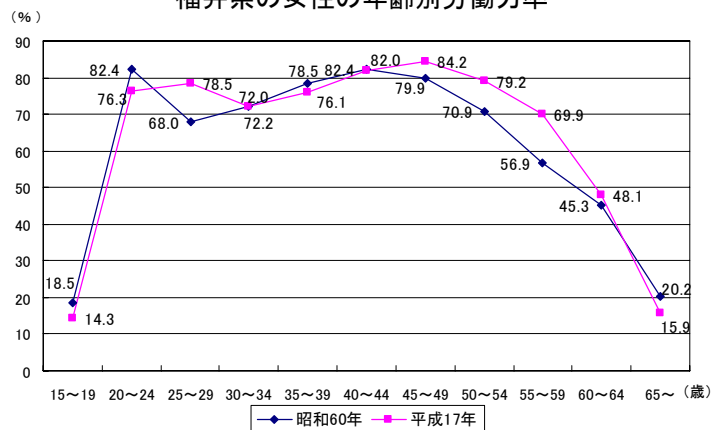
福井県および全国の年齢別労働力率



出典：総務省「平成17年国勢調査」

・一方、欧米諸国は、半世紀前には女性の労働力率が日本の半分程度だったにもかかわらず、現在は日本を上回り、さらに子育て期の労働力率の低下も生じていません。

福井県の女性の年齢別労働力率

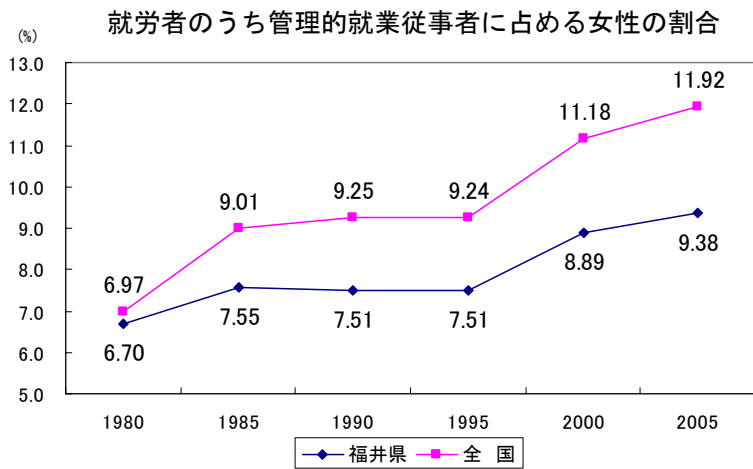


出典：総務省「国勢調査」

・晩婚化、晩産化などの要因により、福井の女性の労働力率の減少期および上昇期の年齢が高くなっています。

7 就労者のうち管理的就業従事者に占める女性の割合

- ・福井県の管理的就業従事者に占める女性の割合は、昭和55年に比べ上昇しているものの、全国との差は広がっています。
- ・女性が最大限に能力を発揮するには、女性自身の意識改革も必要となります。



出典：総務省「国勢調査」

8 世代間による男女の役割分担に対する意識の違い

- ・1973年と2003年の比較では、男女の家庭と職業の両立に関する意識は、男女とも全ての年齢層で大きく増加しています。
- ・男女とも、1973年当時の年齢が高いほど2003年時の意識の変化は鈍化しており、世代間の格差となっています。

「女性も家庭と職業を両立するべき」の世代別の状況

世代	男性(73)		男性(03)		女性(73)		女性(03)	
	1973年時の年齢		2003年時の年齢		1973年時の年齢		2003年時の年齢	
新人類ジュニア (84~98生)			16~19	39%			16~19	43%
団塊ジュニア (69~83生)			20~34	46%			20~34	55%
新人類 (54~68生)	16~19	11%	35~49	52%	16~19	19%	35~49	61%
団塊 (44~53生)	20~29	17%	50~59	47%	20~29	25%	50~59	53%
戦後 (29~43生)	35~44	15%	60~	41%	35~44	28%	60~	43%
戦前 (~28生)	45~	19%			45~	19%		

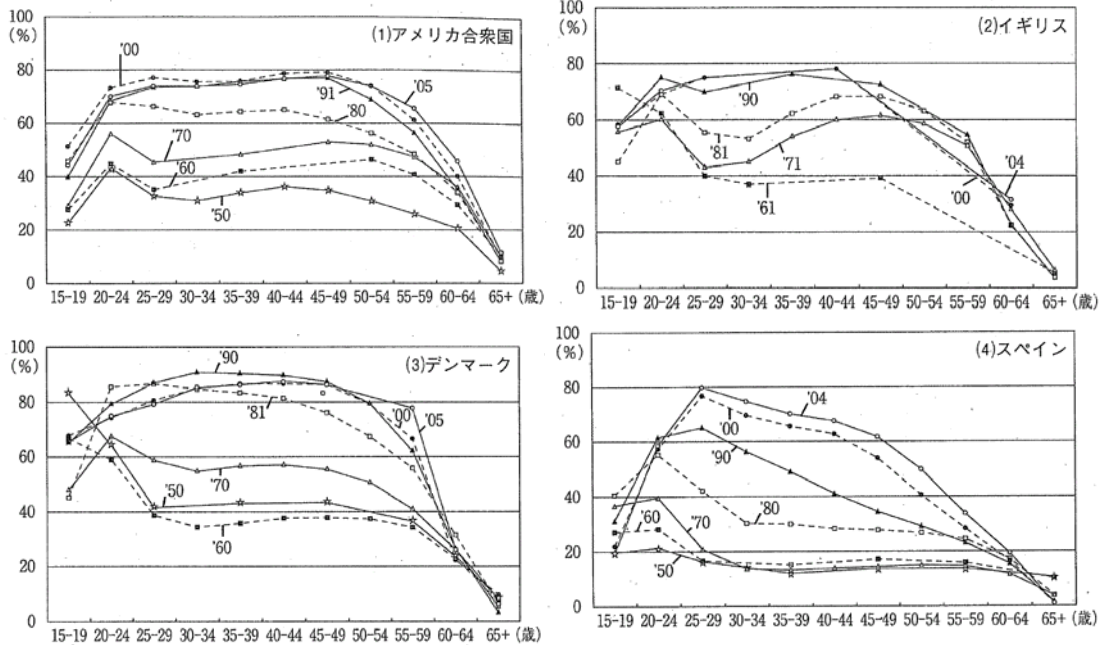
出典：NHK放送文化研究所「現代日本人の意識構造（第六版）」

9 諸外国の事例

- ・女性の社会進出が進んでいるといわれるアメリカやイギリス、デンマークをみると、女性の労働力率が概ね50%を超えるのは1970年代以降、60%を超えるのは1980年代以降であることがわかります。また、1990年代以降は、概ね80%台前後の高い労働力率となっています。

この数値を福井県の女性と比較した場合、福井では、既に昭和30（1955）年に女性の労働力率は概ね6割を超えており、アメリカやイギリス、デンマークに比べても女性の労働面での社会進出は進んでいたということが出来ます。

各国の女性労働力率の推移



出典：NHK放送文化研究所編「現代社会とメディア・家族・世代」
第2章「近代家族は終焉したか」（落合恵美子）から引用

<ふくい2030年の姿>

- ・従来の「公」の仕事を、地域の「社会的企業」が担うようになり、地域貢献などの仕事に多くの人が参加
- ・働く場・働き方の多様化により、世代間ワークシェアリングが進むとともに、家族や社会全体の労働バランスが向上
- ・家族のライフサイクルに合わせた社会を構築し、男女の役割分担を意識せず、互いの特性や能力を認め合う女性・男性の共立社会を実現

・従来の公の仕事や地域自治に関わる仕事について、福井では半専任の形での参加が可能となり、多くの人が公の利益に資する事業に参加し、やりがいを持って働いています。

- ・社会全体のワークシェアが進み、正規・非正規の枠にとらわれない雇用が実現し、労働時間や賃金の格差も減少しています。（景気に左右されない公的需要を事業化、多くの労働者で仕事をシェアするシステムの構築）
- ・社会的ニーズが高い医療や介護、農業や観光などの分野において、公が担ってきたセクターを事業として行う社会的企業が増加し、雇用の受け皿として機能するだけでなく、保育など、女性の安心基盤創出に関わる事業も増加し、女性のワークライフバランスの向上に寄与しています。
- ・雇用対策は、失業対策から、人材育成が中心となり、社会的ニーズを踏まえた「オーダーメイド人材育成」が行われています。基礎的技能の習得に加え、求人先やその顧客固有のニーズに応えられる教育が施されるなど、人材としての付加価値を高めた上で再就職するため、高いパフォーマンスを発揮し、長期雇用に繋がっています。育児後の社会参加を望む女性にも活用され、多様な職業選択が可能な社会が実現しています。
- ・熟年（※）・達年・老年世代が、家事・育児・介護等のコミュニティビジネスの担い手となって、世代間ワークシェアリングを積極的に進めています。
※熟年：45～59歳の人のこと
- ・福井独自の技術や信用や信頼をコンセプトにしたサービスを提供することで、モノやサービスの付加価値を高めて、一人当たりの労働生産性を向上させ、短時間勤務でも効果的な経済活動を行っています。
- ・男女混合名簿で育ち、男女の役割分担を意識しない世代が社会の中心となる中で、お互いの優れた特性や能力を認め合い、評価し、最大限に活かすことにより、役割の均衡が取れた男性・女性の共立社会を実現しています。
- ・現在の男性のライフサイクルに合わせた仕事中心の社会を見直し、労働時間を自己管理するとともに、男女間で課題を共有し、子育てや介護に男女を問わず取り組む、家族のライフサイクルに合わせた社会を構築しています。
- ・テレワークなど場所や時間にとらわれない柔軟な働き方や、家事支援ロボットの普及により、男性・女性が同じように子育て期間中の就業の有無や勤務形態を選択し、仕事と家庭を両立させる柔軟な労働形態「ワークオンオフ」が実現することで、女性が家庭のみに収束することなく、社会の中で積極的に役割を担い、活力ある社会が実現されています。

3-5 教育が夢をはぐくむ

<概要>

人口が減少するこれからの時代は、家庭生活や地域づくり、経済活動（仕事）などあらゆる生活の場面で、今まで以上に一人ひとりの存在や役割が大きくなります。

こうした時代をたくましく生き抜く人材を育成するためには、福井の特性を活かした子育て環境、教育環境をより充実する必要があります。

子どもたち（人間）の成長にとって最も大事なことは、子どもの資質や能力を理解しながら「多くの大人（人間）がいかに良質で積極的なかわりを持つか」ということであり、福井では、広く社会に開かれたオープン・システムの中で子育てや教育を行う環境づくりを進め、子どもたちも大人も、夢と希望を育みながら学び・活動しています。

<2030年に向けた課題>

福井県の子育てについてみると、合計特殊出生率が全国唯一3年連続で上昇していることなど、子どもを生み育てやすい環境が整い、全国有数の子育て先進県となっています。

また、福井県の教育については、全国学力テストの結果等をみてもわかるとおり、長年、全国トップクラスの水準を維持してきました。体力についても全国1、2位の水準にあります。この背景には、勤勉で粘り強い県民性をはじめ、家族・地域のつながりが強く家族等の子育て力や教育力が高いこと、地域や学校に落ち着きのある環境が残っていること、教員がレベルアップに努めていることなどが考えられます。

しかし、2030年に向けて少子化がさらに進展し、子どもの数そのものが大きく減少するとともに、子育てや教育を支える家庭や地域社会、学校が大きく変容しているため、学校の在り方だけでなく、教育の主体を担う家庭や地域の変容を十分考慮することが重要となります。

1 少子化の進展

- ・現在、福井県の14歳以下の年少人口は12.1万人（同級生8千人）ですが、2030年には7.9万人（同級生5千人）で、現在の65%にまで落ち込みます。子どもの数の減少は、家庭や地域社会、学校の姿に大きな変化をもたらします。
- ・両祖父母、父母の「6つのポケット」を持つ子どもたちが増加するなど、少ない子どもが多くの人々に保護されるような環境になります。
- ・子どもの少ない社会になると、「子どもがいないこと」や「大人の視点」を前提としたまちづくりや社会制度となる危険性が高まります。子ども自身にとって優しくない、子どもを持つ人の生活や活動が制限される社会が到来する危険性があります。
- ・少子化が進み、学校・学級規模がさらに縮小するとともに、2030年までには学校の統廃合が避けられない地域も出てきます。集団生活を通して教育効果を上げてきた学校本来の機能が低下するおそれがあります。

福井県の年少人口の推移と子育て、教育環境

				1960年	1980年	2005年	2030年	対05年
年少(0-14歳)人口 (人) a				231,000	181,000	121,000	79,000	65.3%
(同級生数:単純平均値) (人) b (=a/15)				15,400	12,067	8,067	5,267	
世帯数 (世帯) c				164,000	213,000	272,000	265,000	
小学校	小学校数(分校含む、休校除く) (校) d			360	254	216	—	
	児童数 (人) e			106,470	76,665	49,922	—	
	(1小学校当たり平均児童数) (人/校) f (=e/d)			296	302	231	—	
中学校	中学校数(分校含む、休校除く) (校) g			127	83	84	—	
	生徒数 (人) h			46,548	33,293	25,467	—	
	(1中学校当たり平均生徒数) (人/校) i (=h/g)			367	401	303	—	

出典：「福井県統計年鑑」、「学校基本調査」

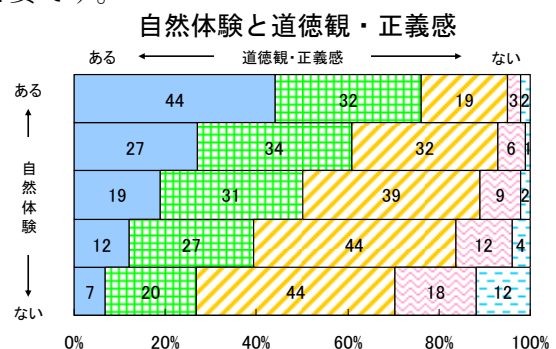
2 教育面の課題

- ・ PISA（OECDによる国際的な生徒の学習到達度調査）等の国際学力調査において、日本人の「学力（科学リテラシー、読解力）」の低下が指摘されています。また、「理数離れ」現象を指摘する声もあります。学力低下や理数離れは日本の国際競争力の低下や生活・文化の質の低下につながるおそれがあります。子どもたちの興味・関心を引き出しながら「学力」を定着させるための教育内容・方法を工夫改善していく必要があります。
- ・ 親の所得や学歴が子どもの学歴などに大きな影響を及ぼすことが社会学的な研究により明らかにされています。生まれた家庭環境により、子どもに大きな不利益が及ばないよう、対応が必要です。
- ・ 小中学校の連携を強化するための研究・実践が福井県で始まりました。連続性・系統性のある学習カリキュラムの開発・導入、子どもの成長段階に応じた生活指導の改善など、義務教育9年を見通した学校教育の在り方が問われています。
- ・ 「小一プロブレム」や「中一ギャップ」など、学校への進学を機に学校・学級生活に適應できない子どもたちが増加しています。将来の「引きこもり」や「ニート」にもつながりやすいといわれる「不登校」、「いじめ」の件数も増加傾向に歯止めがかかっていません。
- ・ 多様化する価値観や学校に対する信頼感の低下への対応が必要であり、学校の情報開示と評価（オープンな学校）、学校外部の関係者との調整、社会問題化する「モンスターペアレンツ」への対応を進める必要があります。
- ・ 福井県の子どもは、学力や体力は全国トップレベルの水準にありますが、希望を持っている子どもの割合が全国平均を下回っています。子どもの親世代を含め、みんなが希望を育てあうようになる必要があります。
- ・ 希望実現には挫折がつきものです。挫折は希望や夢の実現のワンステップと考え、新たな行動に結びつけるような学びあいが必要です。

- ・ 自然体験と道徳観・正義感との間には相関関係が認められるといわれます。

出典：独立行政法人国立青少年教育振興機構

「青少年の自然体験活動等に関する実態調査報告書」



<ふくい2030年の姿>

- ・福井独自の「六育」の仕組みにより、夢や希望を持った福井っ子、福井人が活躍
- ・地域などでの世代間交流を含め、認め合い・競い合い・高めあう福井人が、地域に誇りと愛着を持って活動
- ・ソーシャルビジネスを含め、全国トップレベルの子育て支援体制がさらに充実。男女が共に働き、楽しみながらの子育てを実現

- ・福井独自の「六育」の仕組みにより、福井人としての徳を有し、学力・体力に優れ、夢や希望を持った福井っ子が育っています。六育とは、「知育・体育・徳育・才育(※)・食育・夢育(※)」を指し、福井独自の教育方法として全国のモデルともなっています。

※才育は個性を伸ばす教育、夢育は希望の輪を活かした「子どもの夢や希望をはぐくむ教育」です。

【知育】

- ・持続可能で質の高い文化・社会を形成するため、基礎学力とともに応用力、創造力も重視され、子どもや親、教員、地域が総合的な学力を向上させる様々な挑戦を続けています。また、家庭環境に関わらず高いレベルの教育が保証され、希望が持てるようなシステムの整備が進みます。
- ・「学齢」に られないエイジフリーの複線型教育カリキュラムが一般化し、また、双方向のICTが広がり、個々人に応じた学習の選択が可能になっています。
- ・太陽光発電や「野菜のカーテン」など環境に最大限配慮した施設整備等が大きく進みます(再掲)。子どもたちは日々の学校生活の中で身近に環境問題について学び、地域社会で環境を改善するための主体的な活動を展開しています。

【体育】

- ・地域活動の拠点となる小学校などの体育館には、簡単なトレーニング機器などが設置され、また、スポーツ教室・健康教室も開かれ、老若男女が利用しています。地域の人々が何らかのスポーツやレクリエーションを行い、健康寿命がさらに伸びています。

- ・福井の子どもたちは、日頃の競い合いを通じて全国トップクラスの体力を維持しています。家庭や地域、学校でのスポーツや遊びを通して、小さい頃から運動習慣が身に付いています。

【徳育】

- ・道徳の基本は、人への関心と共感、感謝の心であり、子どもたちが集団の中で支え合い、切磋琢磨しながら学ぶことのできる教育環境づくりが重視されます。掃除のような普段の作業の中で、自然に徳が育つような教育も大事にされます。
- ・学校やNPOなどが協力して、自然への感謝や環境保全の重要性を体感する「体験型学習カリキュラム」を開催し、道徳観・正義感を養う機会を提供しています。

【食育】

- ・「S o i 」が世界共通語となり、福井の食育運動が世界中に広まっています。
- ・子どもの頃から食育を学んだ世代が親となり、家庭で朝食をしっかりと、地元の野菜等を使った健康的な食生活が実践されています。(再掲)
- ・子ども園、小中学校で畑を耕して農作物を作り、自分たちで調理して会食するような「体験型食育」も広がっています。

【才育】

- ・小・中一貫教育、中・高一貫教育などが広がり、住民が選択できる仕組みが整っています。
- ・子どもたちの興味・関心、疑問に応えながら、一人ひとりの特性や個性、能力を探り、最大限に伸ばす「才育」がICT機器も活用しながら実践されています。
- ・オプション教育として、留学、スポーツアカデミーへの参加、農山村での体験宿泊など、子どもの関心に応じた、自由度の高い学習が可能となっています。

【夢育】

- ・希望学の成果を取り入れ、対話や行動を通して、希望を育み、実現させる教育が行われます。希望の輪(WSAT)の仕組みが各学校で活用され、各自が「私の夢育カルテ」を作るなど、それぞれの地域・学校でその仕組みが進化しています。

- ・不登校やひきこもり、ニートなどについても、希望学やカウンセリング、ソーシャルワークなどの知見を組み合わせ、チームを組んで解決に当たり、子どもたちの挫折経験等を希望につなげていきます。

【地域の教育力】

- ・子ども会など地域の様々な行事が活発に行われ、子どもも高齢者とのふれあいや農作業を手伝うなど、子どもが地域の中で一定の役割を担い、多くの人の中で育まれます。
- ・地域内、地域間にも健全な競争意識が息づいていて、地域対抗の運動会などにより、お互いが切磋琢磨しながらよりよい地域をつくっています。地域の歴史や地域に生きる人々についての学習が盛んで、地域に対する理解と誇りを持って生活しています。

【子育て支援】

- ・保育園と幼稚園は「子ども園」に一元化され、「子ども園」では、福井六育に基づいた幼児教育が行われています。
- ・子育てを地域のみんなでサポートするという意識を持ち、高齢者や子育て経験者が積極的に母親と課題を共有できる場「井戸端」を設けることで子育てに対する安心基盤を地域につくり、子育て不安が縮小し、出産に対する抵抗が軽減されています。
- ・子育て世代の所得支援、低負担での保育・教育サービスの提供や、家族休暇制度などによって「家族に優しい 括的な社会制度」を整え、持続可能な経済と両立しながら合計特殊出生率1.7～1.8程度を確保します。

3-6 交通は楽しく優しく

<概要>

福井は1世帯当たりの自家用自動車保有率が全国1位と車中心の社会です。しかし、高齢社会においても安心して生活できるように、公共交通や自転車などを活かした地域の交通網を整備することが重要です。

中部縦貫自動車道や舞鶴若狭自動車道などの高規格幹線道路、北陸新幹線といった高速鉄道の整備が進められており、高速交通体系が整備されつつあります。また、県内の幹線道路網の整備も進み、えちぜん鉄道や福井鉄道福武線といった地域の公共交通も地域全体が支え、誰もが使える公共輸送網として維持されています。

今後も社会インフラを活用し、福井のどこに住んでも安心して生活できる基盤づくりが必要となります。

<2030年に向けた課題>

高度成長期以降のモータリゼーションの進展に伴い、利用交通手段は鉄道・バスから自動車へと移行しました。自動車運転免許保有者の増加とあいまって利用者の減少した鉄道・バスは路線網を縮小し、現在では公共の支援が無ければ公共輸送網の維持が困難となっています。

北陸新幹線は、現在、福井駅部が完成していますが、北陸新幹線の整備により首都圏と福井が直接結ばれることとなり、交流人口の増加が見込まれます。インフラの整備に併せて、魅力の発掘、魅力発信など、魅力のある地域づくりが必要です。

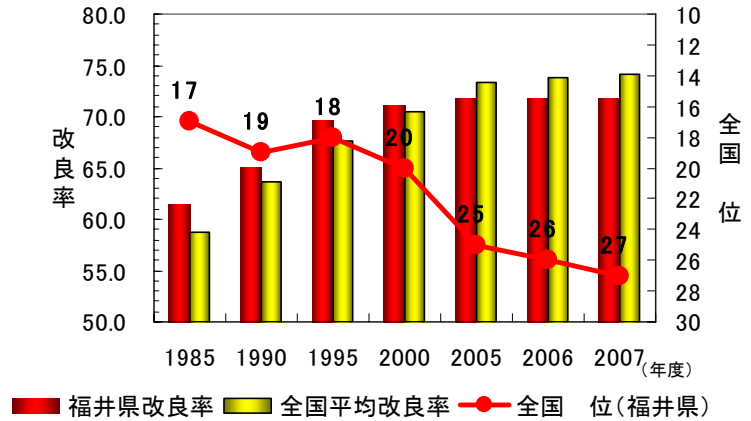
道路網は、北陸自動車道が昭和55年には県内で全線開通し、モータリゼーションの進展にあわせ、着実に整備されてきました。現在は、若狭地方を貫する舞鶴若狭自動車道や奥越地方から首都圏へのアクセス向上を図る中部縦貫自動車道をはじめ県内の幹線道路の整備が進められています。

地域交通網に関しては、近年の高齢者人口の増加により高齢者による交通事故が増加傾向にあり、交通事故死者のうち半数以上を65歳以上の高齢者が占めている中で、高齢者に限らず、誰もが安心して安全に暮らせるように、道路網の再構築や公共交通網の整備を行う必要があります。

1 幹線道路（国道・県道）の改良率（すれ違い可能道路の割合）

- ・県内の幹線道路は、1985年（24年前）には約6割の改良率でしたが、現在は7割を超える改良率となり、県内ほとんどの道路で自動車のすれ違いが可能となっています。
- ・今後は、新しい交通手段にあわせた道路空間の有効活用が必要となってきます。

国道・県道の改良率の推移



出典：国土交通省道路局「道路統計年報」

2 高規格幹線道路の供用率

福井県内の高規格幹線道路の整備状況（2009. 3. 28 現在）

- ・自動車による人や物の移動を支える高規格幹線道路は、現在、計画の約半分が開通しているのみで、今後一日も早い全線の開通が必要です。

路線名	計画長 ()	供用長 ()	供用率
北陸自動車道	88.2	88.2	100.0%
自動車道	70.4	20.4	29.0%
中部自動車道	59.3	12.0	20.2%
計	217.9	120.6	55.3%

出典：福井県道路建設課資料

3 北陸新幹線の整備状況



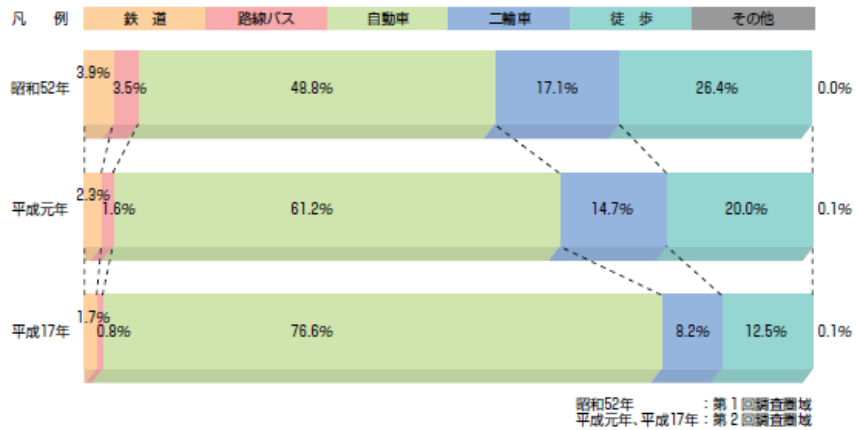
出典：福井県新幹線建設推進課資料

- ・関東、北陸、関西を結ぶ北陸新幹線は、東京・長野間が1997年10月に開業しています。長野・金沢間については2014年度末の開業を目指し工事が進められており、福井駅部については2009年2月に完成しました。2008年12月16日、政府・与合意事項に金沢（白山総合車両基地）～福井間および敦賀駅部が2009年末までに認可されることが盛り込まれました。

4 利用交通手段

代表交通手段構成の推移

- ・福井都市圏（嶺北一円）においては、昭和52年に7.4%あった鉄道・バスの利用者が、2005年には2.5%と大幅に減少しています。

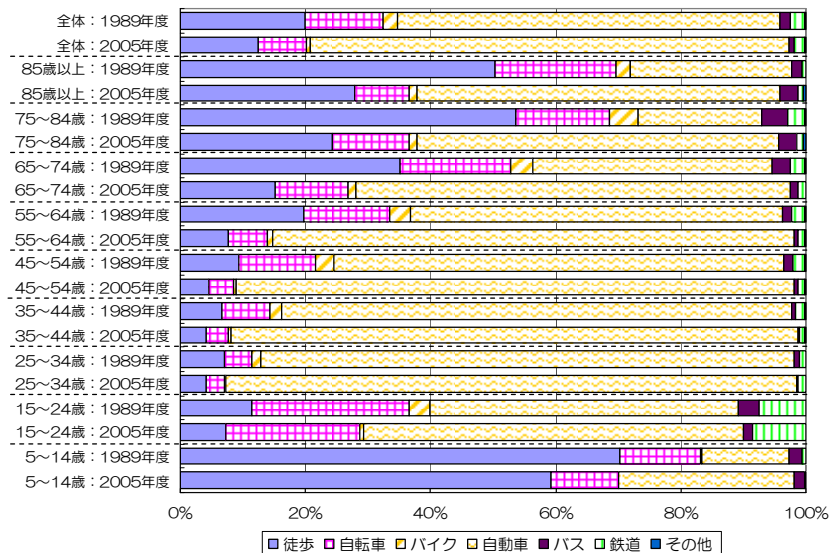


出典：福井県都市計画課「H17福井都市圏パーソントリップ調査」

- ・二輪車・徒歩も約半分に減少し、自動車の利用が大幅に増加しています。

年代別利用交通手段（1989年度－2005年度）

- ・65歳以上の高齢者の自動車利用が大幅に増加しており、団塊の世代の高齢化により、今後、さらに増加していきます。



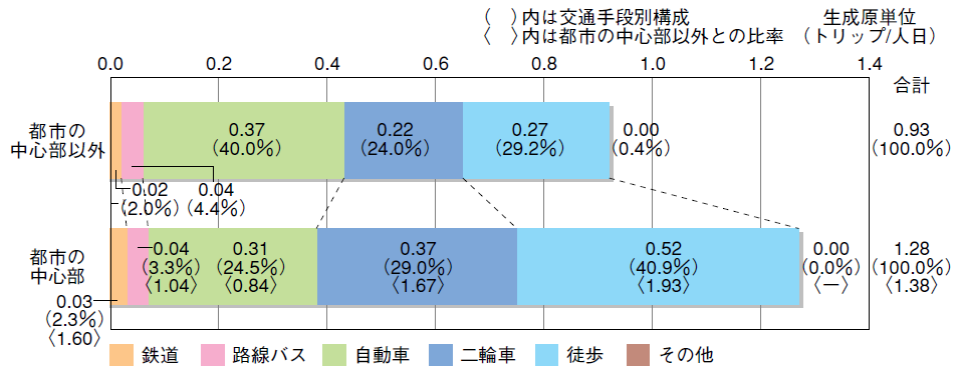
出典：福井県都市計画課「H17福井都市圏パーソントリップ調査」

- ・14歳以下の子どもの自動車利用も倍増しています。

5 高齢者（運転免許非保有者）の1日当たりのトリップ数

- ・都市の中心部に住んでいる高齢者の約7割が、徒歩または二輪車で行動しています。
- ・都市の中心部に住んでいる人のほうが、都市の中心部以外に住んでいる人より多く活動しています。

自動車運転免許のない高齢者の居住地域別1人1日当たりのトリップ数（生成原単位）



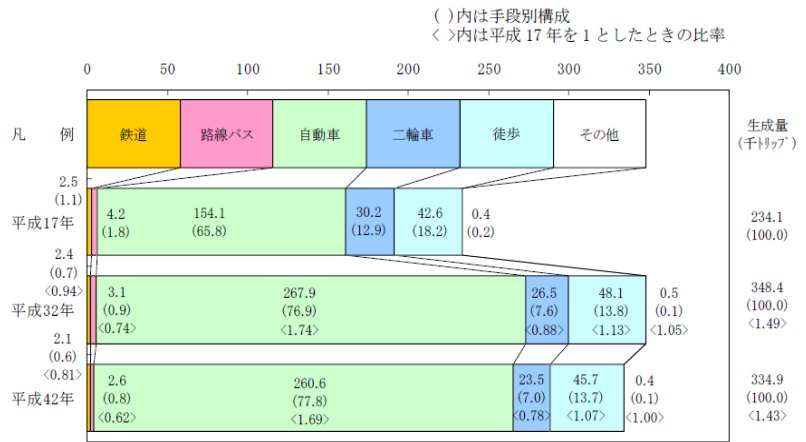
注：都市の中心部は、福井市・鯖江市・越前市・大野市・勝山市の昭和45年DIDを含むゾーンを設定している

出典：福井県都市計画課「H17福井都市圏パーソントリップ調査」

6 高齢者の交通の見通し

高齢者の代表交通手段別トリップ数の将来見通し

- ・2005年には、自動車を利用する人が約65%を占めていましたが、2020年～2030年にかけては約75%にまで上昇すると見込まれます。



出典：福井県都市計画課「H17福井都市圏パーソントリップ調査」

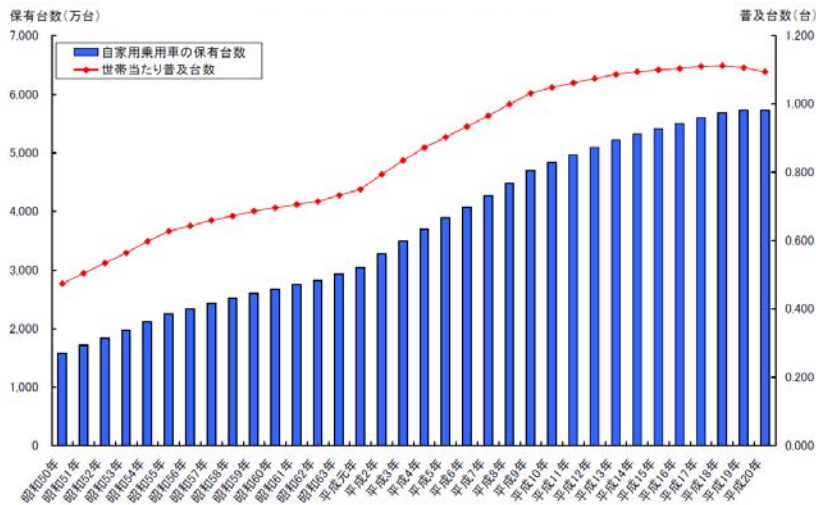
- ・高齢者のトリップ数も2020年～2030年にかけては2005年の約1.5倍となることが予測されています。

- ・高齢者の移動手段として、シニアカーの普及が進んでおり、現在、80歳以上の約20人に1人が利用しています。

7 自動車保有台数

- ・全国の自家用乗用車の保有台数は、頭打ち傾向にあり、今後は、人口の減少や運転しない高齢者の増加などにより減少していくものと考えられます。(2008年3月末現在 5,728万台)
- ・本県の1世帯当たり自家用乗用車保有台数も2007年3月末には1.766でしたが、2008年3月末には1.751に減少しました。

自家用乗用車の世帯当たり普及台数



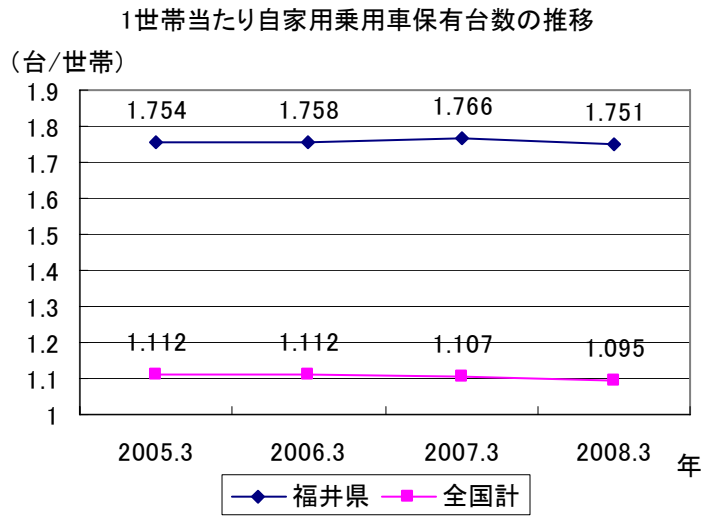
出典 (財)自動車検査登録情報協会

都道府県 の自家用乗用車の普及状況(軽自動車を含む)
平成20年3 現

都道府県	一世帯当たり台数		1,000人当たり台数	
	台数	位	台数	位
福井	1.751	1	577.821	8
富山	1.725	2	596.767	3
	1.686	3	630.503	1
	1.677	4	586.074	6
山	1.653	5	547.312	11
	1.639	6	604.636	2
城	1.625	7	595.719	4
長野	1.590	8	587.666	5
新	1.541	9	534.695	15
山	1.536	10	583.050	7
・	・	・	・	・
・	・	・	・	・
・	・	・	・	・
兵庫	0.954	43	392.069	43
京都	0.885	44	379.074	44
神奈川	0.788	45	343.128	45
大阪	0.705	46	310.654	46
東京	0.510	47	252.269	47
全国計	1.095		450.771	

乗用車とは、普通乗用車(3ナンバー)、小型乗用車(5・7ナンバー)及び軽自動車のことを指します。

出典 (財)自動車検査登録情報協会



出典 (財)自動車検査登録情報協会

8 まちづくり

- ・北陸新幹線が整備されると、福井市と金沢市との 激しい 圏争いが始まるのが予想され、それまでに魅力あるまちづくりを進めていく必要があります。

■佐世保のパラドックス

- ・不景気の極みなのに空店舗がほとんどない
(地主が家賃を柔軟に上下させ新規参入を誘発)
- ・郊外や福岡との激しい競争に負けていない
(商圈人口32万人の1割のニッチ市場をグリップできている)
- ・新規再開発投資がないのに個店中心に集客
(人が歩くのは、1階が切れ目なく店につながり、空間にゆとりがあるから)

佐世保の客は、モノではなく「雑踏」を消費しに集まってきている!!

出典：藻谷浩介「実測！ニッポンの地域力」、「講演会資料」

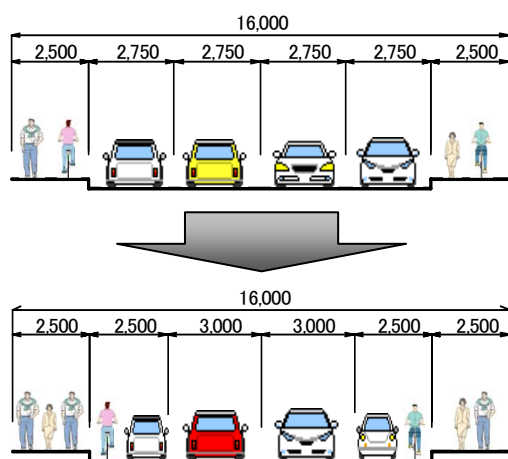
<ふくい2030年の姿>

- ・農産物等の直販やリラクゼーションルームを備えたゆとり・楽しみの多機能バスが、地域で運営・運行され、地域を循環
- ・空間の再配分および掛け合わせによる利便性の高い交通システムが構築され、高齢者の足としてゴールデンビークルが普及
- ・駅やバスの停留所を中心としたレンタサイクルシステムにより、環境に配慮した移動手段が交通体系を支える

【道路空間の再配分】

- ・2030年の福井では、小型電動の低速型車両（ゴールデンビークル）が普及し、普通の自動車運転が困難な高齢者が安心して道路を走ることができます。
- ・2030年には、現在の自動車の半分程度の大きさの小型電動自動車も普及し、現在の小型自動車に変わるものとして普及しています。福井では全国で初となる小型電気自動車や自転車専用のスロードライブ車線が設置されるなど、現在の道路の幅員構成が見直され、歩行者・自転車・小型電気自動車のいずれもが安全に走行できるようになっています。

空間再配分のイメージ



小型電動自動車が普及すると、道路の幅員構成を見直すことが可能となり、歩道側の1車線を小型電動自動車や自転車専用レーンとして利用できます。

現在、自転車は歩道上を通行しているため、歩行者が危険にさらされていましたが、道路空間の再配分を行うと、安全に通行できるようになります。

【科学技術の応用】

- ・科学技術の進歩により、「ITS交通事故減・追突防止システム」が実用化され、交通事故が大幅に減少し、高齢者でも安全に移動できるようになります。

(例)

- ・車間通信システムと運転予測システムを活用した出会い頭事故などの防止
- ・センサーによる自動車故障・事故予知判断ができるシステム
- ・交通事故を未然に回避することのできる自動 機能

【環境に配慮した交通】

- ・自家用自動車を率先して小型電気自動車に切り替えることで、福井県の小型電気自動車の世帯当たり普及率が上位となっています。
- ・トラックによる幹線 物輸送を、地球に優しく、大量輸送が可能な海運または鉄道に転換するモーダルシフトが発達し、敦賀港、福井港の利用が増加しています。

【まちづくり】

- ・中心市街地では、不動産の所有と利用の分離により、空き店舗の利用が進み、1階部に切れ目なく個性的な店が並び、人が雑踏を消費しに集まっています。また、中心市街地の利便性を求める高齢者などの住宅が回帰し、定住人口も回復しています。
- ・市街地部では、職場と住宅、商業施設、公共施設がまとまって配置されるコンパクトシティを指向したまちづくりを目指し、市街地内の交通は、高度道路交通システムによりLR（ライトレールビークル：light rail vehicle）やコミュニティバスなどの乗り継ぎがスムーズに行える利便性の高い交通システムを構築しています。
- ・商店街や住宅地内の道路は、車のためだけの道路ではなく、歩行者や自転車を優先し車のスピードを抑制する道路づくりを進め、ゆとりと り合いの心を持った「スロードライブ社会」を実現します。
- ・環境への負荷の低減を図るとともに、自動車の運転能力が低下した高齢者の自由な移動を確保するため、鉄道駅や基幹バス路線の停留所周辺に住みやすいまちづくりを進めています。

- ・近距離の移動は自転車を活用できるように市街地の中にサイクルポートを設置するとともに、自転車レーンを整備するなど自転車の走行環境を改善し、自転車を利用しやすい環境を整えます。

【公共交通】

- ・2030年には団塊の世代が後期高齢者となり、自動車での移動が減ることが予想されますが、郊外部においても、整備が進んだ道路網を活用し、NPO、地域住民、行政が協働してバスや乗り合いタクシーなどを運行し、自動車と公共交通の選択が可能な交通体系となっています。
- ・地域では、子どもや高齢者などの交通弱者を携帯電話やデジタルテレビ放送の双方向通信機能を活用したデマンド方式の「コミュニティ交通」が支えています。コミュニティ交通は、地域の達年世代がコミュニティビジネスにより運営しています。
- ・バスの循環（山手線風）地区が設定され、その地区を電気バスが1日循環しており、循環経路を中心としたまちづくりがなされています。また、バスは単なる移動手段だけでなく、農産物等の移動直売機能やマッサージチェアなどリラクゼーション機能を備えた多機能バスが運行しています。
- ・えちぜん鉄道と福井鉄道は相互に接続し、LR で運行されています。市街地の路面軌道部分は生でわれ、美しい景観や騒音の緩和をもたらしています。また、駅の清掃等の日常管理は、地域で支える鉄道として、地域住民がボランティアで行っています。

【海外事例】

(フランスのレンタサイクル制度)

- ・フランス国内の主要都市では、セルフサービスのレンタサイクル制度が導入されています。
- ・パリでは2007年7月からレンタサイクル制度が開始され、地下鉄や路面電車、鉄道などと乗り継げる便利さが受け、多くの人々が利用しています。
- ・利用方法は、低料金（60分以内1ユーロ：2009年3月現在1ユーロ=約130円）で最寄りのサイクルポートから貸自転車を借り、利用後は近くのサイクルポートに乗り捨てます。大半の利用者は、短距離、短時間の移動に利用しています。
- ・サイクルポートは、約1,500所、貸自転車は2万台以上が準備されています。

3-7 自然・環境を活かす

<概要>

福井は山あり海あり平野あり、自然豊かで水のおいしいところです。県民も福井の豊かな自然やおいしい水を大事に思っています。しかし、工業化の進展や人口減少、高齢化により、農林水産業離れが広がり、放置された森林の増加、水田の機能低下、生物多様性の衰退などが深刻化しています。

2030年に向けて、緑の大切さが再認識され、農林業の役割も見直されます。また、世界的な水不足が問題となる中、福井のおいしい水が注目され、福井の技術が世界の水不足解消に貢献します。

2030年には、福井の自然の中での療養や農作業を求めて、関西や中京、首都圏などの人々が福井で二地域居住をしています。

<2030年に向けた課題>

平野部の自然については、人口減少、農家の高齢化などによって、人の管理が行き届かなくなり、自然が荒れ、耕作放棄地が増加することが懸念されます。

山林でも、管理が行き届かず、間伐や伐採がなされないまま、木の成長が進まない植林地が増えています。また、山林の松くい虫の被害が進んでいます。

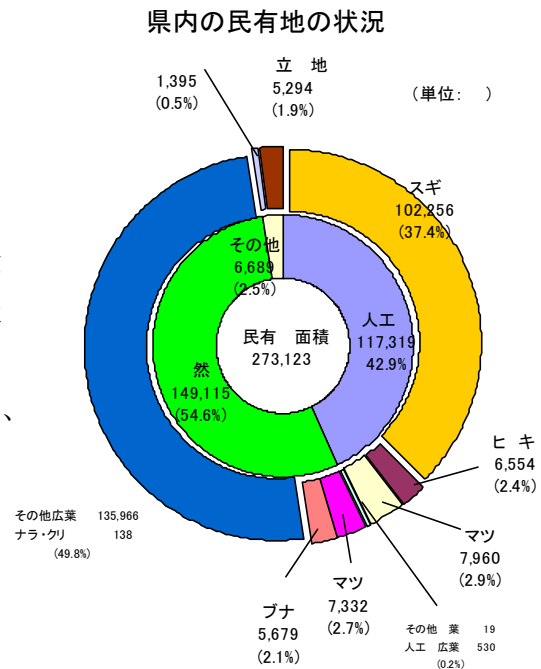
小川や田んぼといった身近なところで以前見られたホタルやメダカなどの生き物が、外来生物の繁殖、農薬の使用、コンクリートを用いた三面張りなどにより、減少しています。また、宅地造成や資源確保などのため、田や山そのものが減少している地域もあります。

海については、奇岩が並ぶ海岸の景観や、越前ガニやカレイなどのおいしい魚を楽しむだけでなく、リアス式で釣りを楽しんだり、タラソセラピー（海洋療法）により美と健康を保つなど、福井の海の価値を高めることが重要です。

水の世界的需要増加により、水の価値は現在に比べて高まっているため、この機会をビジネスチャンスに結び付けることが求められます。

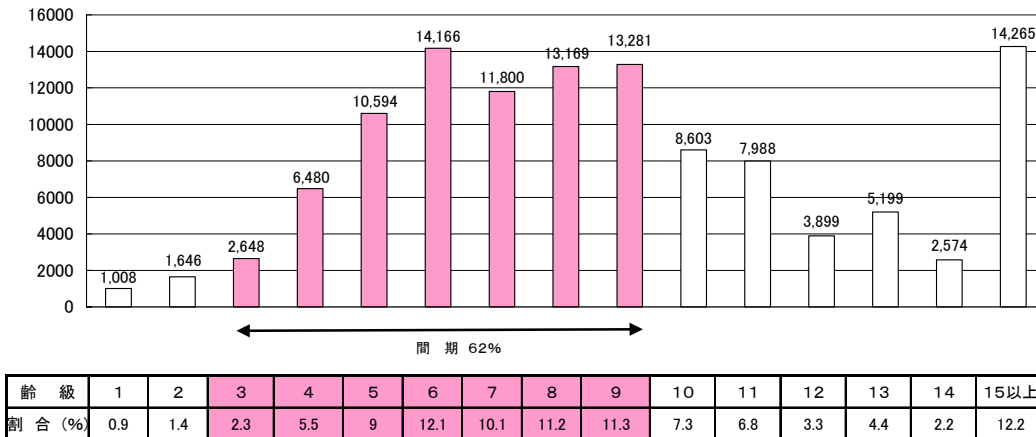
1 森林の変化

- 福井県の県土約42万のうちの、約75%は森林が占めています。そのうち、約11万がスギを主体とした人工林となっていますが、近年は十分な整備をされないまま放置されている人工林が増え、森林の環境保全機能が低下しています。森林の整備・保全、木材・バイオマス利用等を進めることにより、循環型社会の構築を図ることが必要です。



出典：福井県「福井県林業統計書」(平成2008年3月末現在)

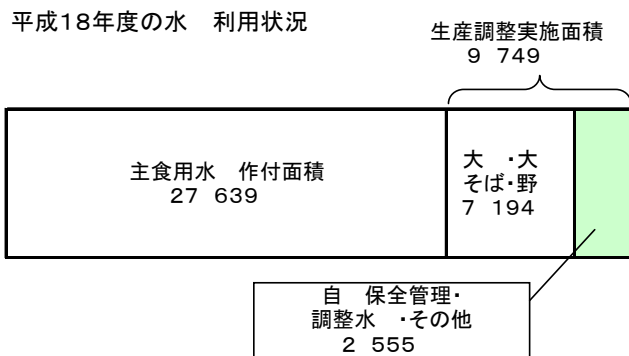
民有人工林の齢級配置 (2008年3月末現在)



出典：福井県「福井県林業統計書」

2 水田の機能低下

- 田んぼには、米づくりの他にも水や土壌浸食の防止、気温上昇の防止、動植物のすみかなど、様々な役割があります。しかし、農業の担い手不足などにより、近年、休耕田の面積は年々増加しています。



出典：福井県農林水産部「農林漁業の動き」

3 動植物の変化

- ・自然豊かな福井ですが、野生生物の種は急速に減少しつつあります。自然資源の持続可能な利用と生物多様性の保全が課題となっています。
- ・また、アライグマやブラックバスなど外来生物の増加により、福井の在来種が危機にさらされています。

福井県の絶滅のおそれのある野生生物

	絶滅	野生絶滅	絶滅危 A類	絶滅危 B類	絶滅危 II類	準絶滅 危	情報 不足	地域 個体群	総計
乳類	1		1		2	2			6
鳥類		1	5	9	16	11	4		46
虫類				1	2		1		4
両性類			1		1	1			3
淡水魚類			2		4	1		1	8
小計	1	1	9	10	25	15	5	1	67
虫類			6		12	11	6		35
陸産類					7	9	3		19
淡水類			2		2	6			10
小計	0	0	8		21	26	9	0	64
総計	1	1	27		46	41	14	1	131

出典：福井県「レッドデータブック」

4 飲料水の状況

- ・北陸地域は水道水を飲む人の割合が高いといえる一方、約4割の方は浄水器を設置したり、ミネラルウォーターを購入するなどしています。

特に措置を講じずに、水道水をそのまま飲んでいる人の割合 (単位：%)

北海道	東北	関東	北陸	東海	近	中国	四国	九州
47.7	65.0	31.3	59.6	41.4	27.0	37.0	46.0	24.0

出典：内閣府「水に関する世論調査」

5 世界の水需要と福井の水

- ・世界的に水の需要が高まり、水資源の確保が課題になります。

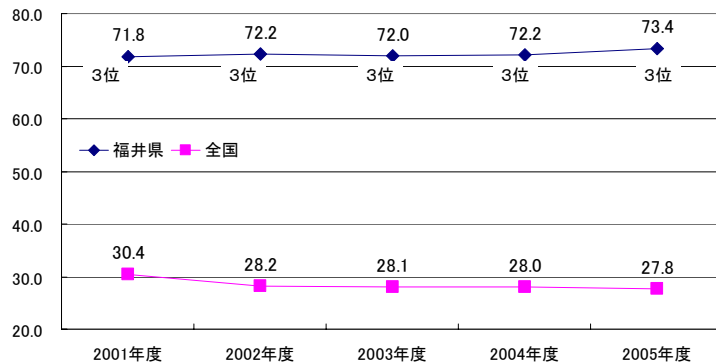
1日1人当たりの生活用水の需要見通し

1995年 2025年
 174リットル 213リットル (20%増)

出典：国際連合「生活用水需要量将来見通し」

福井県および全国の取水に対する地下水の比率

- ・福井の上水道は、地下水からの取水が7割を超え、全国3位と、福井の地下水は、日常生活に欠かせないものです。



出典：厚生労働省「全国簡易水道統計」

6 自然の活用

- ・福井を訪問する県外客の動向を見ると、旅行の目的として、特に30代～40代で「海や山などの自然鑑賞」をあげる人が多くなっています。今後は、観光資源として自然をうまく活用する工夫が大切です。

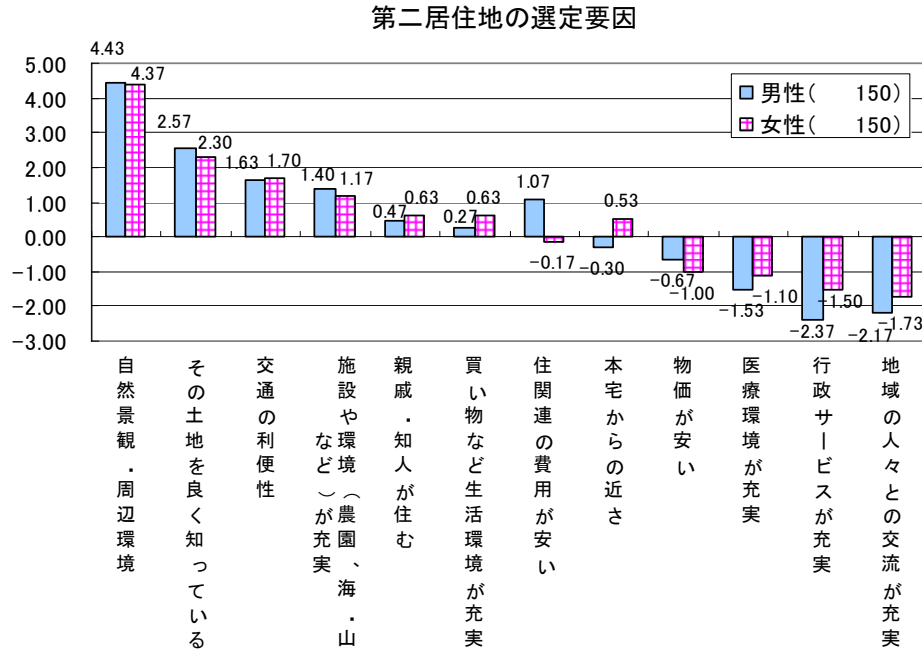
福井県への旅行目的

(単位:%)

項目 年齢層	海や山などの自然鑑賞	歴史や文化施設の見学	温泉	飲食(味覚)	スポーツ	仕事(出張)	祭りやイベント	産業観光(農業体験等)
全体	20.1	14.9	21.1	15.2	9.9	4.5	2.0	2.7
10代	25.9	14.5	15.2	8.0	22.5	0.4	1.5	2.1
20代	20.2	6.0	15.8	9.9	27.1	2.6	3.0	1.9
30代	22.6	11.6	17.9	10.2	17.3	4.5	1.7	1.7
40代	21.4	12.9	20.5	13.5	10.7	6.1	2.4	2.4
50代	17.7	17.4	23.7	18.4	3.0	6.0	1.8	3.4
60代	19.1	18.9	23.6	20.8	1.4	3.6	1.7	3.5
70代以上	18.9	23.9	26.0	18.9	0.7	1.5	2.5	2.8

出典：福井県観光振興課「平成16年観光客動向調査」

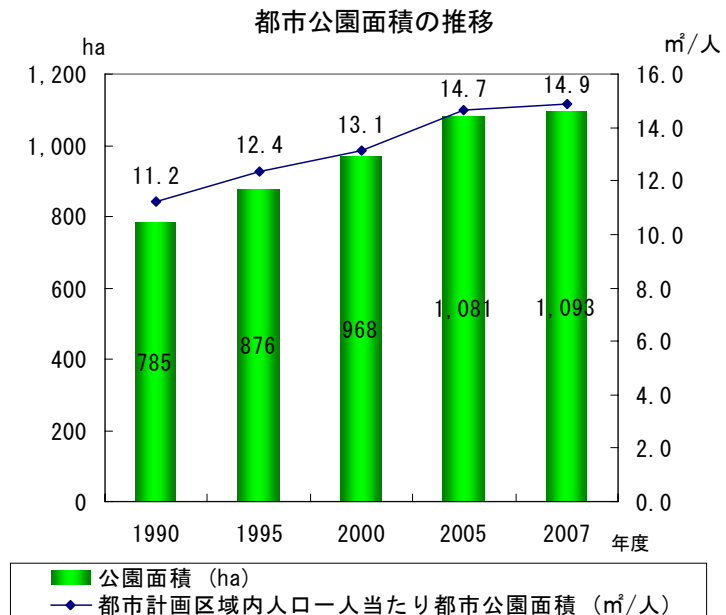
- ・第二居住地の選定要因としては、「自然景観・周辺環境」、「その土地をよく知っている」の順となっています。
- ・選定要因の「自然景観」は、各地で見られることであり、福井の特徴をPRする必要があります。



出典：日本総合研究所、楽天リサーチ「二地域居住実践者の実態アンケート」

7 都市の緑

- ・福井の都市公園の面積は増加しています。都市公園を憩いの空間づくりに積極的に活用していく必要があります。



出典：福井県都市整備課資料

<ふくい2030年の姿>

- ・グリーンツーリズムや緑の親戚の普及などにより、緑がより身近なものになることで、山や林の重要性が高まり、林業の役割も見直される
- ・福井の技術が、世界での水資源確保に貢献
- ・ヘルシー療養や共同農園（シュレバーガルテン）などを求めて、二地域居住者が増加

【緑】

- ・山林の所有者や林業に携わる人たちが協力することで、山は地域の財産として、公・民有林の区別を越えて活用されています。
- ・森林に育つ樹木の入れ替えが進み、花 症に悩む人が少なくなっています。
- ・熱帯雨林の保護等により、世界的に木材供給が不足する一方、自然を相手にした仕事をしたいという人々が増え、林業が見直されます。さらに、自分が子ども世代に遊んだトンボやホタルなどが生息する里地・里山を今の子ども世代にも触れ合わせたいと願う達年世代が、Eサポーターとして、放棄水田等の管理を始めています。こうした動きにより、木材生産のための人工林、天然林、里山の林などに ーニングされ、適切な整備が行われています。
- ・松くい被害を防止する手法が試験研究機関で開発され、森林の景観が良くなっています。
- ・IT、デジタル社会が進展する一方で、余暇には自然を体験する志向が高まっています。中山間地域などでは、そうした要求に応えるべく、地元の青年世代が中心となって自然体験型のレクリエーションを提供する動きが活発になっています。里地、里山、奥山、海岸はトレイル（踏み分け道・山道）でつながり、本物の自然を体感できる地として評価が高まります。林道を活用した親子ウォーク大会などが催されており、森林浴を楽しんでいます（参考：福井県内の林道延長116 km）。来訪する都市部の青年世代との交流が活発化します。

- ・森林の 効果が見直され、専門家によるカウンセリングと一体となった心理的ケアが始まっています。

【土】

- ・地域環境型農業の普及により、意欲的なプロ農業者が耕作放棄地も田畑として再び活用し、米をはじめ、様々な農作物を生産しています。
- ・手軽にできる食料生産への関心が高まり、耕作放棄地は、二地域居住者のEサポーターが使用する共同農園（シュレバーガルテン）としても活用されています。

【水】

- ・世界の水資源の獲得競争の中、水の循環利用が重要となっており、福井の技術が、世界での水資源確保にも貢献しています。（再掲）
- ・よりおいしい水を求める人々が増加し、福井のそれぞれの地域で続けられてきたおいしい水を守る活動が世界から注目されています。
- ・カルキ さをなくすことのできる上水道処理施設が導入され、日常使用する水道水においても、おいしい水を飲むことができます。

【海】

- ・生きがいとして地域の自然を守る活動に参加する達年世代が増え、断 奇岩が連なる越前海岸の荒々しい海岸線や、嶺南の美しい などの景観が守られ、遠方からも多くの人を訪れる人気のスポットとなっています。
- ・海がめの産卵など、動植物が種を保存する活動を手厚く保護し、話題づくりを行うことにより、観光客の増加につながります。
- ・タラソセラピー（海洋療法）と福井に伝わる健康食を組み合わせたヘルシー（健康と海水）療養を訪れる人が増えています。

【動植物】

- ・環境ボランティア等により野生生物が生息するための環境（湖や 地、森林など）を守る活動が活発となり、かつては絶滅に していた動植物の数が回復しています。身近な場所で様々な動植物と触れ合える環境が守り継がれています。

【自然に触れる】

- ・公園の植物や街路樹、民家の庭木など、市街地には緑があふれ、「森の街」となっています。また、地域の自然環境を大切にする意識に変化し、地域ごとに、地域に住む動植物の「自然環境マップ」を作成するなどの、自然環境を記録する活動が展開されています。
- ・「植栽の里親」が路側緩衝帯を管理し、在来種を用いて緑の豊富な前庭として育てています(植栽の里親制度)。個性的に整備された緑の連続するラインが街中に並んでいます。
- ・釣り（サクラマス、アユ等）や伝統工芸（越前焼、若狭 ）、そば打ちなど福井の気候風土に根付いた本物の体験、文化（= 地）を求め、二地域居住者が増加しています。
- ・環境保護に取り組む企業は、売上げの一部を自治体に寄付しています。

3-8 地域でつながる

<概要>

福井は、隣近所との付き合いが多いなど、地縁、人と人とのつながりがまだ残っています。これは、福井が集落での助け合いが不可欠な「稲作を中心とした農業」の地であったことや三世代同居が多いこと、県外との交流が比較的少ないなど、福井独自の産業や文化の影響が大きいと考えられます。

しかし、福井においても、2030年には単独世帯の増加や町内会、自治会等への参加率の低下など、地域のつながりの希薄化が進む要因が増えていくと考えられます。

地域社会が安定して、人々に安心感を与える存在になるためには、人々の交流が不可欠であり、交流を促進する拠点が必要となります。

<2030年に向けた課題>

地域のつながりが強いといわれる福井においても、ボランティア活動は減少傾向にあり、その理由として、「人々の親交の機会不足」などが挙げられています。

また、従来、地域の交流を促進してきた子どもの数も減少し、それに伴い、地域の交流の拠点となってきた小中学校や保育園、幼稚園の統廃合も進んでいます。

さらに、地域において孤立化する確率が高くなる「集合住宅」は増加傾向にあり、自治会の加入率も減少しています。また、労働の 束時間が長いサラリーマンが増えたことなどによる地域活動の時間の減少など、地域のつながりを生み出す機会そのものが失われています。

福井が2030年においても地域のつながりのある社会でいるためには、人々のライフスタイルに合わせた新しいつながりを創出する仕組みが必要となってきます。

新しいつながりは、地域社会に安心感と住み心地のよさを生み出す基盤となり、安心感や住み心地良さは、地域の幸福度（QOC：Quality of Community）として、地域住民自らが高めていくものとなります。福井はQOCの高い地域として進化を続けます。

1 自治会加入率の推移

・福井市の事例を見ても、加入世帯数は微増しているものの、加入率は減少傾向にあります。特に、近年集合住宅が増えた地域において加入率の低下が進んでいます。

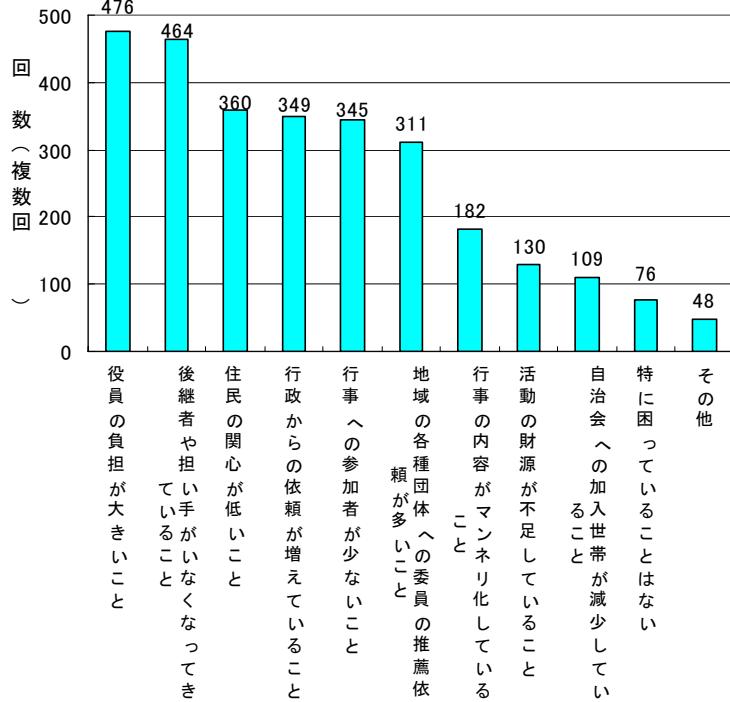
・自治会活動自体は、「役員の負担が大きい」、「担い手がいない」など、地域のつながりを支えてきた人やつながりを維持するための負担の集中が進んでいます。

福井市自治会加入率推移

年度	2001	2002	2003	2004
加入率(%)	84.6	83.9	83.3	83.0
加入世帯数(世帯)	71,182	71,134	71,236	71,511

出典：福井市資料

自治会活動を行う上で困っていること



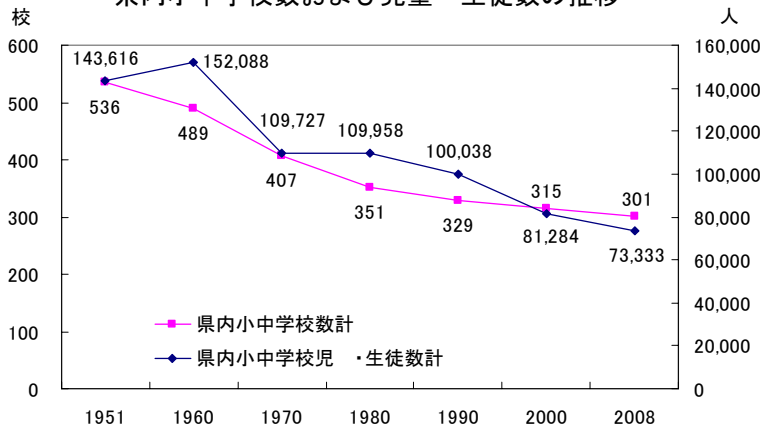
出典：福井市「自治会に関するアンケート」

2 県内小中学校等の推移

・福井県内の小中学校数は、小中学校の児童・生徒数の減少とともに減少傾向にあります。

・今後も小中学校の統廃合が進み、学校を中心とした地域行事等も減少していくおそれがあります。

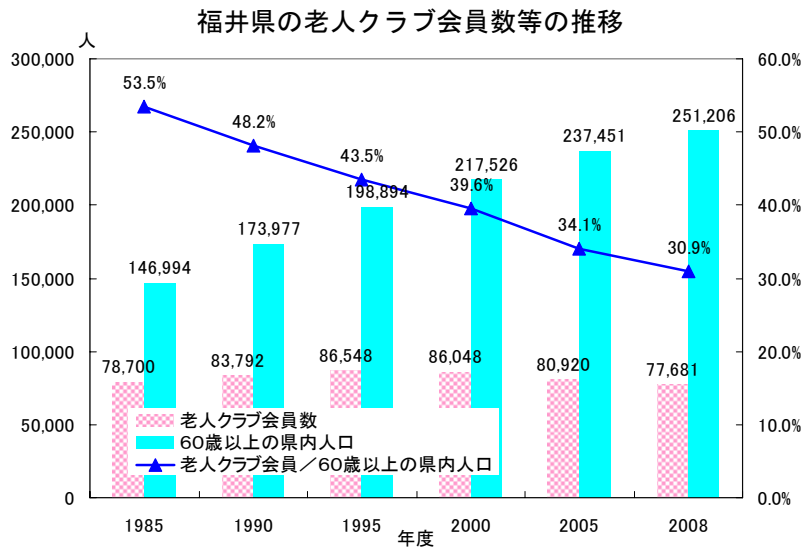
県内小中学校数および児童・生徒数の推移



出典：文部科学省「学校基本調査」

3 老人クラブ会員数等の推移

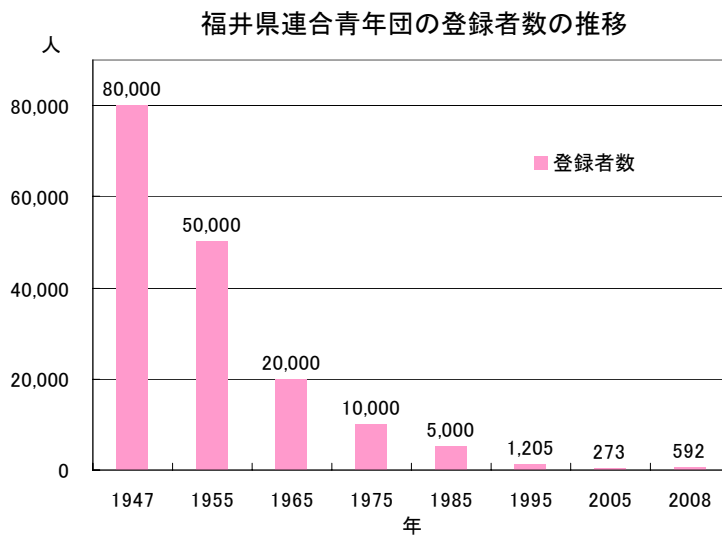
- ・ 県内の老人クラブの会員数はほぼ横ばいで推移していますが、60歳以上人口に占める割合は、減少傾向にあります。
- ・ 高齢者が増加する中で、高齢者が地域で主役となり地域のつながりの中心となる仕組みが必要です。



出典：厚生労働省「福祉行政報告例」

4 青年団の推移

- ・ 青年団は、1960年代頃までは、地域における自治の一端（防犯・防火・水防の補修など）を担っていました。
- ・ 1970年代の高度経済成長や高学歴化により、農村青年団の団員が減少しはじめ、1990年代からは、組織離れが深刻化し、団が消滅した地域などもあります。



出典：福井県生涯学習課資料

5 地域の祭り（つながり）の事例

- ・地域のつながりの代表例である「祭り」にも人口減少や高齢化により、存続できないものが出てきています。

種別	名称	行われなくなった時期	理由
無形民俗文化財	宇波西神社の神事芸能	平成15年	6地区の輪番で王の舞奉納を行っているが、1地区は戸数減少により中止
	太鼓踊	平成16年	地区の人口が減少したため中止

出典：福井県文化課資料

- ・一方で、福井市美山地区では過疎で中止されていた盆踊りを、地域外の児童生徒等が参加して20年ぶりに復活させる事例など、人を中心としたつながりを復活させています。

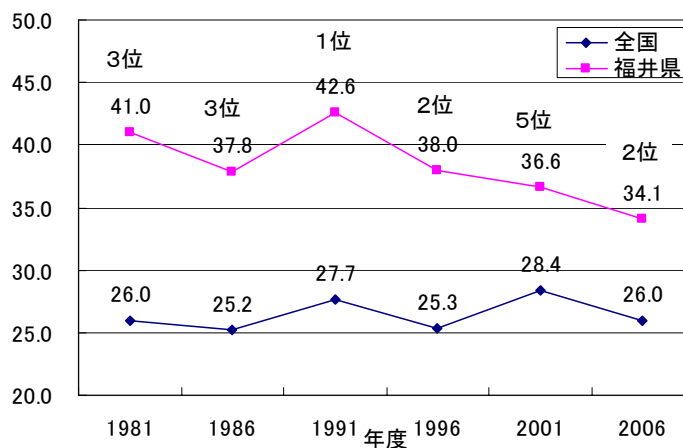
6 ボランティア活動行動者率（15歳以上）

- ・福井県は、ボランティア活動行動者率は全国トップクラスですが、年々減少傾向にあります。

- ・1997年のナホトカ号重油流出事故や2004年の福井豪雨災害の際には、多くの県民がボランティアとして被災地に駆けつけ、全力で復旧活動に取り組みました。

こうした力をQOCの向上に結び付けていくことが必要です。

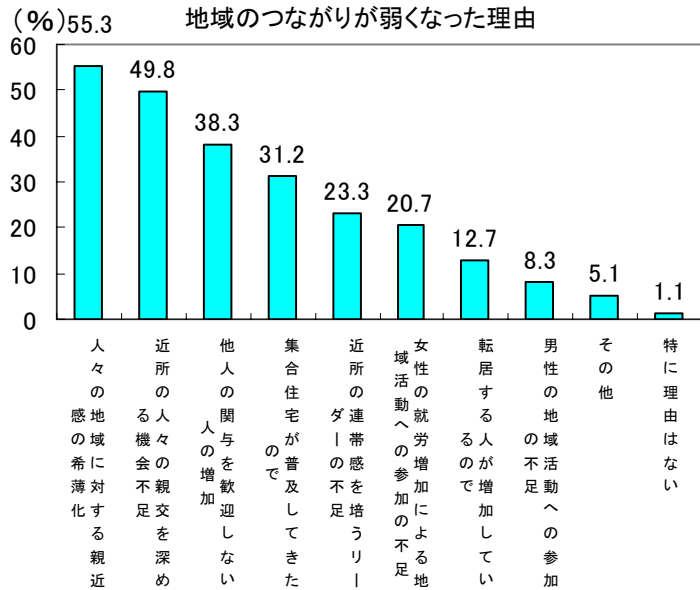
ボランティア活動行動者率（15歳以上）



出典：総務省「社会生活基本調査」

7 地域のつながりが弱くなった理由

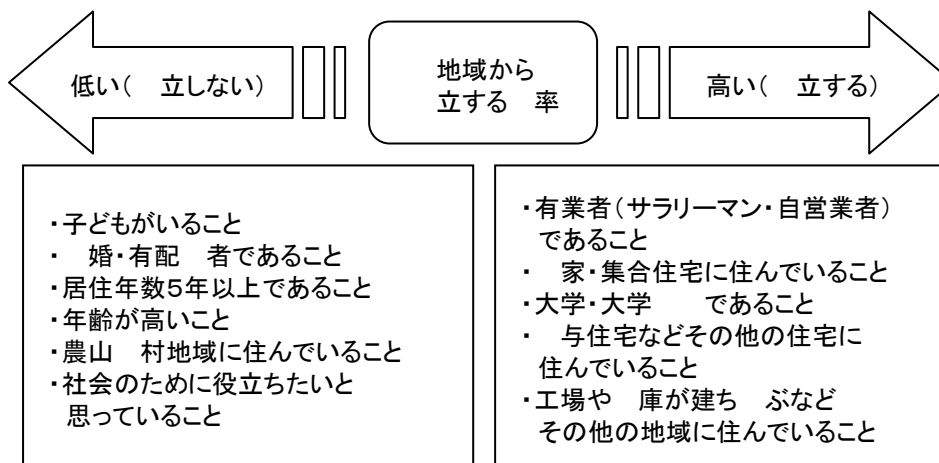
- ・地域のつながりが弱くなった理由として、「地域に対する親近感の希薄化」や「人々の親交の機会不足」が上位の理由となっています。
- ・地域のつながりの弱さは、地域の無関心な雰囲気、活動時間がないなどの環境的要因が大きいと考えられます。



出典：内閣府「平成19年版 国民生活白書」
 (内閣府「国民生活選考度調査」(2007年)により作成)

8 地域から孤立する確率

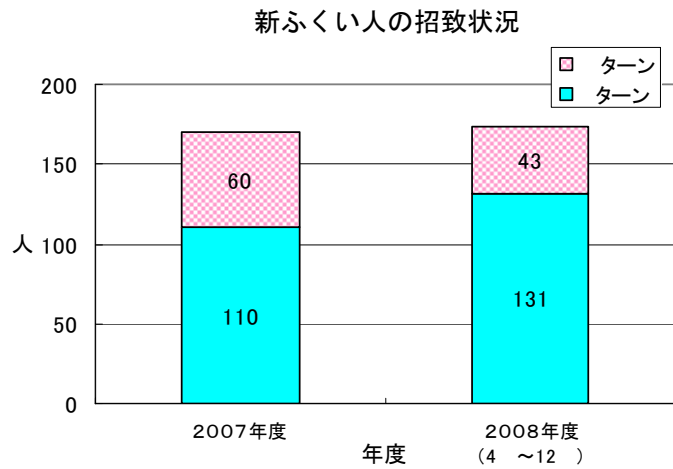
- ・子どもがいること、居住年数が5年以上であることが、地域からの孤立化の確率を低くし、有業者、借家に住んでいることが孤立化の確率を高くする傾向があります。



出典：内閣府「平成19年版 国民生活白書」
 (内閣府「国民生活選考度調査」(2007年)により作成)

9 新しいつながりの芽

・鯖江市河和田地区においては、福井豪雨の復興支援をきっかけに、県内外の大学生等による「河和田アートキャンプ」が2005年から行われています。学生は、地区の空き家に滞在し、創作活動と住民との交流イベントを行い、地域の人との交流を深めています。

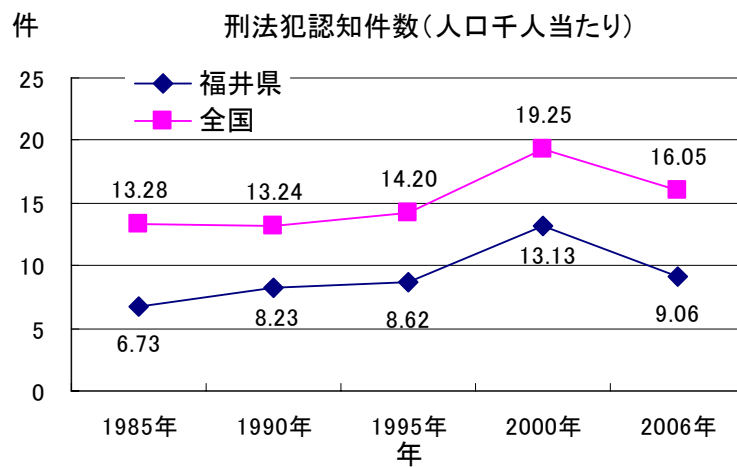


出典：福井県労働政策課資料

- ・敦賀市では、JRの直流化を契機に、関西の大学生が中心となり、体験型ブースやステージイベントを行い、地域住民や駅利用者との交流を図っています。
- ・Uターンに加えて、福井につながるのある人や福井の生活環境の豊かさを魅力に感じて、福井に移り住む「新ふくい人」が増加しています。

10 安全・安心な暮らし

・刑法犯認知件数（人口千人あたり）は、近年減少傾向にありますが、以前に比べて高い水準にあります。



出典：警察庁「犯罪統計書」

・犯罪を防止するために、地域のきずなや見守り活動を高めていく必要があります。

1.1 QOL（生活の質）

- ・ QOL（Quality of Life）は、医療・福祉の分野において、生活を物質的な面から量的にとらえるのではなく、個人の生きがいや精神的な豊かさを重視する考え方です。
- ・ 今後、日常生活においても、経済的豊かさよりも、安心・安全で豊かな生活を送りたいと願う人が増加すると考えられます。
- ・ 高齢者に関して、地域のつながりが高齢者の元気の要因、生活の質の向上につながるとの研究結果（東京大学総括プロジェクト機構ジェロントロジー寄付研究部門）があります。

<ふくい2030年の姿>

- ・ 地域住民の手による「地域の幸福度（QOC：Quality of Community）」の向上
- ・ つながりの主役は「地縁」から「子ども・高齢者を通じた縁」へ（子縁・ジェロ縁）
- ・ 誰もが歩いて通える公立学校が「地域の拠点施設」に変化

- ・ 地域の幸福度（QOC）の向上を目指し、地域の住民や企業、学校などが一体となって活動しており、地域での「一人一役」が定着し、みんなでこの地域に暮らしているという意識でいます。さらに、役割と責任により、QOCの向上という地域で共有する希望が生まれます。
- ・ 従来の地縁に代わる「子縁」や高齢者の活動による「ジェロ縁」などは、人が生活する上で、人とのつながりが重視される子育てや介護のシーンにおいて、住民が安心感を持てる社会基盤となっています。

- ・「子どもや高齢者が歩いて通える」生活圏にある公立小中学校に「福縁サロン」（世代を交流させる地域のたまり場の施設）が設置され、子ども・高齢者が毎日足を運ぶことで、地域活動の拠点にもなっています。
- ・新ふくい人や子ども、高齢者がいない世帯などでも、日常生活の相談や地域活動をする上で、地域の「福縁サロン」が地域のワンストップサービスセンターとなり、新たなつながりを生み出す拠点となっています。
- ・達年世代の人の家が、近所の子どもたちが集う「コミュニティホーム」として指定され、達年世代が「コミホマスター」として、子どもたちの放課後をサポートしています。
- ・労働と地域活動を両立させた達年世代が、豊かな地域を次世代に引き継ぐため、また、老年世代に対して豊かな地域での生活を提供したいという思いから、地域の「子ども」、「高齢者」を支える地域の担い手となっています。
- ・達年世代や老年世代が、家から出て地域活動を行うことにより、自然な見守り活動となり、子どもたちが見守られる安心感と防犯が促進されます。
- ・達年世代が中心となって、地域の幸福度（QOC）を向上させるために、地域の医療・介護、農業、治安や交通の分野の社会的企業（ソーシャル・エンタープライズ）を設立し、得られた利益やノウハウを地域社会に再投資しています。
- ・様々な生活サービス機能が地域内に分散配置され、それをコミュニティ交通がつなぐことで手軽に利用できる「コミュニティリビング」が実現しています。
- ・企業は「企業の社会的責任（CSR）」として、従業員の地域での社会貢献を積極的に支援しています。
- ・県内で地域活動を行う県外大学生や県内の大学・研究機関等で学んだ学生などが、「福育人」として県内外で活躍しています。これらの若者は、福井を身近に感じ、福井との接点を持ち、福井のサポーターとなり、新たなつながりの担い手となっています。

第2部

2030年のふくい物語

第2部 2030年のふくい物語

この第2部では、前報告書で描いた社会の姿と第1部で考察した2030年の福井の暮らしを、より分かりやすく世代に分けて描きます。

また、人々の暮らしぶりや課題は、年齢により異なることから、年齢を区分して描いていきます。この年齢の区分は、本報告書のP110のとおり、共通の価値観を有する「世代」で区分しており、世代ごとに、どのような希望を持ち、活躍しているのかを考えました。

さらに、社会の変化に伴い、福井人気質の殻を破り、一人ひとりの気概と行動により、社会をよりよいものへと変化させていくという想いを込めました。

2030年の福井のみなさんが希望を持って、この豊かな福井で暮らすためにも、これからその準備を進めていく必要があります。次に私たちが描いた2030年の福井の暮らしを参考にいただき、一人ひとりが2030年の自分の世代、その時の家族、地域を想像しながら、今から何をすべきか、どのような行動をすればよいのかを思い描けるようにまとめました。

第1章 2030年の世代の姿

＜世代－対立から継承・共生へ＞

スペインの社会学者オルテガは著書「危機の本質－ガリレイをめぐる」の中で、「世代は歴史を区分する上できわめて重要な概念であり、同年代の人々が同じ経験をすることで形成される。多くの場合はそれと対抗する形で次の世代が形成され、両者は交替するのではなく、同時に同じ歴史的事実に参与し、しのぎを削りながら時代をつくる。同一の出来事でも、それが二つの異なった世代の上で起こると、まったく異なった歴史的事実となる。」とし、さらに一生を15年間ずつの5つの世代「少年期」、「青年期」、「導入期」、「壮年期」、「老年期」に分けています。(ただし、オルテガの時代と比べ現代では平均寿命が延びていることに留意が必要です。)

また、ドイツの社会学者カール・マンハイムも著書「世代の問題」の中で、同時代に生まれた諸個人がその人間形成期である思春期に、その時代の特徴をなすような社会的・精神的な思潮に参加することなどを通じ、一つの世代として連結されるとする「世代論」を展開しています。

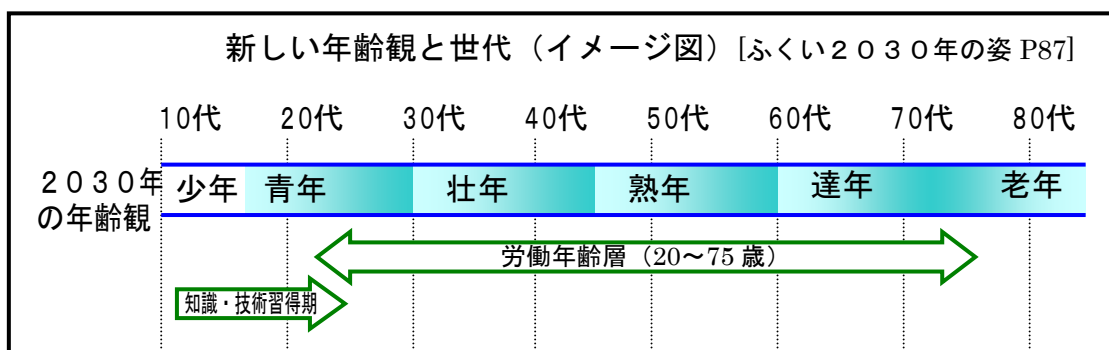
一方、日本においては、団塊の世代、新人類世代、団塊ジュニア世代など世代ごとに様々な名前が付けられ世代論が展開されていますが、各種の意識調査などを見てみると、どのような時代に自己形成をしたかにより意識や行動に明らかな違いが生じています。また、NHK放送文化研究所が実施している「日本人の意識調査」の分析結果からは、一つの世代の若い頃（青少年期）に形成された考え方は、年を重ねてもあまり変化しないことが読み取れます。

このため、世代による意識の変化を見ることを通して、現代社会の特性をより重層的に捉えることができます。また、次の世代の意識と行動、さらには働き方や家族のあり方など、新たな視点から、よりわかりやすく描くことができると考えられます。

また、従来、「いまどきの若者は・・・」に代表される世代ごとの価値観・文化の違いや年金・医療・雇用の問題など、世代は「対立」を軸として語られることが多く見られます。

しかし、少子高齢化の急速な進展による人口、労働力の減少や、晩婚化の影響による家族のライフサイクル・役割分担の変化など、2030年に向けて、世代間の関わり方が大きく変容し、世代間の問題は「対立」から「継承」、「共生」に変わらなければならぬと考えられます。

こうしたことから、前報告書で示した新しい年齢観を踏まえ、「子ども世代」、「青年世代」、「壮年世代」、「熟年世代」、「達年世代」、「老年世代」の6世代に区分し、各世代の2030年の姿と世代間の関わり方を検討することとしました。これは、オルテガの示した5つの世代に60～75才の達年を加えたものです。



2030年の6つの世代

名称	2009年の年齢	2030年の年齢		2030年の世代
—	—	0歳～16歳	2014年～2030年生	子ども世代
—	～10歳	17歳～31歳	1999年～2013年生	青年世代
新人類ジュニア	11歳～25歳	32歳～46歳	1984年～1998年生	壮年世代
団塊ジュニア	26歳～40歳	47歳～61歳	1969年～1983年生	熟年世代
新人類	41歳～55歳	62歳～76歳	1954年～1968年生	達年世代
団塊世代	56歳～65歳	77歳～86歳(以上)	1944年～1953年生	老年世代

出典：「ふくい2030年の姿」検討会作成

1 子ども世代（15歳）

子ども世代：2030年の年齢 0～16歳
（2014年～2030年生）

（2030年に向けた変化）

個人の心の変化		社会の変化
希望をはぐくむ心	→	地域の希望の醸成
自立する心	→	選べる教育
周囲のサポートに感謝する心	→	つながりの循環

<7歳まで：就学前>

福井では、子どもを産み育てることは楽しく素晴らしいことだという意識が広がり、少子化にある程度歯止めがかかって、3人っ子も増えています。妊婦健診や周産期医療の整備等により、赤ちゃんが元気に生まれ育っています。

育児休暇の取得やワークライフバランスの働き方が一般的になり、乳幼児は、父母のどちらかが休みを取って育てられています。子どもは地域や日本、世界の宝だという意識が浸透し、育児休暇をとることは仕事に勝るとも劣らず大事なことだと考えられています。

父母がともに働きに出る場合は、待機者ゼロの子ども園に預けられます。子ども園は、保育園と幼稚園が一元化されたもので、「福井六育」の仕組みはここでも取り入れられています。就学前の早期から六育が進められるので、子どもたちは家庭環境に関係なく、知・体・徳・才・夢・健全な食生活をはぐくむことができます。

子ども園では、子どもたちは、楽しく遊ぶなかで、仲間を想い、いろんなことに興味を広げ、学びを深めています。子ども園の先生たちも、乳幼児に適した六育の進め方について様々な工夫を凝らし、先生同士の勉強会も盛んです。

子ども園では、父母が迎えに来るまで預けられますが、三世代同居・近居が他府県と比較してある程度残っているため、祖父母が早めに子どもを迎えに来て、家で子どもの面倒を見てくれることも多くあります。

また、地域での助け合いが発達しているため、公園などでの養育・教育も盛んです。子どもたちは自分の祖父母の住む家やその近所などで、遊び、育っています。こうした、世代間交流・地域内交流も子どもの成長にプラスに働いています。

近所の公園に行くと、いろんな年代の子どもが遊んでいて、また、時々、ボランティアの大人や大学生が遊びに加わってくれます。ままごとをする子、鬼ごっこに興じる子、ヨーヨーやこま回しを近所のおじいちゃんに習っている子もいます。公園内の畑では、近所のおばあちゃんが野菜作りをしていて、子どもたちも一緒に手伝っているような風景も見られます。

このように、「福井六育」や家庭・地域での養育・教育により、福井の子どもたちは、発達に必要な経験を楽しみながら積むことができ、戸惑うことなく小学生に進むことができるようになっていきます。

< 7歳以降：就学後 >

現在、福井の子どもたちは、少子化により、学校での少人数教育や本物に触れる機会の増加など、以前に比べ充実した学校教育を受けられる環境にあります。しかし、子どもたちの数が減少している中で、子どもたち同士の交友から学ぶ機会は減っているといえます。

2030年には、現在の福井県の高い教育の質がさらに向上しています。子どもたちも、**自立して学ぶ姿勢**を身に付けています。学校もそれぞれの子どもに合った学習が選べる環境に変化しています。勉強を教える場であることに加え、子どもたちが勉強する素材を提供する場にもなり、少人数教育やICTを使った教育が充実しています。

また、希望をはぐくむ教育「希望の輪」の考え方が教育分野にも導入されることで、子どもたちは、幅広い事象に関心を持ち、自分の希望に対して努力し、可能性を広げるようになっていきます。さらに、周りの仲間の希望にも関心を持ち、「自分たちの希望」をはぐくむことも大事にしています。

子どもたちが自立して学ぼうとする姿は、大人たちにも伝わります。2030年の福井では、教育が広く地域社会に開かれたオープン・システムとなり、大人も子育てをしながら学ぶことができる「社会総ぐるみ」の人育ての環境になっています。誰もが先生であり、生徒であるといった共に学びあう関係が希望を共有し、子どもと大人のそれぞれを成長させる関係になっています。

子どもたちも地域の人と交流して学ぶことで、共感能力を高め、自分の成長のために周囲がサポートしてくれているという**感謝の気持ち**を持っています。他世代の福井人との交流は、年上・年下のそれぞれを思いやる心を育てることになります。こうした経験を通して、福井では地域の小さな子もサポートするつながりの好循環をつくり出していきます。

2 青年世代（30歳）

青年世代：2030年の年齢 17歳～31歳
 （1999年～2013年生）
 2009年現在の年齢：～10歳

（2030年に向けた変化）

個人の心の変化		社会の変化
仕事の質を高める心	→	生産性・創造性の高まり
ワークライフバランスを意識する心	→	職場から地域への回帰
人と交流する心	→	交流人口の増加

これまで、青年世代は、学校を卒業すると企業等で働き、仕事を通じて能力開発を行ってきました。今後、人口が減少する中、豊かな社会を維持し、さらに発展させるためには、一人ひとりの能力を最大限に発揮することが重要になってきます。

国境を越えて社会が融合していく中で、現在の青年世代よりもさらに外に向けての広い視野を持たなければなりません。そこで、グローバル市場での実務経験や大学院での専門分野の研修など、世界でも通用する能力を身に付けようとしています。

グローバル市場に目を向ける一方で、自分たちの生活する地域・ふるさとをよくしたいという意識（希望）も強くなってきます。グローバルとローカルを同時に大事にする「グローバルな心」が育ち、今以上に「都会」でなく「地方」で生活し、活躍したいという人が増えています。こうした「グローバルな心」は、社会貢献を基本として活動を行う社会的企業を通して生まれ、地域社会の問題をどう解決するかを考える人が多くなっています。

また、業種、職種にとらわれず、現在の自分の仕事に誇りを持ち、自ら挑戦し、生産性や創造性を高めるなど、**仕事の質**を重視するようになっていきます。青年時の徹底した職業人意識の向上は、福井発の人材養成プログラムとして世界からも注目されるようになります。

青年世代は、学生から社会人へ、また、単身から結婚へと、自分の生活環境が大きく変化し広がりが増す時期にさしかかります。限られた時間の中で、最適なワークスタイルを意識して、**ワークライフバランス**を積極的に取るようになり、社会全体がゆとりのある生活に変化するきっかけになります。

さらに、2030年の青年世代は、幼少の頃から、バーチャルゲームやインターネットが身近にある環境で育った世代です。このため、デジタル社会でのマナーを身に付け、仮想の世界は仮想の世界と認識しながらも、仮想の世界を生活の一部として楽しむことができます。現実の社会ではもちろん仮想の社会でも誠実な人柄により、信頼できる友人として福井人を中心とした**人の輪（ストロングタイズ&ウィークタイズ）**ができるようになっていきます。

3 壮年世代（45歳）

壮年世代：2030年の年齢 32歳～46歳

世代：新人類ジュニア（1984年～1998年生）

2009年現在の年齢：11歳～25歳

<青少年期の出来事と世代の特徴>

- ・日本の高度成長やバブル経済を知らず、安定した経済成長の中で成長。普通の先進国となった日本しか知らない
- ・ゆとり教育を受け、男女混合名簿で育ち、協調性が高い
- ・パソコン、携帯電話が普及し、コミュニケーションの主な手段は携帯電話、メールとなる
- ・新興大国（BRICs）の台頭など、世界的な競争が激化する中で、世界における日本のプレゼンスが低下
- ・子どもの頃から環境問題を学び、地球温暖化やエネルギー問題などの地球レベルの課題を理解し行動している

（2030年に向けた変化）

個人の心の変化		社会の変化
生活を楽しむ心	→	みんなでの支え合い
分け合う心	→	豊かさの共有
統合・調和する心	→	現在と未来のバランス

現在の壮年世代の日常生活は、労働が主となった生活になっています。しかし、家庭生活や地域活動など、この世代の福井人が周囲から期待される分野は、労働以外にも多様です。さらに余暇活動や教養の再蓄積など、自らが求める分野も多方面に渡っています。

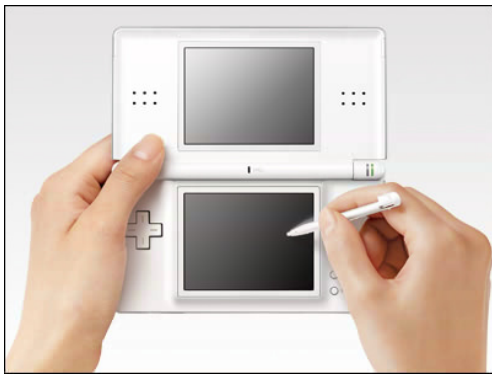
2030年の社会は、ともに分かち合う社会です。特に、子育てや介護などを他の世代とともに支え合うことで、この世代が**生活を楽しむ**ことができるようになります。

また、この世代の福井人は、自己所有・自己消費を楽しむという考え方から、社会企業家として、社会貢献しながらビジネスを行うなど、自分の能力や関心も「分け合う」という考え方を持つようになります。カーシェアリングなどの物の分け合い、仕事の分担などの時間の分け合い、二地域居住などの居住地の分け合い、祖父母や地域での子育ての協力などの精神的な分け合いなど、この世代が直面する課題をみんなで分け合うことで、問題を抱え込まず余裕のある生活の豊かさを共有することが可能になっています。

さらに、希望を少しずつ実現していくとともに、他の世代と希望を分け合い、新しい希望を見出していくという役割も期待されます。

この世代の福井人には、「統合・調和」する役割が期待されます。子ども世代・青年世代と熟年世代・達年世代間の橋渡し役や、仕事の面でも、専門分野を結合して、総合的に物事を判断できる能力を身に付け、新たなものを創造する役割を果たします。世代の中間に位置することで、現在と未来の課題について、バランスを持って判断する能力が求められる世代でもあり、福井人はそうした社会のニーズに応えようと努力します。

また、男女混合名簿で育ち、男女の差を全く意識しない世代です。また、子どもの頃からインターネットや携帯電話を使い、バーチャルな世界をもう一つの空間として使いこなす世代です。



ニンテンドーDS（2004年）



【ICT】携帯電話（2008年）



【地球環境問題】クヌギやコナラなどの苗を植樹する子どもたち（2008年）

4 熟年世代（60歳）

熟年世代：2030年の年齢 47歳～61歳
 世代：団塊ジュニア（1969年～1983年生）
 2009年現在の年齢：26歳～40歳

<青少年期の出来事と世代の特徴>

- ・バブル経済の崩壊により、青年期に就職氷河期を経験しロスジェネレーションと呼ばれる（フリーターやニートの増加）
- ・ベルリンの壁崩壊、ソビエト連邦崩壊後、金融、物流、経済面でのグローバル化が進み、国際的な相互依存関係を実生活でも実感
- ・ナホトカ号重油流出事故や福井豪雨が起こり、安全を強く意識するとともに、ボランティアなどの社会貢献の意識も高い
- ・小学生で自室とテレビを持つようになり、家庭内のシングル化が進行
- ・子どもの頃から、テレビゲーム、パソコンが普及し、多様なメディアにも対応
- ・男女雇用機会均等法施行後に就職し、男女平等に対する意識が進展
- ・親子とも戦争を知らない世代

（2030年に向けた変化）

個人の心の変化		社会の変化
成熟した心	→	能力の社会への還元
進化・挑戦する心	→	年齢を問わないチャレンジ
支援・サポートする心	→	世代間のセーフティネット

現在、一般的な企業では65歳まで働きます。定年後の人生はセカンドライフともいわれ、それまでに培われた知識や経験を活かして、新たな分野で活躍することが期待されます。しかし、個人や社会からも知識や経験の活用ニーズは高いものの、実際の参加については難しい面もあります。

しかし、2030年には、熟年世代の福井人の成熟した心と豊富な知識・技能は、長年の経験と実績に裏付けされた確かなものとして、今まで以上に社会から必要とされています。「右肩上がりの成長」から「成熟」へと社会の趨勢が変わっていく中で、真の豊かさを見極め、自らの能力を社会に還元しようとする**成熟**した心が大事になります。

また、これまでの経験が社会でどのように活かすことができるかを考えたり、技術をさらに磨くなど、自分を時代に合わせて**進化**させています。さらに、時代に合わせるだけでなく、新たな分野に**挑戦**するなど、経験に基づくパイオニアとしての行動を起こしています。

さらに、この世代の福井人は、若い世代を育てる役割を担うとともに、自らも他の世代から新たな刺激を受け、他の世代の考え方や文化を積極的に取り入れます。この世代が社会のアドバイザーとして他の世代の福井人を**支援・サポート**しています。



福井豪雨でのボランティア活動（2005年）



パソコンの画面を見ながら自分の能力に応じた学習を進める生徒（武生東高校）（1989年）



【国際交流】今立町（現越前市）のパピルス館で紙すきを体験し出来具合を見せ合う生徒たち（1990年）



【就職氷河期】厳しい就職環境（2003年）



ファミリーコンピュータ（1983年）

5 達年・老年世代（75歳）

達年世代：2030年の年齢 62～76歳

世代：新人類（1954年～68年生）

2009年現在の年齢：41～55歳

<青少年期の出来事と世代の特徴>

- ・小学生時代から自宅にテレビ、マイカーがある世代で、特にテレビとともに育った最初の世代
- ・高度経済成長を経て経済大国日本となる中で成長し、仕事と余暇の両立志向が強い
- ・進学率が高まり高校・大学を受験する者が増加し、受験戦争を体験（高校進学率92%、大学・短大進学率38%）
- ・ロック音楽や漫画、アニメ等のサブカルチャーを生み出し、新たな価値観を創造
- ・男女雇用機会均等法が施行され、男女平等の意識が社会的に浸透



充実する高校教育（1976年）



ウォータージェット織機の導入を中心に近代化された織物工場（1984年）



あすを担う子どもたち（プレハブ教室で授業も）
（1976年）



初代ウォークマン（1979年）

老年世代：2030年の年齢 77～86歳（以上）

世代：団塊世代（1944年（以前）～53年生）

2009年現在の年齢：56歳～65歳（以上）

<青少年期の出来事と世代の特徴>

- ・ 傷痍（しょうい）軍人や尋ね人のラジオ放送など、戦争後の姿を見て成長
- ・ 旧正月など、戦前の風習も体験
- ・ 経済成長過程で育ち、高度経済成長後期の担い手であり、右肩上がりの社会を体験
- ・ 四日市ぜんそく、イタイイタイ病などの公害が発生し、経済の発展と環境災害の両方を体験
- ・ 安保闘争、全共闘など、学生運動が活発化
- ・ 受験競争が激化していく中で育つ
- ・ 男性が仕事に専念し、女性は家事・育児専門の専業主婦となることで、日本経済と家庭を支える
- ・ 家電製品が普及し、女性の家事負担が減少

<団塊の世代>



交通量の増加に対処して、今年は12基の交通信号機が設置される（1966年）



小売り業者は、品物を買ってもらうために、懸命に努力をばらう（1966年）

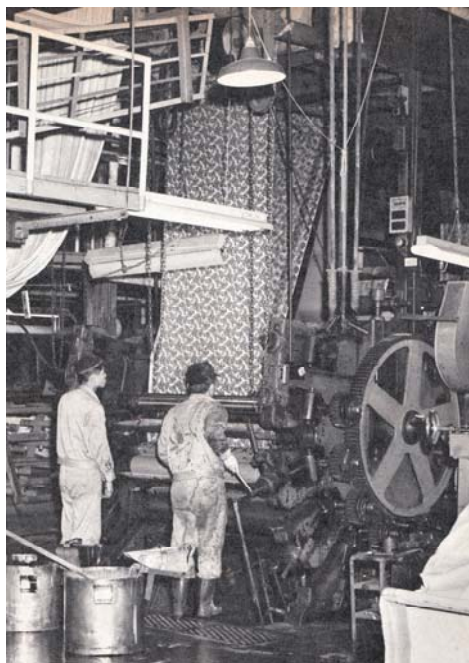


副業として盛んなワラ加工（1976年）

カラーテレビ（1960年）



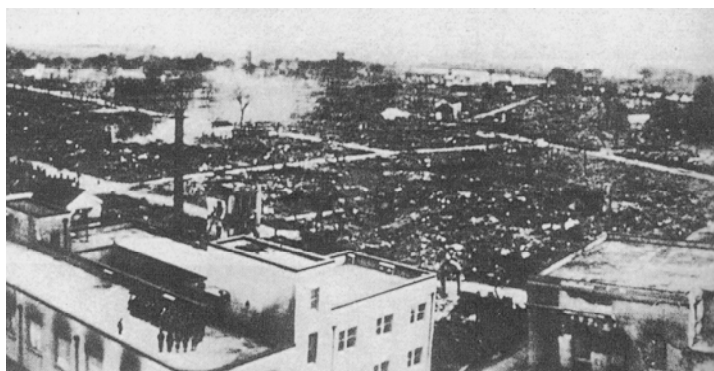
<戦前世代>



素晴らしい模様が熟練工の手によって鮮やかに捺染（なつせん）される（1961年）



青年の交際はあくまで健全に（1960年）



福井空襲（1945年）

(2030年に向けた変化)

個人の心の変化		社会の変化
活動する心	→	地域社会の安定
見守り・見守られる心	→	相互扶助
伝える心	→	社会の再生産と継承

2030年の75歳前後の人は達年世代、老年世代と呼ばれ、福井の健康長寿の秘訣を継承しながら、介護・医療の総合的な予防・ケアシステム、最新の治療技術・テクノロジーを取り入れ、心身ともに健康長寿を享受するようになっています。

本人や周囲の介護等にかかる負担も大幅に軽減されるため、個人の選択に基づき自由に生活を楽しめる社会となっています。そこで、さらに心身ともに元気な達年・老年の福井人は、地域社会のキーパーソンとなり、地域社会の安定をもたらし、住民の多くが望む安全・安心な居心地の良い地域づくりに貢献しています。「健康でありたい」という状態から、「健康で活動したい」という能動的な気持ちに変化しているためです。

また、周囲を見守る一方で、誰かに見守られているという相互扶助の精神を培い、安心感を与える存在として、他世代にとってなくてはならない存在となっています。

さらに、自分や自分たちの希望を社会の中である程度実現し、そこから得られた知見を次世代に伝え、希望を次世代につなぐ役割を果たします。これまでの知識・技能を完成させ、次の世代に伝えたいと望むことから、先人から引き継いだ豊かな福井を再生産し、次の世代に未来を引き継ぐことができます。

< 世代の主な出来事 >

■時代と世代の関係図

年代	世相等				
	社会・経済	教育	男女共同	福井県	その他
2008年の年齢人口・割合					
世代の特徴					
1930年 (昭和5年)	世界恐慌('29) 国連脱退('33) 日中戦争('37~'45) 国家総動員法('38) 第二次世界大戦('39~'45)	国民学校令('41) 学徒出陣('43) 軍事教育全面強化('44)		人絹取引所開設('32)	
1945年 (昭和20年)	終戦('45)、日本国憲法公布('46) 国土総合開発法('50) 朝鮮戦争('50) テレビ放送開始('53) もはや戦後ではない('56)	教育意基本法・学校教育法各公布('47) 六・三・三・四制('47) 学習指導要領に「道徳」('58) 高校進学率52%('55) 大学・短大進学率10%('55)	大学の男女共学制決定('45) 初の女性週刊誌創刊('57)	福井地震('48) コシヒカリ誕生('56)	改正民法公布(家制度廃止)('47) 国連加盟(復帰)('56)
1960年 (昭和35年)	高度成長期('55~'73) 新日米安保('60) 東海道新幹線開通('64) 人口1億人突破('66) 高齢化社会('70)	金の卵 安保闘争('60) 家出少年の増加('66) 全共闘運動・大学闘争('69) 受験戦争	初の女性大臣('60) 核家族の進展('67)	北陸トンネル開通('62) 敦賀原電臨界('69) 集団就職受入 県内私鉄路線廃止 合繊織物最盛	農村の過疎化 家事の省力化(炊飯器、洗濯機) 日本原電・東海原発稼動('66) ビートルズ来日公演('66)
1975年 (昭和50年)	安定成長期('73~'91) バブル景気('86~'91) 日中平和友好条約('78) 国鉄民営化('87) 消費税導入('89)	高校進学率92%('75) 大学・短大進学率38%('75) 落ちこぼれ問題('77) 家庭内暴力・校内暴力・いじめ	婦人白書('78) 男女雇用機会均等法('85) セクシャルハラスメント('89)	繊維不況 工場の海外移転 福井港開港('78) 北陸自動車道県内全線開通('80) 人口が80万人を突破('82)	日本の平均寿命世界一('84) 海外純資産1298億ドルで世界首位('85) ファミコン累積生産台数1000万に('87)
1990年 (平成2年)	失われた10年('91~'02) 高齢社会('90)、介護保険法('00) 少子化('92) IT革命('00) 構造改革	男女混合名簿 学校週5日制導入('93) 総合学科の新設('94) ゆとり教育('02) 不登校・引きこもり	育児休業法('91) 家庭科の男女必修('93) DV法('01) 次世代育成支援対策推進法('03)	県立大学開学('92) ナボトカ号重油流出事故('97) NPO条例('98) 福井豪雨('04) 平成の大合併('04~'06)	就職氷河期('92~'04) アジア向け貿易額559億ドルでアメリカ向けを抜く('93) Windows95('95) 京都議定書('97) パラサイトシングル('97)
2005年 (平成17年)	人口減少('05) 団塊の世代大量退職('07) 石油価格高騰('07)	未履修問題('06) モンスターペアレント('07) 大学全入時代 義務教育期間が11~12年('09) 新学習指導要領('11)	熟年離婚('05) ワーク・ライフ・バランス 女性委員33%('10) 男性の育児休業取得率10%('14)	ふるさと納税('08)	京都議定書発行('05) 年金問題('07) 洞爺湖サミット('08) Web2.0
2020年 (平成32年)					
2030年 (平成42年)					
2030年の年齢 および人口(5歳階級推 計)・割合					

世代区分の名称							年代
戦前 ～1929年	戦後 1929年～1943年 (15年間)	団塊 1944年～1953年 (10年間)	新人類 1954年～1968年 (15年間)	団塊ジュニア 1969年～1983年 (15年間)	新人類ジュニア 1984年～1998年 (15年間)	(21世紀生れ) 1999年～2013年	
81歳以上 53,327 6.6%	66歳～80歳 132,961 16.4%	56歳～65歳 118,295 14.6%	41歳～55歳 150,981 18.6%	26歳～40歳 150,356 18.5%	11歳～25歳 121,376 14.9%	～10歳 83,230 10.2%	2009年の年齢 人口・割合
・戦前の教育で育ち、戦争や食料不足を体験 ・夫唱婦隨の考え方が強い	・子どもの頃に戦前と戦後を体験 ・高度経済成長を支えた世代 ・激しい労働争議を体験	・子どもの頃に高度経済成長を経験 ・激しい受験戦争を経験 ・全共闘や大学闘争を経験	・経済大国となった日本で成長 ・仕事よりも余暇を優先 ・ロック音楽や漫画、アニメ等のサブカルチャーを体験 ・核家族の拡大	・小学生で自室を持ち部屋にテレビがあるなど家庭がシングル化 ・就職氷河期を経験 ・子どもの頃からパソコン、インターネット、家庭用ゲーム機を使用	・バブル崩壊後の失われた15年に成長 ・携帯電話、メールでコミュニケーションを図る ・社交性を重視 ・ゆとり教育世代 ・男女混合名簿を使用		世代の特徴
	少年期 (5歳)						1930年 (昭和5年)
	青年期 (20歳)	少年期 (5歳)					1945年 (昭和20年)
	壮年期 (35歳)	青年期 (20歳)	少年期 (5歳)				1960年 (昭和35年)
	熟年期 (50歳)	壮年期 (35歳)	青年期 (20歳)	少年期 (5歳)			1975年 (昭和50年)
	達年期 (65歳)	熟年期 (50歳)	壮年期 (35歳)	青年期 (20歳)	少年期 (5歳)		1990年 (平成2年)
	老年期 (80歳)	達年期 (65歳)	熟年期 (50歳)	壮年期 (35歳)	青年期 (20歳)	少年期 (5歳)	2005年 (平成17年)
		老年期 (80歳)	達年期 (65歳)	熟年期 (50歳)	壮年期 (35歳)	青年期 (20歳)	2020年 (平成32年)
			老年期 (75歳)	達年期 (60歳)	熟年期 (45歳)	壮年期 (30歳)	2030年 (平成42年)
	87歳～101歳 42,800 6.1%	77歳～86歳 83,200 11.8%	62歳～76歳 133,600 18.9%	47歳～61歳 144,600 20.5%	32歳～46歳 117,600 16.6%	17歳～31歳 95,000 13.4%	2030年の年齢 および人口(5歳階級推 計)・割合

第2章 2030年のふくい物語

蟹田家の物語

これは2030年の子ども世代、壮年世代、達年世代の物語です。

蟹田（かにだ）家は、福井の近郊で三世代同居で暮らしています。学校に通う子どもたちは家族や地域の人たちに見守られ元気に育ち、父母は仕事と家庭を両立させ、祖父母は地域社会の担い手として活動しています。

（登場人物）

蟹田 実（みのる）

2025年生まれ／5歳 子ども園年長
好奇心旺盛な元気いっばいの男の子

蟹田 亜希（あき）

2021年生まれ／9歳 3年生
友達と遊ぶのが大好きな女の子

蟹田 望（のぞむ）

2016年生まれ／14歳 8年生
海外で活躍するエンジニアを夢見る男の子

蟹田 沙織（さおり）

1987年生まれ／43歳 実たちの母親
介護老人保健施設で理学療法士として勤務

蟹田 直樹（なおき）

1985年生まれ／45歳 実たちの父親
繊維会社をおじいちゃん（誠）から受け継ぎ経営

蟹田 恵子（けいこ）

1957年生まれ／73歳 実たちの祖母
韓国のドラマに夢中になってから、韓国語を学び、韓国語講師も務める

蟹田 誠（まこと）

1955年生まれ／75歳 実たちの祖父
コミュニティ交通の運営に参加し、コミュニティバスの運転手としても活躍

※蟹田は、福井県の魚の「越前がに」から名付けました。また、名前は、それぞれの生まれた年別のランキングの上位の名前等に基づき、「ふくい2030年の姿」検討会において作成していますので、実物の人物・団体等とは一切関係ありません。

2-1 子どもの生活（子ども世代：0～16歳）

第1話 人に囲まれた子どもたち（地域での人づくり）

○学校・地域・家庭の「社会総ぐるみ」による教育

- ・地域の達年世代による「学習サポート」や「見守り活動」が展開
- ・近所の子どもたちが集う「コミュニティホーム」とその管理者「コミホマスター」を指定し、放課後や休日のこどもの活動の場を確保
- ・家庭での教育を充実するため、家族に対する「家庭教育推進プログラム」を実施

◆ 亜希（9歳）は、学校から帰るとすぐに、子どもたちに勉強を教えている地域のおばさんの家に向かいます。このおばさんは元教師で、家は近所の子どもたちが集う「コミュニティホーム（コミホ）」に指定されており、おばさんは「コミホマスター」です。コミホには近所のお兄ちゃん、お姉ちゃんも集ってきて、自分のパソコンを使って通信宿題です。通信環境が発達していて、亜希も幼い頃から、パソコンを使って遊んでいたもので、手慣れたものです。自分のペースで宿題をしています。どうしてもわからない算数の問題やもっと教えてほしい理科の問題などは、おばさんやお兄ちゃんたちが教えてくれるので、わかることが楽しくなってきました。最近では、いろんなことに「なんで？」「どうして？」と疑問がわき、おばさんをよろこばせています。

また、おばさんは、福井の偉人の話をしてくれて、その人がやったことやどんな苦労があったかを話してくれます。亜希は、小さいながらも「福井の先人はすごいんだなあ」と思っています。

宿題が終わると、コミホのみんなで、公園でかくれんぼです。学校のクラスとは違って、年上のお兄ちゃんやお姉ちゃんと遊ぶので、人との付き合い方も自然に身に付いています。公園では、地域の達年の人たちが、地域の緑を増やそうと公園にビオトープなどを作る活動をしているので、大人に見守られながら、安心して遊んでいます。

家に帰ると、ママ（沙織：43歳）がパパ（直樹：45歳）に「家庭教育推進プログラム」を教えていました。勉強熱心なママは、パパと今週の日曜日に実施される父親のためのプログラム試験の予習をしています。

直樹は、試験よりも座談会の方が楽しみです。エコ活動や交通マナーなど家での決まりごとや子どもの成長などについて、父親同士が気軽に意見交換できるからです。子どもは親の背中を見て育つと昔からいわれていますが、元気なおじい

ちゃん、おばあちゃんが増えたので、孫育てのおじいちゃん、おばあちゃんの背中を合わせて4つの背中を見て子どもは育つのかなと思うようになっています。

○「希望の輪」による希望の広がり

- ・私の希望が私たちの希望に広がる「希望の輪」を導入
(希望学によると14才の時に希望を持つ子は将来も希望を持つ割合が高い)
- ・子どもたち自身がヒーロー、ヒロインになる目標を持つ教育を実施

◆ 亜希は、1年生の時に、クラスでひとりだけなわとびを上手に跳ぶことができませんでした。その時、学校や家で一生懸命練習しても、なかなか上達することができなかったのですが、友達の結衣ちゃんが一緒に練習してくれて、少しずつ上手に跳べるようになりました。亜希が「ありがとう」というと、結衣ちゃんは「亜希ちゃんが一生懸命頑張っていたので、私も亜希ちゃんがなわとびを跳べるようになってほしいと思ったの。」とっていました。今、亜希は、なわとびが大好きです。跳べない子がいると、結衣ちゃんのように練習の手助けをするようになっています。亜希は、他の子の「なわとびが跳びたい」という想いを感じて、それを手伝ってあげたいと思うようにもなりました。

一方、望(14歳)は、最近、将来の夢を実現するためにはどうしたらいいかを考えるようになりました。5年生の時に、インターネットテレビで世界の水資源が枯渇していて、海水を淡水にする技術とそこで活躍する福井のエンジニアの姿を見て以来、ずっと海外で活躍することに憧れを抱いています。学校では、世界中で活躍している福井出身の人のことも教えてくれます。そして、その人たちから直接話を聞く機会も増え、望にとっては、その人が身近なヒーローといったところです。学校では、子ども一人ひとりが目標となる身近なヒーローやヒロインを持って、また、それに近づき、自分自身がヒーローやヒロインになるように教えています。今では、望は理科系の大学に進学してエンジニアになり、水資源が不足している世界の各地域で、自分の力を活かしたいと具体的な夢のイメージがふくらんできました。

○地域の達人による課外活動

- ・学校単位の部活動は地域のスポーツクラブ活動へ移行
- ・子どもは、複数のサークル(部活)に在籍

- ◆ 望は、学校の授業が終わると、そのまま近くのスポーツセンターに向かいます。小さい頃から、仙水翔太（21歳：P143参照）たちが教えるスポーツクラブでテニスを習っています。学校での部活動がなくなったため、先生の負担も減りました。スポーツの上手な先生は、スポーツクラブの指導者として翔太たちと一緒に教えています。

翔太たちも、子どもたちに教える技術を高めるために、交流会を開いたり、NPO等のインストラクターの認定も受けています。

一緒にテニスを習っているのは、隣の中学校の友達です。最近では、学校対抗で試合をすることは珍しく、スポーツクラブ対抗が主流になっています。自分がしたいスポーツのクラブには、自由に入会でき、望も一時期剣道を習ったことがありました。

来月は、いよいよクラブ対抗戦です。対戦相手は、年上の中国からの留学生ですが、胸を借りるつもりで、思いきってプレーしようと思っています。

望は、テニス以外にもバンドサークルに入っています。おじいちゃんが若い頃にロックバンドをしていた話を聞きながら、いつか、おじいちゃんとセッションができればいいなと思っています。

○コミュニティ交通の発達

- ・地域の達年が社会的企業（ソーシャル・エンタープライズ）を設立し、地域の足を確保
- ・コミュニティバス専用の運転免許を創設
- ・移動直売やリラクゼーション設備などバスが多機能化

- ◆ 望と亜希は、毎朝、地域の達年が運営している地域のコミュニティバスに乗って通学します。バス停までは10分程度歩きますが、通勤・通学時間帯は、電気バスが切れ目なく地域内を循環しているので、停留所に着くとすぐにバスがやってきます。望や亜希だけでなく、父親の直樹も通勤に利用し、3つ先の停留所で次のコミュニティバスに乗り換える予定です。

今日のバスの運転手は、望たちのおじいちゃん（誠：75歳）です。社会的企業が運営主体になり人件費が大幅に削減されるとともに、電気バスのエネルギーには家庭での太陽光発電の余剰電力などを利用することにより、燃料費も大幅に削減され、低料金のコミュニティバス複数台を地域内で循環させることが可能となっています。

○学校の空き教室を活用した「福縁サロン」

- ・小中学校を活用して、子どもや高齢者が集う「福縁サロン」を設置
- ・「福縁サロン」には地域の暮らし相談室を設置
- ・地域の達年、老年世代が、子どもと関わり、地域全体での多世代が共生する「三世代地域」を実現

- ◆ 亜希は、宿題のない日は学校に残ってそのまま遊びます。毎日、老年世代、達年世代の人が小学校に遊びに来ているので、放課後や休み時間にも、地域のおじいちゃん、おばあちゃんと遊びます。

今日は、おばあちゃんが本の読み聞かせをしてくれる日です。男の子は車の本がいいみたいですが、今日の本は、前からお願いしていた「赤毛のアン」の日です。

小学校が地域に開放されているので、高齢者が空き教室を「福縁サロン」として活用しています。そこでは、達年世代がルービックキューブやヨーヨーなど、懐かしいおもちゃの遊び方を教えてくれます。

今日は、来月から転校してくる子が親子で来ているようです。サロンは、転入者の窓口にもなっていて、達年世代の人が「地域の暮らしで困ったことがあったら、このサロンに相談してください。」と説明しています。この家族は、三世代同居世帯ではないようですが、このサロンで遊んでいるうちに、地域のおじいちゃん、おばあちゃんが転校してくる子の祖父母のようになっています。

○保護者が安心できる小児医療提供体制の整備・運用

- ・家族の健康状態を家庭で毎日管理し、異常があればかかりつけ医に健康データが自動的に送信され対応を相談できるなど安心の地域医療体制を整備
- ・子どもの病気や怪我の際に必ず受け入れてくれる救急医療体制を整備
- ・子どもの病気、病後のときなどに預けられる施設が充実

- ◆ 実(5歳)は毎日、家に備わっている体調チェック機で、体温やおなかの調子、この前転んでできたすり傷などをチェックしています。お母さんが、「今日も大丈夫ね。」と言って、学校へ送り出しています。

実の健康状態は、かかりつけの小児科医に送信されて、異常があれば医師から連絡があるので、両親も安心してしています。さらに、子どもの顔色が悪いとか、元気がないなど思っても、医療機関とディスプレイ会話で子どもの表情を見ながら相談ができます。

実が風邪を引いたときでも、医療機関で1日様子を見てくれるので、安心して仕事に行くことができます。

第2話 本物志向の体験（実体験機会の増加）

○夏休み・冬休みに「体験型学習カリキュラム」を実施

・企業、NPOの協力で「体験型学習カリキュラム」を実施

- ◆ 亜希は、次の夏休みに農村での宿泊体験を楽しみにしています。これも授業の一環ですが、引率してくれるのは、いつもの先生ではなくて、会社の人やNPOの達年の人たちです。

普段、共同農園（シュレバーガルテン）で野菜づくりを体験しているので、今回の宿泊では、牛の世話をしてみたいと思っています。朝のしぼりたての牛乳は最高に美味しいと聞いているからです。最近では、牛乳パックにICチップが付いていて、その牛乳の作られる過程を見ることができますが、やっぱり自分で体験してみたいと思っています。

今回、引率してくれる人は、いつもは食品を加工している会社で働いている人です。特に、食べ物を扱う会社では、子どもたちに自然や食べ物大切さを知ってもらって、この環境を守ってほしいとの考え方が浸透しています。

宿泊体験には、全国から子どもたちが集ってくるので、友達がたくさんできるといいなと思っています。望お兄ちゃんも、この宿泊体験で九州の友達ができて、いまでもテニス大会の結果や音楽の話ディスプレイ会話でしています。

○学校での地産地消給食、自宅での食育

・地域の共同農園からの農作物の提供などにより地産地消100%のおいしい給食を実現

・食育を学んで育った親世代が中心となって、家庭や地域での食育を推進

- ◆ 亜希の給食は、100%地産地消の食材で作られています。毎朝、地域の共同農園（シュレバーガルテン）でとれた農作物が達年の人たちによって、学校に持ち込まれます。野菜の色や形はそろっていませんが、地域の達年の人たちが心を込めて作っているので、先生たちも安心して子どもたちに出しています。子どもたちも、野菜のとれたたてのおいしさやにおいがわかるようになって、上級生のお

ねえちゃんの中には、すでに「野菜ソムリエ」に認定されている子もいるほどです。

学校には畑が併設されていて、植えから収穫までを体験します。農作物の成長から、農作物の栄養までも勉強できて、食べ物を通して、学ぶ範囲が広がっています。

今日は、地域の達年の人たちが献立を考える日です。地域の伝承料理や家庭のオリジナル料理が出されるので、とっても楽しみです。家に帰って、お母さんに給食のことを話すと、「ママも料理の勉強をしなくてはね。」と、はりきります。母親の沙織も、食育はおばあちゃんや子どもからも教えてもらう一生の勉強だなと思っています。

週末には、家族そろって、近くの共同農園で過ごします。おじいちゃんの作る野菜は最高においしいです。ただ、あおむしに食べられてキャベツの葉には穴がたくさんあいています。お父さんは『自然でとれたあなまきロールキャベツ』を得意料理にしています。

第3話 学び

○子どもの頃からコミュニケーションスキルを伸ばすため、体系的な「幼児教育カリキュラム」が開発され・実施

- ・幼稚園、保育園を統合し地域に開放された子ども園を実現
- ・子どもの減少に対応し、コミュニケーションスキルを重視したカリキュラムを実践

◆ 実は、子ども園に通っています。子どもの数が減少し、保育園、幼稚園の統廃合が進みましたが、コミュニティバスや「愛の相乗り」などを利用し地域が連携して送迎することにより安全な通園が可能となっています。

子ども園では、年下の子どもたちと一緒に遊びます。みんなでお散歩に出かけたり、お遊戯の練習をしたり、年上の子どもも年下の子どもと一緒に兄弟姉妹のように遊んでいます。最近では、蟹田家のように兄弟姉妹がいる子どもも多くなりましたが、やはり1人っ子も多いです。

午後からは、地域のおじいちゃんやおばあちゃんが子ども園にやってきます。今日は、おじいちゃんが、20年前前のオリンピックの水泳で金メダルをとった人のことについて話をしてくれる予定です。実は、スイミングスクールに通っているので、ぼくもがんばろうと思っています。

○電子教科書が普及し、家庭でも電子教材による学習が可能

- ・電子教科書により子どもの理解のレベルに合わせた複数の教え方が可能
- ・パソコンの普及で漢字を書くのが苦手な人が増加したため、子どもたちには、手を動かして、体で覚える学習を重視

◆ 望は、学校に本を一冊持っていくだけです。本は、電子教科書になっていて、全ての教科書が内蔵されています。電子教科書には、参考図書も多く付いているので、自習時間には、世界の観光地や建造物の写真を眺めています。将来、エンジニアになりたい望は、電子教科書で最先端の研究所やロボット工場の動画の紹介を眺めては夢を膨らませています。授業中も参考図書に夢中になってしまうので、よく先生から注意されます。

また、電子教科書では、同じページでもいくつもの解き方が載っていて、わからない方程式も自分に合ったやり方で教えてくれるため、スムーズに理解できます。ここまでの勉強で全くわからないところはないので、勉強もスイスイです。

家では通信宿題です。妹の亜希は、近所の家でみんな一緒に勉強ですが、望はテニス帰りのコミュニティバスの中で、英語のヒアリングを済ませてしまいました。家では、世界の環境や世界の地理を勉強します。

もちろん、電子教材だけでなく、白川文字学と組み合わせさせた漢字の書き方の反復練習、算数の筆算などの紙に書く宿題もあるので、手で覚えることも大切だと思っています。さらに、理科の実験や美術などは、実際に体験することが大切なので、ひらめきや発見を重視する授業になっています。

2-2 父親・母親の生活（壮年世代：32歳～46歳）

第1話 循環型シェアリング文化の広がり

○ホームシェアリング、カーシェアリングの広がり

- ・ 家族構成の変化に伴い、簡単に増減築やリフォームできる住宅が実現
- ・ ご近所とのカーシェアリングやホームシェアリングが普及

◆ 「おはよう！」4年前に増築した子ども部屋から望がリビングへ入ってきました。父親の直樹（45歳）は、そろそろ亜希（9歳）にも個室が必要かなと思っています。望が生まれたとき優遇税制を活用して建てた二世帯住宅は、増減築が容易にできる造りになっています。ご近所では、子どもたちの独立により空いたスペースをリフォームして大学を出て東京にいる友人家族に貸すホームシェアリングをしている家もあります。

「行ってきます。」直樹は、朝食を終えると、子どもの望（14歳）と亜希と一緒に家を出ます。直樹は、父親の誠（75歳）が経営していた繊維会社を受け継ぎ、不況で苦しかった2009年の「グリーン・ニューディール」をきっかけに、それまで培ってきた技術を活かした環境ビジネスを始め、業績をのぼしてきました。

「今日は職業体験の授業でメガネ工場へ行くんだよ。」望の学校での様子を聞きながら歩いてバス停に着くと、すぐにコミュニティバスがやってきました。

母親の沙織（43歳）は、3人を見送った後、理学療法士として勤務する介護老人保健施設へ出勤です。今日は、実（5歳）とご近所の礼子ちゃんを子ども園に送るため、ご近所でシェアリングしているシェアカーを使います。カーシェアリングをしている家族が交代で子どもの送迎を担当しています。

○公共交通や自転車の利用率が増加

- ・ 道路空間の再配分によりスロードライブ車線や自転車専用車線を整備
- ・ 電気自動車や小型の低速型車両（ゴールデンビークル）が普及
- ・ サイクル&ライドが普及

- ◆ バスの車窓から外を眺めていると、直樹は自分がマイカー通勤をしていた15年前を思い出すことがあります。「パパ。何を考えているの？」亜希が聞いてきました。「パパが会社に入ったばかりの頃は、毎日渋滞していたんだよ。スロードライブ車線もなかったなあ。あれ、あそこに走っているのは懐かしいガソリン車じゃないか。そう言えば、福井は自動車保有率日本一だったんだよ。」

ふと見ると、直樹の会社で働く大森さんが、バスのすぐ近くを自転車で走って行くのが見えました。「そういえば、大森君、最近運動不足で体が重いつて言ってたなあ。」どうやら運動不足を解消するため、自宅から最寄駅への移動もマイカーから自転車に代えたようです。朝の日差しの中を気持ちよさそうに走る大森さんを見て、直樹は子どもたちに「今度の日曜日、三方五湖をサイクリングするか。」と話しかけました。

第2話 テレワークなどの活用でワークライフバランスが実現

○テレワークやオフィスシェアリングの広がり

- ・ ICT技術の発展によるテレワークの実現
- ・ オフィスシェアリングにより収益性の低い社会的起業が容易になる
- ・ 自動翻訳機により、世界を相手にした仕事が増加

- ◆ 自転車通勤を始めた大森さんは、週3日会社で勤務し、残り2日は在宅勤務しています。会社に勤め始めた頃は、夜遅くまで残業することがありましたが、今は、自宅にいながらディスプレイで会議や取引先との商談などができるため、夕食は家族と一緒に食べるように帰宅しています。過労死が社会問題として話題になることもなくなりました。

また、自宅でできる仕事の範囲が広がったことで、大きな事務所を構える必要がなくなり、特に若い経営者たちの間では「オフィスシェアリング」が広がっています。最近、工場栽培の野菜を流通・販売する会社を立ち上げた大森さんの同級生も、同じように独立した若い起業家と事務所を共同使用するようです。

一方、沙織は、子ども園に寄ったため、いつもより30分遅く介護老人保健施設に着きました。高齢者の介護は、運動機能補助機器（ロボットスーツ）の普及で楽になりましたが、患者さんが機器を使いこなすには訓練が必要です。その訓練に理学療法士は大きな役割を担っています。そのため、仕事は相変わらず大忙しですが、数年前から、勤務時間が自由に選択できるようになり、子育てに当てる時間を十分確保できるようになりました。

沙織は現場のリーダーなので、介護の最新情報を入手するのも重要な仕事です。今朝のニュースで新たなロボットスーツが中国で開発されたといっていたので、空き時間に、早速、インターネットで開発したメーカーのサイトを検索しました。今は、自動翻訳機により、言葉の壁はありません。すぐに気になる点をメールで質問です。

第3話 みんなで楽しむ子育て

○地域のみんなで楽しく子育て

- ・家事、育児の男女共同が充実
- ・家庭で福井の伝承料理を継承

◆ 午後3時。直樹は、下校の見守りをするため、一足早く退社します。以前は、地域の老年、達年世代が主だった活動も、フレックスタイム制の導入が進んだことにより壮年世代も増えてきました。地域を巡回したり、子どもと話をしたりすることで、地域への愛着も一段と深まっています。最近では、以前の見守りの意味も、子どもを不審者から守るという意味合いから、子どもの成長を見守るという意味に変わっています。

「ただいま。パパは見守りなのね。」沙織が帰宅しました。いつも、帰りの早い方が夕食の準備をします。食材は、週末に1週間分まとめて注文し、毎日、人数分の新鮮な食材が届くようになっているので、とっても便利です。

おいしそうなおいに誘われて、子どもたちも台所に集まってきました。パパも戻ってきたようです。「亜希ちゃん。おじいちゃんたちを呼んできて。ごはんにしましょう。」

「いただきます。」今日の料理の中には、おばあちゃんの恵子（73歳）から教えてもらった福井の伝承料理「里いもの煮っころがし」もあります。「上手に煮えてるわね。美味しいわ。」のおばあちゃんの恵子の言葉に、沙織はとてうれしくなりました。

○祖父母世代の子育て支援と夢育

- ・元気な祖父母の子育て支援が継続
- ・人材育成のための学習機会が充実し福井独自の夢育が実現

◆ 夕食の後片付けは家事ロボットにまかせ、沙織は、小学校の空き教室で開催されている大学のサテライト講座に出かけました。最新のリハビリテーションと、仕事を通じて興味をもった美術について学ぶため、1年ほど前からこの講座を受講しています。最近仲間もたくさんでき、学んだ知識を仕事に活かしてという実感も得られるようになってきました。「これも、パパやおじいちゃん、おばあちゃんが子どもたちの面倒をよく見てくれるおかげだわ。」といつも家族に感謝しています。

直樹も、実をおじいちゃんにまかせて、望と亜希と小学校に出かけます。今日は子ども会のある日。テーマは、「子どもたちの夢をはぐくむ『希望の輪』を楽しく学ぼう！」です。特に、失敗から新たにチャレンジする気持ちにつなげていく考え方は、大人にとっても参考になります。子どもたちも、興味津々の様子で話しを聞いています。

子ども会では、他にも体験会や合宿など様々な活動を活発に行っていて、子どもたちにとって、親や先生以外のいろんな大人と触れ合うことのできるよい機会になっています。また、親たちにとっても、他の親や子どもたちの様子を見ることで、学ぶことがたくさんあります。

第4話 地域活動・ボランティア活動・余暇活動の充実

○地域でのボランティア・余暇活動が活発に

- ・ 地域での「一人一役」により途絶えていた地域の伝統的行事などが復活
- ・ 外国人観光客の誘客など、新たなコミュニティビジネスにより人々が交流

◆ 今日の日曜日。月に1回開かれている地域の祭り保存会の集まりがある日です。この地域には、古くから伝わる神社の祭りがありましたが、後継者不足で一時期途絶えていました。その祭りを5年前、有志が力をあわせて復活させたのです。今は、秋の本番に向けて、全体踊りの練習日程を相談中。保存会に参加する地域外の地元出身者も増え、祭りは年々、盛り上がっています。保存会のメンバーも準備に熱が入ります。

沙織は、亜希と実と近くの観光案内所へ。海外では、「ヘルシーへしこ」などの福井食ブームが起きていて、外国人観光客が急増中。沙織は、月2回、観光ボランティアをしています。案内所にはいろんな国の人たちがやってきます。ふと子どもたちの方をみると、外国人観光客の子どもとすぐに仲良くなった様子。子どもたちも一緒によい刺激を受けられるこのボランティアを、とても気に入っています。

○二地域居住の増加

- ・ 福井と都会との交流が容易になり「週末は都会に住む」という選択も増加
- ・ 二地域居住者とともに農作業をする人も増える

◆ 直樹は帰宅すると、お隣の木村さんから預かっているコロ（犬）に餌をやりま
す。木村さんは、時々、週末に親子で東京へ行き、短期で借りられる高層マンシ
ョンで過ごしているのです。数年前の新幹線開通で首都圏へのアクセスがよくな
り、「暮らすなら福井だけど、都会の生活にも憧れる。」という人たちの中には、
「週末都会暮らし」をする人も出てきているのです。

週末の午後は、一家全員で農作業です。昼食後、歩いて10分ほどの共同農園
(シュレバールガルテン) へ出かけます。蟹田家が借りているのは、一昔前まで駐
車場だった住宅街の一画です。今では住宅地のあちこちに、こうした農園が広が
っています。結婚するまでほとんど農作業の経験がなかった沙織も、昔農家だっ
た隣区画の伊藤さんに教わりながら徐々に慣れてきました。土に触れていると、
仕事の悩みや疲れも忘れ、心身ともにリフレッシュできるのを感じます。今日は、
子どもたちと一緒にさつまいも掘りに挑戦。大きなさつまいもがたくさんとれて、
子どもたちも大喜びです。

「みなさんおそろいで、ご苦労さまです。」草とりや収穫の作業をしていると、
農園の近所に住む松井さん夫妻が通りかかりました。直樹が声をかけると、これ
から大阪からやってくる友人と山のふもと近くに所有している農地へ出かける
ところだといいます。松井さん夫妻は、「Eサポーター」として耕作放棄地の活
用と里地里山の管理をしています。直樹も、松井さんたちの管理する里山で作業
を手伝ったことがあります。日本の原風景を思わせるいいところです。

農作業のあとは、農園でとれたての野菜を使ってバーベキューです。近所の子
どもたちも集まってきて、にぎやかなパーティーは夕暮れまで続きました。

2-3 祖父母の生活（達年世代：62～76歳）

第1話 ソーシャルキーパーソン（地域社会の担い手）

○コミュニティビジネス（コミュニティ交通の運営）

- ・子どもや高齢者など交通弱者を達年世代が運営するデマンド方式の「コミュニティ交通」が支える
- ・「ITS交通事故減・追突防止システム」の発達で、高齢者でも安全運転が可能

- ◆ 今朝は、誠（75歳）がコミュニティバスを運転する日です。朝1時間の地域活動ですが、早起きできるし、子どもたちの元気な顔を見ていると自分も元気になると、自分から進んでコミュニティバス専用の運転免許も取りに行きました。

科学技術の進歩で、「ITS交通事故減・追突防止システム」が実用化され事故が大幅に減少しました。コミュニティ交通は地域の達年世代がバスの運転や交通全体の運営もするようになっていきます。

コミュニティバスは、地域の達年たちが、社会的企業（ソーシャル・エンタープライズ）により運営していて、安い運賃で運行されています。利益も、バスの増便や停留所の改造などに還元されるため、みんなが乗れば乗るほど便利になるととても好評です。

これまで、施設ごとに持っていたマイクロバスなどの管理を、社会的企業“タツネン”が一元管理することにより、人件費や維持管理費などのコスト縮減と運行回数のアップが可能となりました。

誠は、時々、昼間の多機能バスの運転も担当しています。野菜の直販やリラクゼーション機能を持った多機能バスでは、老年世代が自ら作った野菜を持ち寄りたりリラクゼーションルームでの交流を行っていて、バスが地域の潤滑油のようになっていると感じています。

○知識を活かしたNPO等の創設

- ・達年世代が地域でNPO、社会的企業（ソーシャル・エンタープライズ）を創設
- ・社会的役割を確保した達年は充実した人生を送っている
- ・NPO、ソーシャル・エンタープライズ等の活動によりQOCを向上

- ◆ 誠は5年前に、気心の知れた元会社の同僚を中心に社会的企業、その名も“タツネン”を立ち上げました。今では輪が広がり、元同僚以外にも地域の住民が参加するようになっていきます。

誠は、自分たちの世代が、地域のきずなを強める存在であると思うようになり、これまでの知識や経験を地域に還元したいと思っています。また、自分が子どもの時に比べ、子どもの数は減少しましたが、息子の直樹（45歳）が孫の望（14歳）や亜希（9歳）と一緒に、小中学校に出かける姿を見ていると、子どもたちがつなぐきずなもまだまだあるなと思っています。

誠は、年に1回、“タツネン”のメンバーと地元の小学校の子どもたちと、地域調査をすることにしています。調査では、地域で暮らす人々が豊かに暮らすためには何が必要か、どのような地域にしたいか、また、自分たちが地域の幸福度（QOC）を向上させるために、何ができるかを考えます。子どもたちも、調査では探検隊のようにチームを組んで一緒に調べて、いつも外で遊んでいる子どもからは、大人の知らないようなことを教えられることも多くあります。調査はみんなが参加できる地域の楽しいイベントになっています。

さらに、“タツネン”の運営目的は地域社会への貢献のほかにもたくさんあり、多くの達年世代が所属しています。“タツネン”が活躍する場面は次のとおりです。

- ①青年世代のニート対策として、就職斡旋・紹介、仕事の技術提供（職業教育）、訪問、話し合い等を行います。今日も青年世代のニートとの意見交換会で、働くこととはどういうことか、人生の先を見据えた行動とはどういうことかを話し合いました。家族と先生以外の大人をほとんど知らない参加者の一人にとっては世界が広がる意見交換会となりました。
- ②共働きの世帯に対しては、子どもの送り迎えや、仕事が終わるまでの預かりなど、地域の孫育てをしています。男女共同参画のサポートとして、地域の孫育てを行う“タツネン”の役割は次第に大きくなっています。子どもたちが地域の大人たちと顔を合わせて話をするすることで、子どもたちの世界も広がっていきます。
- ③ボランティア団体に対しては、地域の情報収集・発信に伴う交流、また、会計経理、会場の設営などをサポートします。ボランティア団体が活動に集中できるよう、事務的な仕事を“タツネン”が請け負います。また、地域の困っていること、解決すべきことを地域に密着した“タツネン”が情報収集・発信することにより、ボランティア活動がスムーズに行われています。
- ④豊富な情報収集力と消費者ネットワークを活かし、シュレバーガルテンで生産する作物についてアドバイスを行います。シュレバーガルテンの運営上の問題の一つに、生産物の流通先の確保があります。地域に密着した“タツネン”はその豊富な情報網を活かし、生産物の流通を促進します。

- ⑤シルバー人材センターの機能が充実し、会社の会計経理や行政手続などの仕事も行い、収入を得ています。企業は会計経理等を“タツネン”にアウトソーシングすることにより、その分の経費が削減されます。
- ⑥簡単な道路改修や整地などを低コストで請負います。
- ⑦地域の交通機関であるデマンド交通、コミュニティ交通の運営管理を行い、安価で便利な交通システムを形成しています。
- ⑧QOC向上のための調査や、調査結果に基づく地域の改善を行っています。

○在宅介護から地域介護へ

・介護資格を取得する達年が増加し、達年世代が「地域介護」の中心に

- ◆ 平日の午前中、恵子（73歳）は、家事ロボットを駆使して家事全般を手早く片付けます。昼前になると、近所に住む一人暮らしのおじいちゃんの家に出かけます。

おじいちゃんとおしゃべりの花を咲かせながら、栄養バランスが取れた自慢の家庭料理を作ります。料理は見栄えも大切です。ホームヘルパーの資格は持っていませんが、料理が得意なのでこの特技を活かし地域に貢献しようと、地域の介護サークルにボランティア登録をしています。ボランティアといっても無報酬ではなく有償ボランティアです。無理なく続けていきたいので、平日のお昼の数時間と決めて、活動しています。ただ最近は、料理だけではなく、おじいちゃんのいろいろな相談にも乗れるよう、ホームヘルパーの資格に挑戦しようかと考えているところです。

今では、高齢者の一人暮らしも多くなったので、達年世代が中心となって、老年世代が家から外にでるイベントなども開催しています。今月は、小学校で、郷土料理等を持ち寄り、みんなで集まって食事会を予定しています。カラオケも準備しているので、老年世代の人たちにとってもストレス解消になると思っています。

先月のイベントは落語大会でした。以前に、福井で始まった女性落語大会が今では、世界大会になっていて、外国人の落語家や英語での落語などいろいろな部門のチャンピオンが誕生しています。みんなで大笑いして、大変好評のイベントです。

第2話 ワーク a n d コミュニティ（仕事と地域活動の両立）

○元気な達年世代が継続的に働ける達年ワークシェアリング

- ・ワーク a n d コミュニティの両立
- ・地域資源を活かす労働で地域が活性化

- ◆ 社会的企業“タツネン”は地域の空き家や空きスペースの管理・運営も行っています。今日は以前、会社として使われていたビルの再利用計画についての立会です。誠はこの地域の雰囲気やニーズを、新規オープンを考えている店主に伝えるなど、地域に合った店を出店するためのコーディネーターの役割を担っています。その店は紹介料とアドバイス料などをタツネンに支払い、タツネンの収入になります。また、タツネンの発行する地域フリーペーパーに新しい店の紹介が出されるため、広告宣伝費用が格安で抑えられ、また、タツネンの太鼓判がついた店として紹介されます。

第3話 孫育て

○地域の子どもたち育て

- ・達年から子どもまで楽しめる多様なサークルや教育が実現

- ◆ 恵子は、午後から小学校の福縁サロンに行きます。福縁サロンには、子どもたちや近所の高齢者が集まってきています。福縁サロンでは、いくつかのサークルが開かれており、子どもたちも高齢者も自由に参加しています。

恵子は、クラシックの音楽鑑賞のサークルによく参加します。今日は、孫の亜希と実（5歳）もいっしょに参加しました。このサークルは、みんなで楽曲を鑑賞し、感じたことを話し合います。以前は、クラシック音楽の良さがよくわかりませんでしたが、このサークルに参加してから、クラシック音楽の味わい方が少しずつわかってきました。いっしょに参加している子どもたちの自由な意見は、本当におもしろいです。亜希は「お花畑の中でお昼寝をしている気持ちになった」といい、周囲の達年たちを笑わせていました。

自分だけではなく、子どもたちも、クラシックは決して堅苦しいものではなく、楽しいものだと実感しているようです。

第4話 豊富な時間の過ごし方

○多様な生涯学習が可能に

- ・ 達年世代が気軽に講師を務める多様な教室が実現し、参加者が急増
- ・ 地域や個人レベルの国際交流がさかん

- ◆ 恵子は、25年前に韓流ドラマに夢中になり、その影響で韓国語の勉強を始めました。字幕版の韓流ドラマや映画を楽しんだり、テレビの韓国語講座を視聴するなどして始めた勉強ですが、継続は力なりで、今ではすっかり韓国語上級者です。

韓国にもよく旅行に行くようになり、今年も3回は韓国に行きたいと思っています。特に、韓国の鍋料理とサウナとエステにはまっています。韓国に友人もできました。友人とは、ディスプレイ会話で交流していますが、時々、日本へ遊びにきます。釜山から敦賀まで高速船を利用すれば半日で行けるため、1泊2日の小旅行にはぴったりです。その時は、蟹田家に泊まり、自慢の福井の伝承料理を振舞っています。

恵子は、週1回、福縁サロンで開催している韓国語初級クラスに講師として呼ばれています。今では、多くの韓国人が観光で福井へやってきます。自動翻訳機の普及で日常会話には不自由しなくなりましたが、韓国の習慣や料理の基礎も学ぶ初級クラスは宿泊施設や店舗で働く若い世代の受講生でいつもいっぱいです。

○共同農園（シュレバーガルテン）での農作業

- ・ 健康の維持や自給自足、おすそ分けのため共同農園が普及
- ・ 都市住民との間で「緑の親戚」関係が成立

- ◆ 今日は共同農園で、採れた野菜を使った野菜づくりコンテストとバーベキュー大会を行います。誠の作った野菜は惜しくも準グランプリ。「来年こそは・・・。」と決意を新たにしました。実たちは、子ども同士ではしゃいで、泥んこになっています。直樹や沙織（43歳）もここで新たに知り合った人たちとウィークタイズの関係を築いています。また、他の地域からもこの共同農園を利用する人がたくさんいて、他の地域の人たちとの新たな友人関係が築かれています。

共同農園での先生は達年世代です。といっても、多くの達年は共同農園で農業を始めた人がほとんどです。今日も農作業をしたことのない孫たちと一緒に、芋掘りやトマトの植え付けを行っています。力仕事は壮年世代の役割です。

休憩の合間には、小鳥たちのさえずり、風になびく木々のざわめきを聞きながら、おいしい空気を吸い、採れた野菜はそのまま食べます。直樹たちにとっても、日常の喧騒から離れられる、心が休まる大切な時間となっています。

共同農園などで採れた農作物は自分たちで食べる他に、東京や大阪に暮らす人々にも“タツネン”を通して、おすそ分けしています。「緑の親戚」と呼ばれていて、都市に住む人たちは、おすそ分けのお返しに、Eサポーターとして、農作業や里地里山の保全活動をしています。都市に住む人とも農作物を通して、新たなつながりができて、誠は、「もっとおいしい農作物を提供するぞ。」と意気込みを新たにしています。

○シニア・シルバー産業の活性化

- ・幅広い分野にわたるシルバー産業が発展
- ・高齢者の増加に伴い、シルバー産業のシェアが増大

- ◆ 達年世代は、自身の体験をもとに、市場のニーズを敏感に感じ、かつ幅広いネットワークを持っているため、シルバー産業の中核を担っています。

誠は、昔、繊維会社を経営していたノウハウで、福井の特殊な素材とデザイン力を活かして、ユニバーサルデザイン商品開発を考えています。老化による視力の衰えや、反応の低下などに対応した商品は、事故が起きる前の予防商品として、大きな市場に成長しています。また、日本で作られたこれらのユニバーサルデザイン商品は、高齢化を迎えたアジア各国に輸出され活況を呈しています。

仙水家の物語

これは2030年の青年世代・熟年世代・老年世代の物語です。

仙水家は福井の都市部で三世代近居で暮らしています。子どもたちはそれぞれ仕事を持ち、父母も仕事と地域活動を両立させています。近くに住む祖父母は高齢ながらも自立した生活を送っています。

(登場人物)

仙水 翔太 (しょうた)

2009年生まれ／21歳 福井の大学の3回生
原子力工学を専攻し、福井に研修にきている福育人と交流

仙水 あおい (あおい)

2004年生まれ／26歳 東京の広告会社に勤務
マーケティングが得意で、福井の眼鏡の世界展開を夢見ている

仙水 さくら (さくら)

2001年生まれ／29歳 福井の原子力関係会社に勤務
サークルで知り合ったパートナーと結婚予定

仙水 陽子 (ようこ)

1971年生まれ／59歳 翔太たちの母親
福井駅前商店街でアパレル販売店を経営

仙水 健一 (けんいち)

1969年生まれ／61歳 翔太たちの父親
複数のベンチャー企業のアドバイザー

仙水 和子 (かずこ)

1945年生まれ／85歳 翔太たちの祖母
祖父(勇)と総合病院併設の高齢者向けマンションに住む

仙水 勇 (いさむ)

1940年生まれ／90歳 翔太たちの祖父
10年前に脳梗塞で倒れたが、ロボットスーツの普及で日常生活の不自由はない

※仙水は、福井県の花の「水仙」から名付けました。また、名前は、それぞれの生まれた年別のランキングの上位の名前等に基づき、「ふくい2030年の姿」検討会において作成していますので、実物の人物・団体等とは一切関係ありません。

2-4 若者の生活（青年世代：17歳～31歳）

第1話 世界に挑戦する若者（教育・ビジネス）

○海外大学との連携、修士修了生の増加

- ・海外大学との遠隔コミュニケーションが実現
- ・大学院は即戦力人材の教育機関として位置づけ

◆ 翔太（21歳）は、福井の大学で原子力工学を専攻しています。

大学では、提携しているフランスの大学の講義を大型ディスプレイで受講しています。フランスの学生とも、自動翻訳機を通して自由に議論できるので、世界の先端の原子力技術を互いに学び合うことができます。

大学卒業後は、最新の原子力工学を学ぶため、海外に留学することも考えています。しかし、今通っている大学の大学院では、就職を希望している福井の原子力関連会社の社員が定期的に講師として来校していて、原子力工学に関する知識と、現場で要求される技術を学ぶことができます。そのため、今の大学の大学院を卒業して社会人になってから、海外留学することにしようかとも考えています。

○グローバル市場での挑戦

- ・福井の文化や技術にグローバル市場が注目

◆ あおい（26歳）は、東京の広告代理店でマーケティングサービスを担当しています。今は、福井の企業のマーケティング活動の支援をしており、へしこや越前おろしそばなど、健康長寿な福井の食文化を高齢化が進む中国や韓国に紹介しています。

また、大きな市場になっているインドで福井の技術展の開催を計画しています。技術展にあわせ自然豊かで歴史資源もあり、食の豊かな福井県をPRすれば、技術展に来たインド人も、福井を訪れてみたいと考えるだろうと思っています。

第2話 社会を担うための準備期間

○デジタルネイティブ世代のビジネス

- ・年齢に関わらず社会が求めるスキルを身につける機会が増加
- ・デジタルネイティブ世代の感性が新たな市場を開拓

◆ あおいは、勤務先である広告会社の支援で週1日はキャリアアップのため、マーケティングの専門学校へ通っています。全国の同じ業種の人たちと知り合えて、授業に参加するたびによい刺激をもらえます。

また、以前に、大学の授業で体験したバーチャルカンパニーに関心があり、福井の眼鏡企業と東京のアパレルメーカーのニーズを、インターネット上で結び付けるシステムを構築しているバーチャルカンパニーにメンバーとして参加しました。医療技術の進歩による視力の矯正がごく一般的になった今では、眼鏡は視力の補正のためではなく、主に紫外線カットやファッションの一部として愛用されるようになっており、眼鏡に関する独自の技術を持つ福井の企業のノウハウを生かして、デザインに力を入れた製品を作りたいと思っています。

バーチャルカンパニーのおかげで、世界中から簡単にデザインを集められるようになっていますが、福井在住の気鋭のデザイナー達からも、インターネットを通じてデザインを募集し、「純福井産」といえる高品質な眼鏡を東京で販売したいと思っています。

福井でアパレル販売店を経営している母親（陽子：59歳）にその夢を伝えたところ、夢を応援してくれることになりました。母の店の広告事務を手伝う傍ら、事業ノウハウを伝授してもらい、仕事に活かそうと思っています。

仕入先の眼鏡メーカーを紹介してもらえることになったので、ディスプレイ会話でサンプルを見せてもらいながら打ち合わせをする予定です。また、最近では、網膜に直接映像を写しこむことができるディスプレイ装置が開発されたことにより、いつでもどこでも映画を楽しめる眼鏡の製造にも力を入れ始めました。この分だと携帯電話機能の付いた眼鏡が開発される日もそう遠くはないかも。伝統の技を継承しつつ、新しい技術も積極的に取り入れる職人さん達と話していると、そんな夢が膨らんできます。

○ワークライフバランス

- ・働き方が「量」から「質」へ転換
- ・ワークライフバランスの考えが浸透し、放課後活動や休日活動が活発化

- ◆ あおいの会社は、18時には一斉退社が義務付けられています。仕事の効率化やエネルギーコストが抑えられるメリットがあるのはもちろんですが、何より「職場の外での何気ない会話や出来事の中にこそ、仕事に役立つヒントやチャンスが隠れているものだ。」という社長の方針によるものです。

今日の夜は、北陸新幹線沿線の各地に住む大学の友人たちと、恒例となっている月一度の夕食会です。子どもの頃は、友達が遠くに引っ越すと、もう一生会えないような気持ちになったものですが、高速交通網が整備され、日本中が身近になったおかげで、全国の友人たちとの輪はしっかりつながっています。仕事の話から恋愛の悩みまで、楽しいおしゃべりは尽きません。

そんな中、アパレルメーカーに勤める友人から、体温に反応して変形する発光性のある衣料品用の生地を探していると聞きました。「あれ？そんな会社、福井にもいろいろあったような…」なるほど、社長が言ったとおり、職場の外で仕事の種が見つかりました。明日からまた新たなリサーチの開始です。

○結婚、子育ての経済的負担の軽減

- ・現実の生活に即したフレキシブルな男女の役割分担意識が浸透
- ・家族の課題を地域で共有
- ・社会生活と家族生活の両立を支援する制度の確立

- ◆ さくら(29歳)が勤める会社でも、「18時一斉退社」が実施されているため、時間内に集中して勤務する風土ができています。仕事が終わってから、同僚と公共施設の空きスペースで開催されているジムに週2回通い、健康づくりに励んでいます。周りの会社でも社員は、18時に退社しているようで、空きスペースを活用したサークル活動が盛んです。

会社以外のサークルに参加することで、これまでと違った人間関係ができ、新たな刺激を受けることが少なくありません。また、平日でも家族と共に過ごすことが増えて、サークルで出会った結婚予定の大輝も誘い、一緒に食事をしたりもします。

大輝は東京出身ですが、福井の美味しい食事や、人々の優しい気質が気に入り、結婚しても福井に住むことを考えています。結婚してもお互いに仕事を続けるつもりですが、ワークライフバランスの考え方が浸透しているので、結婚後の生活に不安はありません。

共働き世帯が多い福井では、地域で育児・教育を行うシステムがあるので、結婚後の家庭生活も安定しています。近所の夫婦の多くは共働きですが、子どもが子ども園から帰った後も、近所の高齢者が見守る中で、外遊びをしているところに迎えに行く親をよく見かけます。また母親同士のネットワーク「井戸端」もあり、集会所に集まって育児や教育の悩みについて話し合ったり、アドバイスをしたり、子育ての経験者である高齢者なども参加して、みんなで子育てをしています。また、さくらの会社の中にも託児所があり、顔見知りの親たちが交代で面倒を見ているので、働きながらの子育てにも不安はありません。

○地域活動の奨励

- ・ 家族や世代を超えた、地域の支え合いの芽生え
- ・ 若者は地域を支えるサポーター

- ◆ 翔太の朝は、ウォーキングがてら近所の一人暮らしの老年の家を訪ね、困ったことがないか確認することから始まります。物事を簡単にこなしてしまうことを「朝飯前」といいますが、そもそもその語源は、江戸時代の人たちが、朝ごはんの前に近所のお年寄りや身体の不自由な人たちの様子を見に回ったことが始まりのようです。「私が若かった頃はそんな習慣はなかったけど、今また江戸時代の習慣が復活するなんて面白いと思わん〜？」と笑っています。

老年の人と話すと、こんな面白い話が聞けたりします。しかも、今日は、好物の福井の郷土料理「たくあんの煮たの」をおすそわけしてもらいました。今朝は美味しい朝ごはんになりそうです。

第3話 ふくいでスキルを身に付けた若者「福育人」

○アジアの技術者等が日本の最先端技術を習得

- ・ 福井で集中して学べる原子力技術に世界が注目
- ・ 福井で学んだ「福育人」のネットワークが世界に広がる

- ◆ さくらは、様々なタイプの原子力発電所が立地する地元福井で発電所のメンテナンス業務を行う会社に勤めています。アジア地域で需要が高まっている原子力関連技術者を育成するために、会社では海外からの研修生を多く受け入れています。さくらも業務を通じて研修生を指導しています。

先月、中国からやってきた研修生の話では、中国でも原子力発電所の老朽化が始まっていて、福井に発電所のメンテナンスに関する高度な技術があることがうらやましいとのことでした。

福井では原子力産業に関連して、電気を効率的に蓄える電池技術なども多く生まれており、その技術を世界各地で活かすため、関連会社でも海外研修生を多く受け入れています。アジアでは「福育人」と呼ばれる福井で技術を学んだ人が、その国の第一線で活躍しています。さくらは、互いに連絡を取り合っており、技術の向上を図ることが楽しみになっています。

○地域と大学の連携

- ・ 若者は地域を支えるサポーター
- ・ 世代を超えた支え合いが、世代間交流を促進

- ◆ 翔太の就職活動中の友人の話では、「ワークシェアリング」や「地域貢献から生まれるやりがい追求」という考えのもと、副業を認めている会社も増えていて、それを受けて短い時間で活動できる地域貢献ビジネスも多く生まれているようです。これまで参加した中では、経験したことがなかった農業体験が新鮮で、高齢者の畑仕事を手伝ったあと、自宅に招かれて一緒に晩御飯を食べたことが思い出となっています。これをきっかけに、昨年集落の祭りにボランティアとして参加しましたが、就職活動が忙しくなって参加できない今年は、後輩たちが祭りの手伝いにいっているようです。

○高速交通体系の発達

- ・ 北陸新幹線の開業、高規格道路の開通

- ◆ さくらの会社では、北陸新幹線を使って北陸一円や関西圏から通勤している人もいます。また、さくら自身も休日に東京に住むあおいのところに遊びに行くなど、短時間で都市圏と福井を移動できる高速交通体系のおかげで、ビジネスやレジャーの面で交流が盛んになっています。

都会から近くなった福井の風土に魅せられる人は多く、福井在住を決めた会社の同僚もたくさんいます。妹のあおいの話では、福井のビジネスパートナーが頻繁に東京を訪れるようです。彼女自身も、最近では仕事も兼ねて頻繁に福井に帰ってくるようになりました。

第4話 若者文化の発信

○福井発のジャパン・クールと東京 Kawaii

- ・若者向けのコミュニティスペースでストリート文化が活発化
- ・福井発の若者文化が全国に発信
- ・まち中の交流スペースで若者が活動

◆ まち中には若者の交流スペースが多く作られています。翔太は、講義終了後や休日には、友人を誘って楽器を演奏したり、ダンスを踊ったりもしています。

休日にはサークル仲間がフリーマーケットを開いて、いらなくなった洋服や生活用品を安値で販売しています。マーケットが評判を呼んで、周辺の大学や高校、一般からの参加者も増え、地産地消屋台も出るなど福井の新しい「コミュニティ市」がつくられて、毎週末が学園祭のようなにぎやかな雰囲気になります。

以前の文化活動は、個々人がインターネットなどを使って自宅で活動することが多く、また、当時は、人が集まる場所といえばショッピングセンターが代表的でしたが、交流スペースができてからは、誰かが何か面白いことをやっているこの場所にみんなが集まるようになりました。

福井の若者文化が凝縮されている交流スペースは、新しい若者文化の発信地として全国的にも注目されていて、福井出身のモデルやDJが活躍しています。さらに、福井発の音楽やファッション、メガネなどが「ジャパńクール」や「東京kawaii」の流れに乗って全世界に発信されています。

2-5 父親・母親の生活（熟年世代：47歳～61歳）

第1話 知識の活用

○知識・経験を活かして複数のベンチャー企業でアドバイザーとして働く

- ・ワークシェアにより複数の会社に在籍する人が増加

◆ 健一（61歳）は、現在3つの会社のアドバイザーをしています。今日は、午前中に1社、午後は2社に出勤する予定です。近年、複数の会社に勤めることも珍しくなくなってきました。

長年、企業で経理・総務を担当していたので、知り合いから、新しく立ち上げた企業の経理事務等のアドバイスを頼まれました。ワークシェアリングやフレックスタイムの導入で時間に余裕があったため、午前中だけその企業に出勤し、アドバイスをすることにしました。ベンチャー企業は、アイデアはあるのですが、労働力の確保が難しいようです。自分の知識や経験はとても重宝され、若い経営者からも頼りにされていることが仕事のやりがいにつながっています。

それ以来、同じように労働力や経験が乏しい、いくつかのベンチャー企業のアドバイザーとして働くようになっています。

また、先日同じように複数の企業でアドバイザーとして活躍する大学の後輩と会って、話していたことを思い出しました。彼は、「ロストジェネレーション」と呼ばれ、職を転々とした時期があったようですが、今では、いくつかの職場を経験したことで、職場の課題や問題点を的確に見つけることができ、職場にもすぐに慣れることができると言っています。人生に、ムダなことなんてなく、あの時の経験が人として幅を持たせたのだなと感じています。

第2話 リスタート

○知識を活用して、関心のある分野での新会社を設立

- ・NHK大河ドラマ「松平春嶽」や「お市と松」が放映
- ・福井市内に歴史散策遊歩道や、足羽川や足羽三山等の自然を楽しむ街中トレッキング遊歩道が整備

- ◆ 5年前にNHK大河ドラマで「松平春嶽」が放映されたことで、福井には多くの観光客が訪れています。また、道路空間の再配分で、自動車と完全分離された遊歩道が作られているので、街中ツーリズムが盛んになり、歩いて気軽に歴史散策を楽しむ光景が見られます。

健一は、あと4年でいわゆる定年の時期を迎えますが、タツネンを経営する誠さん（75歳）から、観光ビジネスに参加しないかと誘われています。街中ツーリズムと郊外のエコグリーンツーリズムを組み合わせた長期滞在型観光により、福井をゆっくり楽しむ人が増えています。

それぞれのツーリズムには、タツネンが派遣するガイドがついていますが、今日の夜は、ガイドのメンバーで集まり、飲みながら福井の観光について話し合う予定です。それぞれ経験の違う者同士なので、自分が思いもしなかった面白いアイデアが出てくるのではないかと期待しています。

○駅前空き店舗でのチャレンジ

- ・ 高速交通体系の整備や次世代インターネットの普及により、都市部と地方の情報格差が解消
- ・ 人口減少にともない、空き家や空きスペースが多くなるが、賃貸借の規制が緩和され、安く物件を借りることが可能

- ◆ 陽子（59歳）は、福井駅前商店街でファッションアパレル関係のお店を営んでいる個人事業主です。天気がいいので、自転車専用レーンを通り、今日もお店まで自転車で出勤します。

十数年前から中心市街地では不動産の所有と利用の分離が進み、意欲のある人には空き店舗が簡単に借りられるようになりました。もともと地元繊維メーカーで営業を担当していましたが、アパレル販売に関心を持つようになっていたので、思いきって会社をやめ、福井駅前商店街に店舗を借りています。

今日は、あおい（26歳）から紹介された、京都のデザイナーとディスプレイ会議で、新しいデザインを考えています。作る服は、福井で作られた機能性の高い素材と、京都の伝統を感じさせるデザインで、インターネット等を通じて、世界各地から注文が入ってきます。

若手のデザイナーとも協働で仕事をすることで、今でも若さと美貌を保っていて、さくら（29歳）たちにとってもちょっとした憧れになっています。父は、そんな母にちょっとやきもちを焼いているようですが。

第3話 達年世代が運営するNPO等に参加

○地域の公共空間（公園・道路・用水路等）をアダプト制度で管理し、緑の空間を創出

- ・アダプト制度によって住民による地域の緑化が進み、市街地は緑あふれる街並みに変化
- ・マンションにも地域の集会所のようなコミュニティルームを設置

◆ 今日は休日です。健一は、マンションのコミュニティルームで同じマンションに住む達年の人たちとお茶を飲みながら、午後に行うNPO活動の打ち合わせをしました。

昔から環境問題に関心がありましたが、具体的に活動する機会が見つけれずいました。しかし、数年前、コミュニティルームで世間話をしているときに、同じマンションに住む達年の人たちが、アダプト制度によって地域の緑化・美化活動を行うNPOを運営していることを知り、参加させてもらうことにしました。

「アダプト」は英語で「養子縁組をする」といった意味合いがあり、アダプト制度とは、公園・道路・用水路などの公共財を住民自らが管理し、緑化や美化活動を行う制度で、福井では20年ほど前に全国に先駆けて広がりました。今では公園や道路などには緑があふれていて、その美しい街並みは全国からも注目されているようです。

今日は、マンションの周りの路側緩衝帯の清掃をすることになっています。路側緩衝帯には、樹木だけでなく様々な植物が植えられていて、緑豊かな前庭として整備されています。ここは、市内でも魅力的な路側緩衝帯として有名で、街中トレッキングのコースとして人気があります。

NPOで活動する達年の方達は本当に生き生きと楽しそうで、もうじき65歳の定年を迎える自分も、あんなふうに心身ともに健康を保って活躍していきたいと思っています。

第4話 健康いきいき家族

○家族の健康状態がリアルタイムで医療機関と家族に情報提供される健康診断システムが確立

- ・マイクロチップによる簡易健診が可能になり、その結果が家族にも即時送信
- ・ロボットスーツなどにより介護の負担が大幅に減少

◆ 健一は、朝、目が覚めると、まず携帯を見るのが日課になっています。体に装着されたマイクロチップによる健康診断結果をチェックするためです。今日も異状なし。これを見ると一日の元気が出てきます。一緒に暮らす陽子、さくら、翔太（21歳）の診断結果も良好なようで、「おはよう、今日も健康やね。」が朝のあいさつになっています。

ただ、近くに住む父親の勇（90歳）の血圧が少し高いようです。送られてきた診断結果は問題ないとのことでしたが、心配だったので仕事の合間に職場から連絡してみました。ディスプレイに現れた父親は顔色もよく、元気そうな顔を見られて一安心です。父親には心配しすぎだと笑われましたが、10年前に脳梗塞で倒れ、半身不随になった父親の健康状態には、どうしても敏感になってしまいます。父親は一時期寝たきりの状態でしたが、今ではロボットスーツを装着すれば身の回りのことができるまで回復しています。

勇が寝たきりになったとき、健一と陽子は1日中付きっきりで世話をする母親の和子（85歳）を助けるため、就業後や休日に交代で父親の介護にあたりました。子どもたちもまだ学生で手がかかり、介護と子育てで毎日が大変でした。しかし、ちょうどその頃に実用化が始まったロボットスーツのおかげで、父親がなんとか自力で動けるようになると、介護がとても楽になったことを思い出します。

2-6 祖父母の生活（老年世代：77～86歳以上）

第1話 みんなに見守られた安心生活

○医療機関とつながる住環境とこころで感じる安心生活

- ・高齢者向けの移医食楽住が一体となったまちづくりが実現
- ・医療通信ネットワークが進化し、「家庭内健康診断」、「自宅診察」が実現

- ◆ ここは、市街地の中心部に位置する総合病院併設の高齢者向けマンション。
勇（90歳）と和子（85歳）がいつものように目を覚ますと、病院低層棟の屋上緑地から野鳥のさえずりが聞こえてきました。今日もいいお天気のように。
寝室のカーテンを開けた和子は、ベッド脇のモニタースイッチをオンにします。このコンピュータには二人の健康状態に関する様々なデータがインプットされていて、その日の健康状態を教えてくれます。データは毎日、かかりつけ医師と別居している息子の健一（61歳）の携帯電話に送られ、体調が悪い時には、モニターを通して自宅で医師の診察を受けることもできます。近年は遺伝子診断も発達しているので、ほんの少しの兆候で病気の早期発見が可能になっており、二人は安心して毎日を過ごしています。

○達年が活躍する地域介護

- ・食事は栄養士の管理、食材は地産地消が実現
- ・達年世代による地域介護システムの充実

- ◆ 健康チェックが終わったら、一日の食事の注文です。モニターからタッチパネルで選べます。モニターに表示されているのは、病院の管理栄養士が作成した10種類近くのメニュー。カロリーや栄養バランス以外に食材の産地や生産者の情報も見ることができ、選択した食事の食材が、朝・昼・夜、決まった時間に、近くのサービスセンターから必要な量だけ届きます。調理済みの温かいものも選ぶことができるのですが、マンションにはキッチンもあり、和子は料理が好きなので、体調が悪い時など以外は、食材を注文しています。

「おはようございます！」玄関のインターホンから、配食サービスさんの明るい声が聞こえてきました。朝食が届いたようです。この配食サービスは定年退職した達年世代が運営しており、二人はこの地区を担当している方たちとすっかり

顔なじみになっています。

「いつもありがとう。」食事を受け取ってから、時々ふと考えます。「若い頃は、商店街の八百屋さんや魚屋さんなどと世間話をしたものだ。形は変わったけれど、こういうつながりは本当によいものねえ。」

午後になると、勇のもとに介護ヘルパーの山田さんがやってきました。今日は、ボランティアの鈴木さんも一緒です。山田さんは、いつも手際よく入浴やリハビリを介助してくれます。電器メーカーを退職し、地域のために貢献したいと介護ボランティアに参加している町内の鈴木さんともすっかり打ち解けていて、リハビリの間いろんな話に花が咲きます。息子夫婦や孫たちと近いけれども、離れて暮らしている勇にとって、何かあるとすぐに相談ができる地域介護のボランティアメンバーは、かけがえのない存在となっています。

○家族をつなげるディスプレイ会話

- ・ 3D立体映像によるディスプレイ会話ができる電話が普及
- ・ ライフステージに応じて住み替える「ライフステージホーム」が普及

- ◆ 山田さんたちが帰ってしばらくすると、電話がかかってきました。今朝の健康診断のデータを見た健一が、勇の血圧がいつもより高いのを心配して職場からかけてきたのです。3D立体画像で現れた健一は、話していると、まるで本当に近くにいるかのよう。休日には、東京にいるあおい（26歳）ともよく立体画像を使って近況報告をしあっています。

近くに住んではいても父親の元気そうな顔を見て、健一もほっとした様子。33歳で子どもが生まれた時に郊外で購入したマイホームを離れてこのマンションに移り住む時は迷いもあったのですが、離れていてもこうしてみんなに見守られていることを時々深く実感します。

第2話 安全な移動

○高齢者向けの低速型車両（ゴールデンビークル）が普及

- ・ 小型電動の低速型車両（ゴールデンビークル）が普及、道路空間の再配分により専用レーンも設置され、高齢者も安心して移動できる新しい車社会を実現
- ・ デマンド式のコミュニティ交通も普及し、交通弱者の移動手段を確保

- ◆ 午後、介護ヘルパーさんがやってきたので、和子はお隣の高橋さんと一緒に近くの小学校にある福縁サロンへ出かけることにしました。

高橋さんは最近、大阪からご主人と引っ越してきたばかり。ご主人は釣りが趣味で、新幹線で便利になった福井へよく釣りに来ており、福井の自然の美しさと、釣りで知り合った勇から聞くQOCの高さに惹かれて、子どもたちの独立を機に福井に移住してきました。奥さんも、慣れない土地での生活に最初は不安があったようですが、和子に誘われて福縁サロンに出かけるようになってからというもの、すっかりその不安はなくなった様子です。

二人はさっそく、マンション住人で共同所有しているゴールデンビークルに乗って出発。ゴールデンビークルは普通自動車の半分ほどの大きさの小型電動の低速型車両で、高齢者も安全に運転できる設計になっています。道路に出ても、普通自動車とは別に専用のスロードライブレーンが設けられているので、とっても安心。街路樹の緑や路側帯の花壇の色鮮やかな花々を楽しみながら、ゆっくりと運転することができます。また、共同所有なので維持費も安くすみます。

小学校に到着すると、ちょうど校門の前に止まったバスから、友人の大野さんが降りてくるところが見えました。最近は大規模な「コミュニティ交通」が発達し、大変便利になっているので、福縁サロンにやってくる人の半数以上は公共交通を利用しています。

ゴールデンビークルを駐車場に停め、二人は校舎の中へ。空き教室を活用した福縁サロンは毎日開かれており、地域の様々な人が集っています。世間話をしたり、趣味の仲間と作品づくりをしたりしてすごしていると「おばあちゃん、遊ぼう！」今日も学校をおえた子どもたちの元気な声が聞こえてきました。みんなの「おばあちゃん」として地域の子どもたちとふれ合えることが、なによりの楽しみになっています。

参 考 资 料

「ふくい2030年の姿」検討会 検討経過等

○検討経過

- 2007年度 月2回程度の検討会
(有識者との意見交換およびコンセプトづくり)
- 2008年度 週1回程度の検討会
(報告書への記載内容の分析および検討)

計50回程度

○意見交換

(五十音順：役職名等は意見交換時のもの)

(有識者)

- ・ 栃尾敏氏（東京新聞編集局科学部編集委員）との意見交換
- ・ 原邦彦氏（株式会社コンポン研究所取締役副所長）との意見交換
- ・ 吉川昌孝氏（博報堂生活総合研究所上席研究員）との意見交換

(大学の教授等)

- ・ 東京大学社会科学研究所（希望学プロジェクト）との意見交換
橘川武郎教授（一橋大学大学院商学研究科）、玄田有史教授、小森田秋夫教授、廣渡清吾教授、五百旗頭薫准教授、宇野重規准教授、トーマス ブラックウッド准教授、中林真幸准教授、中村尚史准教授、佐藤慶一助教、大堀研特任研究員、石川耕三学術支援専門職員、佐藤由紀リサーチ・アシスタント
- ・ 東京大学総括プロジェクト機構ジェロントロジー寄付研究部門との意見交換
秋山弘子教授、岩本康志教授、甲斐一郎教授、鎌田実教授、武川正吾教授、牧野篤教授、鈴木亘准教授（学習院大学経済学部）、村田久助教
宮内康二ジェネラルマネージャー
- ・ 大鹿隆氏（東京大学大学院経済学研究科ものづくり経営研究センター特任教授）との意見交換
- ・ 加藤まどか氏（福井県立大学学術教養センター准教授）との意見交換
- ・ 児玉昇氏（仁愛大学人間学部教授）等との意見交換
- ・ 白石浩介氏（一橋大学経済研究所世代間問題研究機構特任准教授）との意見交換
- ・ 高田洋子氏（福井大学教育地域科学部教授）との意見交換

(大学の学生等)

- ・ 仁愛大学人間学部「橋詰武宏教授ゼミ」の学生等との意見交換
- ・ 東京大学法学部「森田朗教授ゼミ」の学生等との意見交換
- ・ 県内企業の若手社員との意見交換への参加

○講座等への参加

- ・ 第109回東京大学公開講座の受講
- ・ 敦賀市政策形成能力向上プロジェクトチーム意見交換会への参加

「ふくい2030年の姿」検討会 名簿

2009年3月31日現在

○20代

永渕	智大	総合政策部政策推進課主事
小西	富美子	総務部福井県税事務所主事
山岸	千恵	総務部人事企画課主事

○30代

水江	友哉	総務部財産活用課主事
白崎	裕典	総合政策部政策推進課主事
蜂谷	陽子	安全環境部危機対策・防災課主事
菱川	京子	総務部税務課主査
山田	将之	嶺南振興局農村整備部企画主査
岸本	鉄也	総務部財務企画課企画主査
長谷川	慎司	総務部人事企画課企画主査
堂越	浩	農林水産部政策推進グループ企画主査
竹内	健一郎	安全環境部環境政策課企画主査
高木	直茂	土木部都市計画課企画主査
石山	一意	健康福祉部坂井健康福祉センター企画主査

○40代

武部	衛	教育庁教育政策課企画主査
高比良	規美子	農林水産部県産材活用課主任
白崎	俊一郎	総合政策部政策推進課主任
白寄	淳	農林水産部販売開拓課課長補佐

(計18名)

— このようなメンバーで2年間検討してきました —

○男女構成	男性：13名	女性：5名	
○平均年齢	35.7歳		
○職種構成	事務職：13名	技術職：5名	
○既婚者数	13名（子どもの数：平均1.4人）		
○出身地	福井市：6名	小浜市：1名	大野市：1名
	鯖江市：4名	あわら市：1名	越前市：2名
	坂井市：1名	若狭町：1名	佐賀県小城市：1名

参考文献一覧

著者：アルファベット、五十音順

- 24365 北海道研究会、北山創造研究所『24365 北海道 北の夢』（産経新聞出版、2007年）
- アダム・スミス『国富論』（中央公論新社、1978年）
- アラン・グリーンズパン『波乱の時代 上・下』（日本経済新聞社、2007年）
- アラン・グリーンズパン『波乱の時代 特別版』（日本経済新聞社、2008年）
- アラン・ワイズマン『人類が消えた世界』（早川書房、2008年）
- アルバート＝ラズロ・バラハシ『新ネットワーク思考』（NHK出版、2002年）
- アリエル・A・オルテガ『危機の本質－ガリレイをめぐる』（創文社、1954年）
- クラウドイス・ザイドル『サザンな大人たち』（主婦の友社、2006年）
- クレイトン・クリステンセン『イノベーションのジレンマ』（翔泳社、2000年）
- デイヴィッド・チール『家族ライフスタイルの社会学』（ミネルヴァ書房、2006年）
- ドルジェ・ワンモ・ワンチュック『幸福大国ブータン－王妃が語る桃源郷の素顔』（日本放送出版協会、2007年）
- ドーン・グラフハイト氏（米国リンフィールド大学教授）基調講演資料
- J・K・ガルブレイス『新しい産業国家』（河出書房新社、1968年）
- ジャック・アタリ『21世紀の歴史』（作品社、2008年）
- G・チャイルド『文明の起源』（岩波書店、1958年）
- GRI 日本フォーラム 2020年の日本を創る会『未来をスケッチ vision 2020』（麗澤大学出版会、2006年）
- ゲッツ・W・ヴェルナー『ベーシック・インカム－基本所得のある社会へ』（現代書館、2007年）
- ハワード・ガードナー『知的な未来をつくる「五つの心」』（ランダムハウス講談社、2008年）
- アンリ・J・F・ルソー『社会契約論』（岩波書店、1954年）
- アンリ・J・F・ルソー『エミール』（岩波書店、1962年）
- IPCC 第4次評価報告書
- ジェームズ・キャントン『極端な未来 政治・社会編』（主婦の友の会、2008年）
- ジェームズ・キャントン『極端な未来 産業・経済・科学編』（主婦の友の会、2008年）
- ジャン・ボードリヤール『消費社会の神話と構造』（紀伊国屋書店、1979年）
- ジョン・ロック『市民政府論』（岩波書店、1968年）
- カール・マンハイム『世代の問題』『社会学の課題』（潮出版社、1976年）
- レスター・C・サロー『ゼロ・サム社会』（TBSブリタニカ、1981年）
- マルティン・ハイデッガー『存在と時間（上）』（筑摩書房、1994年）
- メアリー・C・ブリントン『失われた場を探して－ロストジェネレーションの社会学』（NTT出版、2008年）
- ミルトン・フリードマン『資本主義と自由』（日経BPクラシックス、2008年）
- マックス・ヴェーバー『社会学の根本概念』（岩波書店、1972年）
- ビル・エモット（伏見威著訳）『アジア三国志』（日本経済新聞出版社、2008年）
- NHK 放送文化研究所世論調査部編『現代日本人の意識構造〔第2版〕』（日本放送出版協会、1985年）
- NHK 放送文化研究所世論調査部編『現代日本人の意識構造〔第3版〕』（日本放送出版協会、1991年）
- NHK 放送文化研究所世論調査部編『現代日本人の意識構造〔第4版〕』（日本放送出版協会、1998年）
- NHK 放送文化研究所世論調査部編『現代日本人の意識構造〔第5版〕』（日本放送出版協会、2000年）
- NHK 放送文化研究所世論調査部編『現代日本人の意識構造〔第6版〕』（日本放送出版協会、2004年）
- NHK 放送文化研究所編『日本人の生活時間・2005－NHK 国民生活時間調査』（日本放送出版協会、2006年）
- NHK 放送文化研究所世論調査部『日本人の好きなもの－データで読む嗜好と価値観』（日本放送出版協会、2008年）
- NHK 放送文化研究所編『現代社会とメディア・家族・世代』（日本放送出版協会、2008年）
- OECD 編著『図表でみる教育 OECD インディケータ（2008年版）』（明石書店、2008年）
- OECD 編著『地図でみる 世界の地域格差』（明石書店、2008年）
- OECD 教育研究革新センター編著『教育のシナリオ 未来思考による新たな学校像』（明石書店、2006年）
- プラトン『国家』（岩波書店、2002年）
- プラトン『ソクラテスの弁明』（岩波書店、1964年）
- PHP 研究所編『教育再生への挑戦－市民の共汗で進める京都市の軌跡』（PHP 研究所、2007年）
- ウォルター・リップマン『世論』（岩波書店、1987年）
- ロン・パーニック、クリント・ワイルダー『クリーンテック革命－第三の巨大ビジネスチャンス』（ファーストプレス、2008年）
- R.デカルト『哲学の原理』（角川書店、1969年）
- R.デカルト『方法序説』（岩波書店、1997年）
- ロバート・D・パットナム 柴内康文訳『孤独なボウリング－米国コミュニティの崩壊と再生』（柏書房、2006年）

- ロバート・C・アッチェリー、アマンダ・S・バルシュ著『ジェロントロジー加齢の価値と社会の力』(きんざい、2005年)
- サラ・ジェームズ&トルビュン・ラーティ『スウェーデンの持続可能なまちづくり—ナチュラル・ステップが導くコミュニティ改革』(新評論、2006年)
- ソースティン・ウェブレ『企業の理論』(勁草書房、1965年)
- シュムペーター『経済発展の理論(上)』(岩波書店、1978年)
- UFJ総合研究所『2006年日本はこうなる』(講談社、2005年)
- 青木貞茂『文化の力』(NTT出版、2008年)
- 青木仁『日本型魅惑都市をつくる』(日本経済新聞社、2004年)
- 青山浩子『「農」が変える食ビジネス—生販協業という新たな取り組み』(日本経済新聞出版社、2004年)
- 秋山弘子『長寿の時代、あらゆる方面で有益な「ジェロントロジー」』『高齢社会ジャーナル』インタビュー記事(CMPジャパン、2008年)
- 朝日新聞社『都道府県ランキング くらしデータブック』(朝日新聞社、2001年)
- 朝日新聞「ロストジェネレーション」取材班『ロストジェネレーション—さまよう2000万人』(朝日新聞社、2007年)
- 東浩紀、北田暁大編『思想地図 vol. 2』(日本放送出版協会、2008年)
- 厚美尚武『「食」の大戦争—売れる仕組みはこう創る』(東洋経済新報社、2005年)
- 雨宮処凛『プレカリアート—デジタル日雇い世代の不安な生き方』(洋泉社、2007年)
- 荒井一博『学歴社会の法則 教育を経済学から見直す』(光文社、2007年)
- 飯尾潤『政局から政策へ—日本政治の成熟と転換』(NTT出版、2008年)
- 五百旗頭真『歴史としての現代日本』(千倉書房、2008年)
- 石川九楊『逆耳の言 日本とはどういう国か』(半球コミュニケーションズ、1998年)
- 石川義孝『人口減少と地域—地理学のアプローチ』(京都大学学術出版会、2007年)
- 五十嵐敬喜『美しい都市と祈り』(学芸出版社、2006年)
- 池上彰『ニッポン、ほんとに格差社会?』(小学館、2006年)
- 伊東俊太郎『講座・比較文化<第7巻> 日本人の価値観』(研究社、1976年)
- 伊藤元重『リーディングス 格差を考える』(日本経済新聞出版社、2008年)
- 稲場圭信『思いやり格差が日本をダメにする—支え合う社会をつくる8つのアプローチ』(日本放送出版協会、2008年)
- 稲葉振一郎『「公共性」論』(NTT出版、2008年)
- 今枝由郎『ブータンに魅せられて』(岩波書店、2008年)
- 今村仁司 他編『岩波社会思想事典』(岩波書店、2008年)
- 今村奈良臣『国際化時代の日本農業—車座になって経済革新を考える』(農山漁村文化協会、1988年)
- 岩崎信彦他『地域社会学講座』(東信堂、2006年)
- 岩田規久男『「小さな政府」を問いなおす』(筑摩書房、2006年)
- 岩本康志編『社会福祉と家族の経済学』(東洋経済新報社、2001年)
- 上山信一、松森隆一『行政の解体と再生』(東洋経済新報社、2008年)
- 内田樹『こんな日本でよかったね—構造主義的日本論』(バジリコ、2008年)
- 宇宙航空研究開発機構(JAXA)研究レポート
- 宇野重規『政治哲学へ—現代フランスとの対話』(東京大学出版会、2004年)
- 宇野重規『トクヴィル 平等と不平等の理論家』(講談社選書チメエ、2007年)
- 江口克彦『2025年伊野辺家の1日—イノベーションで日本はこう変わる!』(PHP研究所、2007年)
- 大江正章『地域の力 食・農・まちづくり』(岩波書店、2008年)
- 大石久和『国文学事始め』(毎日新聞社、2006年)
- 大泉啓一郎『老いてゆくアジア—繁栄の構図が変わるとき』(中央公論新社、2007年)
- 大澤勝次、今井裕『食の未来を考える』(岩波書店、2003年)
- 大澤真幸『不可能性の時代』(岩波書店、2008年)
- 大沢真知子『新しい家族のための経済学—変わりゆく企業社会の中の女性』(中央公論社、1998年)
- 大沢真知子『ワークライフシナジー—生活と仕事の“相互作用”が変える企業社会』(岩波書店、2008年)
- 大沢真知子『ワークライフバランス社会へ—個人が主役の働き方』(岩波書店、2006年)
- 大沢真知子、原田順子『21世紀の女性と仕事』(放送大学教育振興会、2006年)
- 大沢真理『現代日本の生活保障システム』(岩波書店、2007年)
- 大竹文雄『格差と希望』(筑摩書房、2008年)
- 大塚久雄『社会科学における人間』(岩波書店、2006年)
- 大日向雅美『母性愛神話とのたたかい』(草土文化、2002年)
- 岡田知弘他『国際化時代の地域経済学』(有斐閣、2007年)
- 岡庭昇編『食べる米がなくなる!—農業現場から緊急告発』(エース企画出版、1983年)
- 岡本薫『日本を減らす教育論議』(講談社、2006年)
- 岡本祐三『高齢者医療と福祉』(岩波書店、2000年)
- 奥野翔『森の都市』(彰国社、2007年)
- 小倉康嗣『高齢化社会と日本人の生き方—岐路に立つ現代中年のライフストーリー』(慶應義塾大学出版会、2006年)
- 小滝敏之『市民社会と近隣自治—小さな自治から大きな未来へ』(公人社、2007年)

- 落谷恵美子『近代家族の曲がり角』（角川書店、2000年）
- 落谷恵美子『21世紀家族へー家族の戦後大勢の見かた・超えかた』（有斐閣、1994年）
- 恩賜財団母子愛育会編『日本子ども資料年鑑2009』（KTC中央出版、2009年）
- 春日井道彦『ドイツのまちづくり』（学芸出版社、2004年）
- 片木淳・藤井浩司編『地域づくり新戦略ー自治体格差時代を生き抜く』（一藝社、2008年）
- 加藤久和『人口経済学』（日本経済新聞出版社、2007年）
- 門脇厚司『子どもの社会力』（岩波書店、1999年）
- 金子郁容『学校評価ー情報共有のデザインとツール』（筑摩書房、2005年）
- 金子郁容『日本で「一番いい」学校ー地域連携のイノベーション』（岩波書店、2008年）
- 鎌田実「高齢社会のモビリティ構築に向けて」ジェロントロジーセミナー資料（2007年）
- 神谷浩夫他 OECD『地図でみる世界の地域格差ー都市集中と地域発展の国際比較』（明石書店、2008年）
- 神永正博『学力低下は錯覚である』（森北出版、2008年）
- 刈谷剛彦『大衆教育社会のゆくえー学歴主義と平等神話の戦後史』（中央公論社、1995年）
- 刈谷剛彦『階層化日本と教育危機ー不平等再生産から意欲格差社会へ』（有信堂高文社、2001年）
- 刈谷剛彦・増田ユリヤ『欲ばり過ぎる ニッポンの教育』（講談社、2006年）
- 河合隼雄『大人になることのむずかしさ』（岩波書店、1983年）
- 河合隼雄『これからの日本』（潮出版社、2000年）
- 河合隼雄『青春の夢と遊び』（岩波書店、1994年）
- 川勝平太『文化力 日本の底力』（ウェッジ、2006年）
- 川勝平太・鶴見和子『「内発的発展」とは何かー新しい学問に向けて』（藤原書店、2008年）
- 河野綱果『人口学への招待』（中央公論新社、2007年）
- 川又三智彦『2020年の日本からの警告』（光文社、2007年）
- 関西大学経済・政治研究所『調査と資料<第20号> 日本人の価値観の構造と変容』（同朋社、1976年）
- 神庭重信『こころと体の対話ー精神免疫学の世界』（文芸春秋、1999年）
- 菊池恭二『宮大工の人育てー木も人も「癖」があるから面白い』（祥伝社、2008年）
- 気象庁「気候変動監視レポート2007」
- 橘川武郎『資源小国のエネルギー産業』（芙蓉書房出版、2009年）
- 工藤庸子・岩永雅也『大人のための「学問のススメ」』（講談社、2007年）
- 経済産業省「ソーシャルビジネス研究会報告書」
- 経済産業省資源エネルギー庁「長期エネルギー需給見通し」
- 経済産業省資源エネルギー庁「ナノテク関連市場規模動向調査」
- 警察庁「犯罪統計書」
- 玄田有史『希望学』（中央公論新社、2006年）
- 玄田有史『仕事のなかの曖昧な不安ー揺れる若者の現在』（中公文庫、2005年）
- 玄田有史『14歳からの仕事道』（理論社、2005年）
- 玄田有史『ジョブ・クリエーション』（日本経済新聞社、2004年）
- 玄田有史『働く過剰』（NTT出版株式会社、2005年）
- 玄田有史、小杉礼子、労働政策研究研修機構『子どもがニートになったら』（生活人新書、2005年）
- 玄田有史、斎藤珠理『仕事とセックスのあいだ』（朝日新書、2007年）
- 玄田有史、曲沼美穂『ニートフリーターでもなく失業者でもなく』（幻冬舎文庫、2006年）
- 厚生労働省「水道統計 施設・業務編」
- 厚生労働省「都道府県別生命表」
- 厚生労働省「人口動態統計」
- 厚生労働省「全国簡易水道統計」
- 厚生労働省「平成12年保健福祉動向調査」
- 厚生労働省「平成18年国民健康・栄養調査」
- 厚生労働省「福祉行政報告例」
- 厚生労働省「毎月勤労統計調査」
- 厚東洋輔『モダニティの社会学ーポストモダンからグローバリゼーションへ』（ミネルヴァ書房、2006年）
- 高齢者介護研究会「2015年の高齢者介護」（厚生労働省、2003年）
- 国際連合「生活用水需要量将来見通し」
- 国土交通省道路局「道路統計年報」
- 国立社会保障・人口問題研究所「超少子化と家族・社会の変容ーヨーロッパの経験と日本の政策課題」『人口問題研究64-2』（2008年）
- 国立社会保障・人口問題研究所『日本の人口減少社会を読み解くー最新データからみる少子高齢化』（中央法規出版、2008年）
- 国立社会保障・人口問題研究所「日本の世帯数の将来推計（都道府県別推計）」
- 国立社会保障・人口問題研究所「日本の都道府県別将来推計人口ー（平成19年5月推計）」（2007年）
- 児島和人『現代社会とメディア・家族・世代』（新曜社、2008年）

- 小島慶三『文明としての農業—生命産業コンプレックスの提唱』（ダイヤモンド社、1990年）
- 後藤和子『文化政策学—法・経済・マネジメント』（有斐閣、2001年）
- 後藤和子『文化と都市の公共政策創造的産業と新しい都市政策の構想』（有斐閣、2005年）
- 小林雅之『進学格差—深刻化する教育費負担』（筑摩書房、2008年）
- 小原雅博『東アジア共同体—強化する中国と日本の戦略』（日本経済新聞社、2005年）
- 小峰隆夫・日本経済研究センター編『超長期予測 老いるアジア—変貌する世界人口・経済地図』（日本経済新聞出版社、2007年）
- 小宮山宏『「課題先進国」日本』（中央公論新社、2007年）
- 小森田秋夫『市場経済化の法社会学』（有信堂高文社、2001年）
- 財団法人生命保険文化センター『日本人の生活価値観 1991 報告書』（財団法人生命保険文化センター、1992年）
- 財団法人生命保険文化センター『日本人の生活価値観 1996 報告書』（財団法人生命保険文化センター、1997年）
- 財団法人生命保険文化センター、野村総合研究所『日本人の生活価値観調査報告書』（東洋経済新報社、1991年）
- 財団法人矢野恒太記念会編『数字で見る 日本の100年』（財団法人矢野恒太記念会、2006年）
- 財団法人矢野恒太記念会編『世界国政図会』（財団法人矢野恒太記念会、2007年）
- 財団法人矢野恒太記念会編『日本国政図会』（財団法人矢野恒太記念会、2008年）
- 財団法人自動車検査登録情報協会
- 齋藤孝『教育力』（岩波書店、2007年）
- 齋藤孝・梅田望夫『私塾のすすめ—ここから創造が生まれる』（筑摩書房、2008年）
- 齋藤環『社会的ひきこもり—終わらない思春期』（PHP 研究所、1998年）
- 堺屋太一『これからの十年日本大好機』（日本経済新聞出版社、2007年）
- 堺屋太一『大激震』（実業之日本社、2008年）
- 堺屋太一『団塊の世代』（文藝春秋、2005年）
- 堺屋太一『知価革命』（PHP 研究所、1990年）
- 堺屋太一編『人生の「秋」の生き方—「後半の幸せ」とは何か』（PHP 研究所、2008年）
- 榊原英資『没落からの逆転—グローバル時代の差別化戦略』（中央公論新社、2008年）
- 佐藤卓己『テレビの教養—億総博知化への系譜』（NTT 出版、2008年）
- 佐藤学『学校の挑戦—学びの共同体を創る』（小学館、2006年）
- 佐藤学『「学び」から逃走する子どもたち』（岩波書店、2000年）
- 佐藤友美子編著『成熟し、人はますます若くなる』（NTT 出版、2008年）
- 佐々木信夫『自治体をどう変えるか』（筑摩書房、2006年）
- 佐々木陽一編『元気なまちのスゴイしなげ—地域経済を活性化する全国24の事例に学ぶ』（PHP 研究所、2006年）
- 佐貫浩・世取山洋介編『新自由主義教育改革 その理論・実態と対抗軸』（大月書店、2008年）
- 実川真由・実川元子『受けてみたフィンランドの教育』（文藝春秋、2007年）
- 鮫島敬治・日本経済研究センター『2020年の中国—政治・外交・経済・産業の将来を読む』（日本経済新聞社、2000年）
- 佐和隆光『この国の未来へ—持続可能で「豊か」な社会』（筑摩書房、2007年）
- 佐和隆光『市場主義の終焉』（岩波書店、2000年）
- 産経新聞社未来史閲覧取材班『未来史閲覧』（産経新聞ニュースサービス、1996年）
- 産経新聞社未来史閲覧取材班『未来史閲覧<2>』（産経新聞ニュースサービス、1997年）
- 塩川正十郎『2020年日本のあり方—21世紀世代への7つの提言』（東洋経済新報社、2008年）
- 静岡県『日本改革 静岡県からの提案』（静岡新聞社、2006年）
- 篠原一『市民の政治学—討議デモクラシーとは何か』（岩波書店、2004年）
- 柴田明夫『食糧争奪』（日本経済新聞出版社、2007年）
- 柴田明夫『水戦争—水資源争奪の最終戦争が始まった』（角川 SS コミュニケーションズ、2007年）
- 社団法人自動車技術会『2030年自動車はこうなる』（社団法人自動車技術会、2007年）
- ジャパン・リーダーズ・カレッジ『普通の国民が考えたニッポン』（小学館スクウェア、2006年）
- 白石賢・白石小百合『幸福度研究の現状と課題—少子化との関連において』（内閣府経済社会総合研究所、2006年）
- 白波瀬佐和子『少子高齢社会のみえない格差—ジェンダー・世代・階層のゆくえ』（東京大学出版会、2005年）
- 関満博『地方圏の産業振興と中山間地域』（新評論、2007年）
- 陣内雄次ほか『コミュニティ・カフェと市民育ち—あなたにもできる地域の縁側づくり』（萌文社、2007年）
- 神野直彦『人間回復の経済学』（岩波書店、2002年）
- 鈴木謙介『サブカル・ニッポンの新自由主義—既得権批判が若者を追い込む』（筑摩書房、2008年）
- 鈴木宣弘『FTA と日本の食料農業』（筑摩書房、2004年）
- 成美堂出版編集部『今がわかる時代がわかる日本地図 2007年版』（成美堂出版、2006年）
- 成美堂出版編集部『今がわかる時代がわかる日本地図 2008年版』（成美堂出版、2007年）
- 成美堂出版編集部『今がわかる時代がわかる世界地図 2009年版』（成美堂出版、2008年）
- 瀬地山角『東アジアの家父長制—ジェンダーの比較社会学』（勁草書房、1996年）
- 世界経済フォーラム『Global Risks 2008』（世界経済フォーラム、2008年）
- 全国簡易水道協議会『全国簡易水道統計』（全国簡易水道協議会）

- 総合資源エネルギー調査会「長期エネルギー需給見通し」（総合資源エネルギー調査会、2008年）
- 総務省「国勢調査」
- 総務省「社会生活基本調査」
- 総務省「就業構造基本調査」
- 総務省「消費者物価指数」
- 袖川芳之・田邊健「幸福度に関する研究～経済的ゆたかさは幸福と関係があるか～」(内閣府経済社会総合研究所、2007年)
- 園田恭一、西村昌樹『ソーシャル・インクルージョンの社会福祉―新しい“つながり”を求めて』(ミネルヴァ書房、2008年)
- 菌部澄『よみがえる昭和の記憶1 東海北陸の記録』(アーカイブス出版、2007年)
- 第2期愛知県科学技術基本計画策定委員会「第2期愛知県科学技術基本計画」(愛知県、2006年)
- 高橋敏『江戸の教育力』(筑摩書房、2007年)
- 瀧井宏臣『「教育七五三」の現場から』(祥伝社、2008年)
- 竹内薫『一年は、なぜ年々速くなるのか』(青春出版社、2008年)
- 竹内宏『エコノミストたちの栄光と挫折』(東洋経済新報社、2008年)
- 武川正吾『地域福祉の主流化 福祉国家と市民社会Ⅲ』(法律文化社、2006年)
- 武川正吾『連帯と承認―グローバル化と個人化のなかの福祉国家』(東京大学出版会、2007年)
- 武田晴人『高度成長』(岩波書店、2008年)
- 田坂広志『これからは何が起きるのか』(PHP研究所、2006年)
- 田坂広志『未来を予見する「5つの法則」―弁証法的思考で読む次なる「変化」』(光文社、2008年)
- 高木勝『図解「人口減少」日本 経済・金融・社会はこうなる!』(実業之日本社、2006年)
- 高橋徹『日本人の価値観・世界ランキング』(中央公論新社、2003年)
- 高橋信正『田舎のちから』(昭和堂、2007年)
- 高橋乗宣『世界が日本を必要としている―原油高・為替に一喜一憂せずに大局をつかめ』(ビジネス社、2006年)
- 柘植智幸『「ゆとり教育世代」の恐怖』(PHPペーパーバック、2008年)
- 谷岡一郎編『日本人の意識と行動―日本版総合的社会調査JGSSによる分析』(東京大学出版会、2008年)
- 谷口正和『2010年革命―団塊の世代が会社から消える日』(講談社、2004年)
- 田村明『まちづくりと景観』(岩波書店、2005年)
- 田村秀『自治体格差が国を滅ぼす』(集英社、2007年)
- 太郎丸博『フリーターとニートの社会学』(世界思想社、2006年)
- 地域コミュニティづくり研究会『自立型地域コミュニティへの道―人口減少に負けない豊かで元気な地域をつくる』(ぎょうせい、2004年)
- 電通総研、日本リサーチセンター『世界主要国価値観データブック』(同友館、2008年)
- 電通総研、余暇開発センター編『世界23カ国 価値観データブック』(同友館、1999年)
- 東京大学社会科学研究所シリーズNO. 27 社会科学と人類学の希望についての対話から 希望学ワークショップの記録(2008年)
- 東京大学社会科学研究所シリーズNO. 30 希望学国際コンファレンス「希望と社会の新たな地平へ」全記録(2008年)
- 東京大学社会科学研究所シリーズNO. 31 地方政治家の肖像―2006年岩手県釜石市議会議員インタビュー記録(2008年)
- 東京大学社会科学研究所シリーズNO. 34 希望をめぐる対話―かたりべ、支え手、興し手、伝え手たち(2009年)
- 東京学生教育フォーラム『学生による教育再生会議』(平凡社、2007年)
- 堂目卓生『アダム・スミス』(中央公論新社、2008年)
- 富樫幸一他『人口減少時代の地方都市再生』(古今書院、2007年)
- 徳野貞雄『農村の幸せ(ムラ)、都会(マチ)の幸せ―家族・食・暮らし』(日本放送出版協会、2007年)
- 独立行政法人科学技術振興機構 JST パーチャル科学館「未来技術年表」<http://jvsc.jst.go.jp/shiryo/yosoku/> (独立行政法人科学技術振興機構)
- 独立行政法人国立青少年教育振興機構「青少年の自然体験活動等に関する実態調査報告書」(2006年)
- 都市再生研究所「2050年のニッポン・ハッピー化計画―フランスに学ぶ少子化対策」(都市再生研究所、2007年)
- 戸田忠雄『学校は誰のものか 学習者主権をめざして』(講談社、2007年)
- 鳥羽賢『日本人の平均値』(生活情報センター、2005年)
- 内閣府「イノベーション25」(2007年)
- 内閣府「国民生活白書(平成19年度版)」(2007年)
- 内閣府「国民生活選好度調査」(1985年、1994年、2007年)
- 内閣府編「日本21世紀ビジョン」(国立印刷局、2005年)
- 中井浩一『大学入試の戦後史 受験地獄から全入時代へ』(中央公論新社、2007年)
- 中江克己『江戸の躰と子育て』(祥伝社、2007年)
- 中島恵理『英国の持続可能な地域づくり―パートナーシップとローカリゼーション』(学芸出版社、2005年)
- 中谷巖『資本主義はなぜ自壊したのか―「日本」再生への提言』(集英社、2008年)
- 中田実『地域分権時代の町内会・自治会』(自治体研究会、2007年)
- 中西準子『水の世界戦略』(岩波書店、1994年)
- 中西輝政『覇権の終焉―アメリカ衰退後の世界情勢を読み解く』(PHP研究所、2008年)
- 仲正昌樹『集中講義! 日本の現代思想―ポストモダンとは何だったのか』(日本放送出版協会、2006年)
- 中俣均編『国土空間と地域社会(シリーズ人文地理学9)』(朝倉書店、2004年)

- 中村民雄他『東アジア共同体憲草案－実現可能な未来をひらく議論のために』（昭和堂、2008年）
- 中村尚史「地方の希望：希望学・釜石調査の概要」『社会科学研究』59（東京大学社会科学研究所、2002年）
- 中村靖彦「ウォータービジネス」（岩波書店、2004年）
- 二宮皓編著『世界の学校－教育制度から日常の学校風景まで』（学事出版、2006年）
- 日本デザイン機構『クルマ社会のリ・デザイン－近未来モビリティへの提案』（鹿島出版会、2004年）
- 日本学術会議イノベーション推進検討委員会報告「科学者コミュニティーが描く未来の社会」（2007年）
- 日本経済新聞社編『されど成長』（日本経済新聞出版社、2008年）
- 日本経済新聞社『少子に挑む－「脱・人口減少」への最後の選択』（日本経済新聞出版社、2005年）
- 日本経済新聞社『人口減少 新しい日本をつくる』（日本経済新聞社、2006年）
- 日本経済新聞社編『2020年からの警鐘－日本が消える』（日本経済新聞出版社、1997年）
- 日本経済新聞社編『2020年からの警鐘＜2＞－怠慢な日本人』（日本経済新聞出版社、1997年）
- 日本経済新聞社編『2020年からの警鐘＜3＞完結篇－「終わり」からの出発』（日本経済新聞出版社、1998年）
- 日本経済新聞社『日経大予測〔2006年版〕』（日本経済新聞出版社、2005年）
- 日本経済新聞社『日経大予測〔2009年版〕』（日本経済新聞出版社、2008年）
- 日本総合研究所、楽天リサーチ「二地域居住実践者の実態アンケート」（日本総合研究所、楽天リサーチ、2006年）
- 日本地域開発センター編『日本人の価値観』（至誠堂、1970年）
- 『日本の論点』編集部編『10年後の日本』（文藝春秋、2006年）
- 『日本の論点』編集部編『10年後のあなた』（文藝春秋、2007年）
- 日本の未来研究会『大予測日本の3年後、5年後、10年後』（講談社、2006年）
- 日本貿易会「2015年アジア」特別研究会『2015年アジアの未来』（東洋経済新報社、2006年）
- ニュース・リテラシー研究所『図解まるわかり時事用語』（新星出版社、2007年）
- 根井雅弘『わかる現代経済学』（朝日新聞出版、2007年）
- 根本浩『ゆとり教育は本当に死んだのか？』（角川SSコミュニケーションズ、2007年）
- 農林水産省『「遺伝子組換え農産物」ステップアップ編』（農林水産省、2008年）
- 農林水産省「遺伝子組換え農産物をめぐる状況について」（農林水産省）
- 農林水産省「海外食料需給レポート2007」（農林水産省、2008年）
- 農林水産省「食糧需給」
- 農林中金総合研究所『食料を持たない日本経済－農業・農村の再生を考える』（東洋経済新報社、1993年）
- 野上暁『子ども学 その源流へ』（大月書店、2008年）
- 野口定久『地域福祉論』（ミネルヴァ書房、2008年）
- 野々山久也『現代家族のパラダイム革新－直系制家族・夫婦制家族から合意制家族へ』（東京大学出版会、2007年）
- 野村総合研究所 社会産業研究本部『変わりゆく日本人－生活者一人にみる日本人の意識と行動』（野村総合研究所、1998年）
- 野村総合研究所 2015年プロジェクトチーム『2015年の日本－新たな「開国」の時代へ』（東洋経済新報社、2008年）
- 野村総合研究所、山田澤明他『2010年の日本－雇用社会から起業社会へ』（東洋経済新報社、2007年）
- 野村総合研究所ほか『続・変わりゆく日本人－生活者一人にみる日本人の価値観・消費行動』（野村総合研究所広報部、2001年）
- 芳賀経『威風堂々の指導者たち』（清流出版、2008年）
- 博報堂生活総合研究所『生活定点分析レポート（生活潮流1992－2008）』（博報堂生活総合研究所、2008年）
- 博報堂生活総合研究所『末子度－末子年齢で切る5層の女性たち』（博報堂、2002年）
- 橋本治『日本の行く道』（集英社、2007年）
- 橋本枳摩『ポケット解説 人口減少と格差社会－経済と社会の未来図を描く』（秀和システム、2006年）
- 早川勇『英語になった日本語』（春風社、2006年）
- 林信吾『イギリス型〈豊かさ〉の真実』（講談社、2009年）
- 葉養正明『よみがえれ公立学校－地域の核としての新しい学校作り』（紫峰図書、2006年）
- 葉養正明編『学校と地域のきずな－シリーズ子どもと教育の社会学〈4〉』（教育出版、2000年）
- 疋田正博編『食を育む水－食の文化フォーラム〈25〉』（ドメス出版、2007年）
- 樋口美雄編著『日本型ワークシェアリングの実践』（生産性出版、2002年）
- 平尾俊郎『二十年後－くらしの未来図』（新潮社、2004年）
- 平山修一『美しい国ブータン』（リヨン社、2007年）
- 広井良典『遺伝子の技術、遺伝子の思想－医療の変容と高齢化社会』（中央公論社、1996年）
- 広井良典『医療保険改革の構想』（日本経済新聞社、1997年）
- 広井良典『ケア学－越境するケアへ』（医学書院、2000年）
- 広井良典『ケアを問い直す－〈深層の時間〉と高齢化社会』（筑摩書房、1997年）
- 広井良典『死生観を問いなおす』（筑摩書房、2001年）
- 広井良典『持続可能な福祉社会－「もう一つの日本」の構想』（筑摩書房、2006年）
- 広井良典『生命の政治学－福祉国家・エコロジー・生命倫理』（岩波書店、2003年）
- 広井良典『脱「ア」入欧－アメリカは本当に「自由」の国か』（NTT出版、2004年）
- 広井良典『定常型社会－新しい「豊かさ」の構想』（岩波書店、2001年）

- 広井良典『日本の社会保障』（岩波書店、1999年）
 広井良典・駒村康平『アジアの社会保障』（東京大学出版会、2003年）
 広田照幸『教育には何ができないか』（春秋社、2003年）
 広田照幸『教育不信と教育依存の時代』（紀伊国屋書店、2005年）
 広田照幸『思考のフロンティア 教育』（岩波書店、2004年）
 広田照幸『日本人のしつけは衰退したか 「教育する家族」のゆくえ』（講談社、1999年）
 廣渡清吾『希望：変わること、変えること—希望についてのいくつかのテーゼ』（2007年）
 廣渡清吾『市民社会と法』（放送大学教育振興会、2008年）
 廣渡清吾『法システムⅡ 比較法社会論—日本とドイツを中心に—』（放送大学教育振興会、2007年）
 フォーラム21・明日の健やかな日本を考える会『背景 総理大臣殿 これが日本を元気にする処方箋です』（東洋経済新報社、2008年）
 福井県「県政マーケティング調査」
 福井県「福井県農林水産統計年報」
 福井県「福井県統計年鑑」
 福井県「福井県林業統計書」
 福井県「平成16年観光客動向調査結果」
 福井県健康増進課「平成18年度県民健康・栄養調査」
 福井県広報課「グラフクイ」
 福井県新幹線建設推進課資料
 福井県スポーツ保健課「H19 食育アンケート 児童・生徒編」
 福井県政策統計課「福井県学校保健統計調査」
 福井県総務部政策統計室「人口減少社会における「団塊の世代」の活用について」（福井県、2005年）
 福井県都市計画課「平成17年福井と試験パーソントリップ調査」
 福井県農林水産部「農林漁業の動き」
 福井市「自治会に関するアンケート」
 福田成美『デンマークの環境に優しい街づくり』（新評論、1999年）
 福地誠『教育格差が日本を没落させる』（洋泉社、2008年）
 福地誠『教育格差絶望社会』（洋泉社、2006年）
 藤田英典『義務教育を問いなおす』（筑摩書店、2005年）
 藤田英典編『誰のための「教育再生」か』（岩波書店、2007年）
 藤原和博『公立校の逆襲 いい学校をつくる』（朝日新聞社、2004年）
 古田隆彦『日本人はどこまで減るか—人口減少社会のパラダイム・シフト』（幻冬舎、2008年）
 古田隆彦『「増子・中年化」社会のマーケティング—人口減少をチャンスに変える40の戦略』（生産性出版、2008年）
 文藝春秋『日本の論点2009』（文藝春秋、2008年）
 文春新書編集部編『論争 若者論』（文芸春秋、2008年）
 ベネッセ教育研究開発センター「第3回子育て生活基本調査」（ベネッセ教育研究開発センター、2008年）
 本間義人『地域再生の条件』（岩波書店、2007年）
 堀田力『「人間力」の育て方』（集英社、2007年）
 堀内都喜子『フィンランド豊かさのメソッド』（集英社、2008年）
 本田和子『子どもが忌避される時代—なぜ子どもは生まれにくくなったのか』（新曜社、2007年）
 舞田敏彦『47都道府県の子どもたち あなたの県の子どもを診断する』（武蔵野大学出版会、2008年）
 真木悠介『現代社会の存立構造』（筑摩書房、1977年）
 真木悠介『自我の起源』（岩波書店、1993年）
 牧野篤『<わたし>の再構築と社会・生涯教育—グローバル化・少子高齢社会・そして大学』（大学教育出版、2005年）
 増田直紀『私たちはどうつながっているのか ネットワークの科学を応用する』（中央公論新社、2007年）
 増田ユリヤ「学力世界—フィンランド流「教師の育て方」」『世界』779号（岩波書店、2008年）
 松浦良高『新・中国若者マーケット ターゲットは80后』（弘文堂、2008年）
 松尾尊兌編『石橋湛山評論集』（岩波書店、1984年）
 松岡正剛『白川静—漢字の世界観』（平凡社、2008年）
 松田雅央『環境先進国ドイツの今—緑とトラムの街カールスルーエから』（学芸出版社、2004年）
 松田雅央『ドイツ 人が主役のまちづくり—ボランティア大国を支える市民活動』（学芸出版社、2007年）
 松谷明彦『2020年の日本人—人口減少時代をどう生きる』（日本経済新聞出版社、2005年）
 松永安光他『地域づくりの新潮流—スローシティ アグリツーリズム ネットワーク』（彰国社、2007年）
 三浦展『格差が遺伝する！—子どもの下流化を防ぐには』（宝島社、2007年）
 三浦展『「かまやつ女」の時代—女性格差社会の到来』（牧野出版、2005年）
 三浦朱門『常識として知っておきたい「世界の中の日本」』（海竜社、2007年）
 三神万里子『パラサイト・ミドルの衝撃—サラリーマン45歳の憂鬱』（NTT出版、2005年）
 水島信『ドイツ流まちづくり読本—ドイツの都市計画から日本の街づくりへ』（鹿島出版会、2006年）

- 見田宗介「近代の矛盾の「解凍」—脱高度成長期の精神変容—」『思想』（岩波書店、2007年）
- 見田宗介『現代社会の理論—情報化・消費化社会の現在と未来』（岩波書店、1996年）
- 見田宗介『社会学入門—人間と社会の未来』（岩波書店、2006年）
- 見田宗介編著『社会構想の社会学』（岩波書店、1996年）
- 三井森雁『世界が見る日本の魅力と通知表』（幻冬舎ルネッサンス、2008年）
- 三菱総合研究所産業・市場戦略研究本部編『全予測 2030年のニッポン—世界、技術、経済はこう変わる』（日本経済新聞出版社、2007年）
- 三菱総合研究所「地球環境・人間生活にかかわる農業及び森林の多面的な機能の評価に関する調査研究報告書」（三菱総合研究所、2001年）
- 三菱総合研究所編著『徹底予測 これが新成長ビジネスだ！』（日本経済新聞出版社、2007年）
- 三菱総合研究所地域経営研究センター編著『都市・地域の新潮流』（相模書房、2006年）
- 宮川公男編『シナリオ 2019—日本と世界の近未来を読む』（東洋経済新報社、2007年）
- 三好春樹『元気が出る介護術』（岩波書店、2002年）
- 宗田好史『にぎわいを呼ぶイタリアのまちづくり—歴史的景観の再生と商業政策』（学芸出版社、2000年）
- 村上陽一郎『科学・技術の二〇〇年をたどりなおす』（N T T出版、2008年）
- 村上敦『フライブルクのまちづくり—ソーシャル・エコロジー住宅地ヴォーバン』（学芸出版社、2007年）
- 村上明、森光康次郎 編『食と健康—情報のウラを読む』（丸善出版、2002年）
- 村上龍『希望の国のエクソダス』（文藝春秋、2002年）
- 藻谷浩介『実測！ニッポンの地域力』（日本経済新聞出版社、2007年）
- 望月真一『路面電車が街をつくる—21世紀フランスの都市づくり』（鹿島出版会、2001年）
- 森岡清志編『地域の社会学』（有斐閣、2008年）
- 文部科学省「OECD生徒の学習到達度調査—2006年調査国際結果の要約—」（文部科学省）
- 文部科学省「学校基本調査」
- 文部科学省「平成19年度版科学技術白書」（文部科学省、2007年）
- 安富歩『生きるための経済学』（日本放送出版協会、2008年）
- 山下一仁『農協の大罪「農政トライアングル」が招く日本の食糧不安』（宝島社、2009年）
- 山口定・神野直彦『2025年日本の構想』（岩波書店、2000年）
- 山崎正和『文明としての教育』（新潮社、2007年）
- 山重慎二他編著『日本の交通ネットワーク』（中央経済社、2007年）
- 山田昌弘『希望格差社会「負け組」の絶望感が日本を引き裂く』（筑摩書房、2004年）
- 山田昌弘『近代家族のゆくえ—家族と愛情のパラドックス』（新曜社、1994年）
- 山田昌弘『少子社会日本』（岩波書店、2007年）
- 山田昌弘『パラサイトシングル時代』（筑摩書房、1999年）
- 山田昌弘『迷走する家族—戦後家族モデルの形成と解体』（有斐閣、2005年）
- 山井和則『体験ルポ 日本の高齢者福祉』（岩波書店、2000年）
- 湯浅誠『反貧困—「すべり台社会」からの脱出』（岩波書店、2008年）
- 湯川英明「バイオ燃料を取り巻く世界の状況と財団法人地球環境産業技術研究機構（RITE）の研究開発」（財団法人地球環境産業技術研究機構微生物グループ、2007年）
- 湯沢雍彦、宮本みち子『新盤データで読む家族問題』（日本放送出版協会、2008年）
- 養老孟司『こまった人』（中央公論新社、2005年）
- 養老孟司『まともな人』（中央公論新社、2008年）
- 吉見俊哉『ポスト戦後社会』（岩波書店、2009年）
- リサーチ・アンド・ディベロップメント『こんなに変わった！日本人の欲求—バブル前夜から20年』（毎日新聞社、2003年）
- 渡辺利夫編、日本総合研究所調査部環太平洋戦略研究センター著『日本の東アジア戦略—共同体への期待と不安』（東洋経済新報社、2005年）
- 和田秀樹『少子化対策が日本をダメにする』（グラフ社、2007年）
- 和田秀樹『パラサイトダブルならうまくいく！』（PHP 研究所、2004年）
- 和田秀樹『まじめの崩壊』（筑摩書店、2009年）
- 渡部真『現代青少年の社会学—対話形式で考える37章』（世界思想社、2006年）
- 洋泉社MOOK『地方を殺すな！—ファスト風土化から“まち”を守れ』（洋泉社、2007年）

作 成 後 記

2007年（平成19年）6月に第1回の検討会を開催してから、18名のメンバーは、前報告書をどのような視点から見直すかの議論に最も時間を費やしてきました。

2年間、週1回のペースで議論を重ね、その中で、多くの有識者の方や大学の先生方、そして、若い学生のみなさんなどと意見交換をさせていただき、最新の知見や率直な意見をいただきながら、報告書の検討を進めてきました。

その結果、暮らし、希望、幸福、行動、世代などのキーワードや希望の輪、地域の幸福度（QOC）などの新たな考え方を得ることができました。

また、知事からも、様々な助言を受けました。

福井県に関心を持っていただき、また、我々の検討会に対して、ご助言・ご指導をいただいたすべての皆様方にお礼申し上げます。

私たち、福井県庁の中堅・若手職員の18名は、この福井が将来どのような姿になるのか、また、私たち自身や家族がどのように暮らしているのかを思い描きながら、検討を進めてきました。検討の途中では、2030年の福井に対する期待と不安が交錯したこともありました。

2年間の様々な議論を経て、私たちは、希望と幸福のつながる福井の姿を多くの方と共有したいという想いで、この報告書を完成させました。

検討会のメンバーにとっては、普段の仕事では手にしないような書籍を読み、様々な分野の方々と直接自由に忌憚のない意見を交換するという得がたい経験もできました。

最後に、ご協力をいただきました皆様方にあらためてお礼を申し上げますとともに、記載内容につきましては私どもの責に帰すものであることを明記しておきたいと思います。



ふくい2030年の姿・Ⅱ

— 私たちの暮らし つながる希望と幸福 —

発行日	2009（平成21）年3月31日
作成者	「ふくい2030年の姿」検討会
問合せ先	福井県総合政策部政策推進課 〒910-8580 福井市大手3丁目17-1 電話 0776-20-0226 FAX 0776-20-0623 E-mail seisaku@pref.fukui.lg.jp URL http://www.pref.fukui.jp/index.html

（無断で複製、送信、頒布等著作権を侵害する一切の行為を禁止します）